
IS × DMC ~Infinity Devil~

尾時山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS × DMC ~InfiniTy Devil~

【ノード】

N6331W

【作者名】

尾時山

【あらすじ】

ISと勘違いされ、「ダレッダノート」で入学した少年・神威悠李。正体は悪魔狩りを職業とする魔剣士であった。
「コピーだろ? が関係ない、僕が生きていることが、僕が存在する意味だ!」

「……はあ？」

間抜けな声が響く。ここは便利屋「Black Cherry」。

「ですから、あなたのお子さんを、ウチのHHS学園に入れたくて……」

「アイツ男だぜ？ HISとかも使えねエぞ？」

「いや、使えます。私は見ました。あの鎧を……」

つたぐ、と呟く男、神威 創龍。息子の入学を了承する為の交渉を持ち掛けられたが、彼は何故か解らない。

「だから、あればドレッドノートついつて……」

「ドレッドノートと言つヒトうのですね！ ……戦艦の様なあのタフさ、相応しい名前だ」

「聞けよ、オイ」

創龍は交渉人の顔を掴んだ。しかし、すぐメンドくもくなり、その手を離して、話をした。

「ウチは代々、悪魔の血を注いでるんだ。スパーダとか、クラウスの話、知ってるだろ？」「？」

「は？ 知りませんが……」

「知らねエのかよ。まあいい。取り敢えず、行かせりやいいんだろ、ウチの馬鹿悠季を」

悠季。創龍の義子である。クラウスの所謂「コピー」というモノで、創龍が昔、仕事で見付けた。

因みに、創龍はクラウスの実の息子だ。一人っ子であり、また、嫁も恋人もいない。相棒と、友人が一人ずつ、この便利屋にいるが。しかも、二人とも女性。

「行かせてやるよ。アイツにも、いい刺激になるだろうし。ただ、

I Sなんてのは持つてねエことは信じてくれ」

「あ、はあ……。ともかく、ありがとうございます」

本人の意志無しで、勝手に決めてしまった。

ここからだ、彼 悠季の人生に、花が咲き始めたのは。

Profile

氏名：神威 悠季
偽名：ランチア・ストラトス

IS：なし

登録上では「ドレッドノート」

身長：184cm

体重：65kg

髪型：黒のショートボーダー

目の色：水色

一人称：僕

性格：穏やか、冷静

年齢：一応16

誕生日：12/17（創龍が見付けた日）

人種：悪魔

【概要】

創龍が、依頼にてイギリス・バーミンガムにて見付け、義子とした。伝説の魔剣士・クラウスの「ヒーローとして生まれ、創龍に育てられた。

クラウスは悪魔であるため、彼も一応悪魔。そして、性格もクラウスと同じく穏やか。

物事を常に冷静に判断し、いつでも正確に行動する。
また、卓越した眼を持ち、人の心中などを探るのが得意。

彼のロイヤルガードの技「ドレッドノート」を発見され、ISと勘違いされ、入学させられた。

半分は、ISじゃないと分かっている創龍のせい。だが、本人も満更ではないらしい。

武器は、学園内では危なくないよう一応木刀を使っている。

しかし、本来はパイファー・ツエリスカの改造銃「デスイービル」と、魔剣・天上天下無双剣&#amp;闇魔刀（複製品）を使っている。

顔立ちは綺麗。二重の少し釣り眼。よくいうイケメン。

女運はそこそこ。ファンクラブまで出来た勢いだが、あまり興味はないらしい。一見細身に見えるが、意外と筋肉質。

画像はこちら

http://uta.ia/upbbs/data/1315755975-110912_0028%7E01.jpg

因みに偽名は悪魔狩りとバレない様にするため。学園で感づく人間もいるため、こちらを主に使っている。

偽名の考案は創龍。ネタはランチアの名車「ストラトス」より。

Mission 1 英の誇り

桜散り、吹き荒れる。その花びらが、紫の布に舞い落ちた。

「でつかい建物だな……」

黒紫のコートの下に、白を基調とした制服。その下に、黒のアンダーウェアを着込んだ、長身の男が一人。

彼こそ、女性のみが扱える兵器、ISを扱える”と勘違いされた”男、神威 悠季である。

魔剣士である父・神威創龍。それと同じ血を継いでいる息子という関係。だが、”捨て子”あり、また、生い立ちも不明だ。

馬鹿でかい校門を潜る。生徒玄関を見つけ、入ろうとするが、黒スーツの女性に声をかけられた。

「遅刻だぞ。しうがないかもしれんが」「あはは……。すいません」

教師の様な発言。スーツの女性が口を開く。

「神威 悠季。いや、ランチア・ストラトスだな、今は」「あ、ええ。そうです。偽名を使えと言われましたので」「神威 創龍は、裏で有名だからな。お前も知名度はあるが」

どんなに胡散臭い依頼を”進んで”受けた便利屋を、父親と経営

しているのだ。裏の危険な依頼を受け持つのが主。日常の依頼は滅多にない。

「E.S、無いんだろ？ 貴様のアーツ、とかいう物が勘違いされただけ、とか」

「まあ、そなんですよね」

悠季が苦笑い。その勘違いの所為で、結局、こんな所に入るハメになってしまった。

「忘れていた。私は、お前の担任、且つ、上の依頼伝達の織斑 千冬だ」

女性専用パワードスース・E.S。それを使って、空中戦を行う世界大会があるらしい。その第一回覇者が、この教師らしいのだが、あまり悠季は興味が無いようだ。

「この学園にも、お前がいう”悪魔”が出るかもしれん。その時のために、本名と偽名を使いこなせ、とのことだ。あまり表沙汰にしたくないことが多いのでな」

千冬の言つことは、要は「裏の人間なら隠蔽出来る」とのことだらう。その為にも、ランチアと悠季の名を用意したのだ。

「ストラトス。お前も、学園を守る一員になつていて。それを覚えておいてくれ」

千冬は無表情で言つた。悠季 いや、ランチアが、軽く頷く。

「では、ストラトス。入学式だ。行くぞ」

「あ、はい」

入学式の会場へと案内される。ストラトスは迷わないよう、気をつけて着いて行つた。

「度肝抜かれた……」

入学式が終わっても、体育館の大きさに、ランチアは驚きを隠せなかつた。あんなに入人が入つても、まだ余裕がある。

教室に戻つて來ても、室内の設備の充実を、そしてムサヒ、ランチアを動搖させる。

「ぞけんな、僕を驚きで殺す氣か

軽口を叩く。彼の得意技だ。

次第に他の生徒も來たので、指定された席に座る。担任の千冬に、副担任の山田 真耶がまず自己紹介をした。

世界覇者だけあつて、千冬の自己紹介の時に、女子から黄色い声援が上がつた。彼女は無愛想に制したが、真耶は慌てたようだつた。

「諸君らは、初め半月はI.Sの知識を座学で全て注ぎ込んでもらひう。勿論実技もあるが、I.Sは兵器であると言つことは忘れるな。それと、教師が言つたことは全てやれ、死んでもやれ、殺されてもやれ

鬼の様な発言。 千冬は本当に教師の自覚があるのか、と思つてしまつ。

「それと、これから過ごす仲間達を知るため、自己紹介をしてもらおう。出席番号の若い順から、立って自己紹介しろ」

ある意味、今日一番のメインイベントかもしない。生徒の声がまた上がった。

ランチアは机に突っ伏し、適当に自己紹介を聞き流すも、名前と顔だけは一致出来るようにした。

このクラスの田玉は二つある。一つは、男が一人いるところ。

ランチアと違い、正式に手を動かせる唯一の男の様だ。その名も、織斑一夏。千冬の弟だ。

もう一つ、トップで入試をクリアした留学生、セシリ亞・オルコットがいること。試験官を唯一倒したらしい。

ランチアは入試はパスで入った。

そういうのに興味はないのだが、それでも、知つておくべきことではあるだろう、とランチアは考えた。

「次だよ、君」

「ああ、はいはい」

近くの生徒がランチアに、彼の番が来たことを教えた。立ち上がり、無難に自己紹介を始めた。

「ランチア・ストラトス。イギリスはバーミンガム出身。趣味は特に無し。好きな物はピザ。よろしく」

無難というより、ぶつから棒だ。さっと椅子に座り、先程の体勢に戻る。

「あいつも男か……、よかつた……」

男一人じゃ心細い、と思つていた織斑一夏が安堵する。

それから、少しして、自己紹介タイムが終了し、休み時間へと入つた。

ランチアの予想通り、質問攻めが一夏とランチアに集中した。しかし、ランチア自身は適当に答えただけだった。

「音楽聴く？」

「メタルなら」

「特技は？」

「ないよ、そんなもん」

突つ伏しながらも、答えるだけ答える。顔が見えない、という女子もいたが、気にしない。

「美形だよね」

「はつ、どこが？」

含み笑いをして返す。顔を上げた時、ジロジロ顔面を見られる。

端正な顔立ち。一重瞼に、透き通ったスカイブルーの瞳。眉は細く長い。

輪郭もシャープで、顎が尖っている。評価としては、高い方だろう。

「顔だけで人を決めるモンじゃないよ。心を見なきや」

彼なりに、らしさと言葉を語つてこむつもつ。そつ語つと、また机に突つ伏した。

「 もう授業始まるよ。準備した方がいいんでない？」

ちょうどチャイムが鳴る。ランチアは筆記用具だけを出し、授業の用意をした。

一限目は、ISの基本情報の授業だった。

ISが生まれた経緯、不当な使い方をした場合や、今情報など。

山田先生が区切りを付け、生徒に質問する。ランチアは今の話の要点だけを記憶しつつ、片手でシャーペンを回した。

「今まで、解らない所がある人はいますか？」

「どや顔とまではいかないものの、胸を張つて聞いている。
手が一つだけ上がった。どうやら一夏の手の様だ。山田先生が一
夏に問う。

「織斑くん、どこが解りませんか？」

「ほとんどわかりません」

「あの……、入学前に渡された参考書を見ていれば、解るんですけど

……」

「古い電話帳と間違つて捨てました」

新しいボケか。しかし、本人の様子からして、事実らしい。教室の時間が少し止まった。

時間差で、一夏の顔に出席簿が飛んできた。見事に命中、彼は顔を抑えた。

「馬鹿者。再発行してやるから、放課後、残つて山田先生と私とで

補修だ

投擲者は千冬。意外と真剣に言つた。

「いいか。ISは”兵器”なんだ。知識を持たずには使えば、必ず事故に、仲間共々巻き込まれる。もう一度言ひ。ISは”兵器”だ。理解しなくとも、必ずこれは覚えておけ」

理解するための、今の授業じゃないのか？

ランチアは心中で突っ込んだ。力あるものがそれを自覚し、理解しなければ、己の身をも滅ぼす。そういう場を何度か見てきているからこそ、そう思った。

「で、では！これで授業を終わりますーー！」
「ありがとうございました」

一限目が終わる。終わると同時に、ランチアは立ち上がり、一夏の席ヘノートを持って移動した。

「ほら」
「へ？」
「貸してやるよ。わからないんだろ？」
「あ、ああ……。ありがとう、ストラトス」

ランチアの少しの優しさに、一夏は心からありがたく思つた。

「気にしないでいい。野郎一人なんだし、水入らずで仲良くしよう。あと、ランチアでいいよ」

優しさが笑顔にも出でている。まるで菩薩だ。

「ああ、よひしべ。俺も一夏でいいよ」
「遠慮なく呼ばせて貰うよ、一夏」

ランチアと一夏の仲は良好。それを影で見て、安心した千冬が廊下にいた。

その二人に近付く影。一夏が気付き、振り返ったが、ランチアはそちらを向かなかつた。

「ちょっと、よひじいかしら?」

「N o . H - m b u s y n o w .」

「あ?ビ?が?」

わざと英語で嘘を着ぐランチア。どうやら、声をかけて来たのはセシリア・オルコットらしい。

「嘘々。それで、何か用でもあるの、お嬢さん?」

「まあ!なんですの、そのお返事?わたくしに話しかけられる」とだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら?

といふが、あなた、こちらを向きなさい!」

お嬢様気質の性格だ。ランチアはやつとセシリアの方向を見た。
「何かな、僕と同じ、ブリテンのセシリア・オルコット嬢?」

実際、顔立ちは日本人だが。

「本来なら私の様な選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡なのよ。

……その現実を、もう少し理解していただける?」

「あー、はいはい。解りましたよオルコットさまー。僕達一人はあなたといられて光榮ですー」

「はいー」

嫌味っぽくランチアが言った。それに乗って、一夏が続く。別にこういう人間は嫌いではない。むしろ、面白みがあつて面白い。

「バカにしますか?」

「いや?」

肩を竦めるランチア。その動き一つ一つが、一夏にとつてツボに入つた。

「そ、それより……くつ……一つ、聞いていいか?」

「普通に話せ、普通に」

「下々の者の要求に答えるのも、貴族の勤め。よろしくてよ。

……あなた、本当に何をしていますの?」

セシリ亞の「貴族の勤め……」と同時に、ランチアが「貴族のつとめ」というボードゲームを取り出した。というか、どこから出したのだ、という疑問が湧く。

「1500円で購入しました。みんなもやってみてね!..」

「誰に言つてんだ、誰に。」

あと、入試つて、筆記あつたのか？」

「一夏のネタ発言、その2。まあ、参考書を捨てたぐらいだから、こんなのは予想できていた。

「はあ？ まさか、試験を受けていないとでも？」

「首席つていうから、点数があるのかとな。エラを使って戦うヤツなら出たぞ」

模擬戦の様な物か、ランチアは思った。実際、ランチア自身が試験すら受けていない。

「それ以外に、何が？ その試験で、唯一試験官を倒したのが、この私ですから」

「どや？」

胸を張り、どや顔のセシリア。それを強調する様に、ランチアはボケた。

「俺も倒したんだが、試験官」

「……へ？ 私一人つて……」

セシリアにとつて衝撃の事実。一夏は何食わぬ顔で続けた。

「女子限定か、もしくはそれを知らさなかつたかじやね？ いやあ、世界つて広いね！」

「貴族のつとめ」で自らを扇ぎながら、ランチアは言ひ。じゅうも可能性は高い。

「あなたは？」

「さあ？入試バスだから」

「それの方が凄いんじゃない？つか、もうチャイム鳴るぞ」

「ちょ……ま……ーくつー！」

悔しそうに言うが、時間は推す。

「次の時間も待ってなさい！いいですね！逃げないでくださいよー！」

はいはい、とセシリ亞に相槌を打ちながら、ランチアも自席に戻つた。

「今日は、戦闘における武装の特長や、戦闘スタイルについての授業だ。だが、その前に、クラス代表を決めたい」

教壇の千冬が言つ。ランチアが興味を持ち、伏せた顔を上げた。

「クラス代表は、生徒会の会議にも出席し、再来週行われるクラス対抗戦にも出場する、責任ある役職だ。いわば、クラス長だ」

「聞きたいのはそっちじゃない！――

期待ハズレ。どつでもいい、セシリ亞でも選んぢけ、ど思つランチア。しかし。

「はい、私、織斑くんを推薦します」

どこのかの女子が言つ。当の本人が困惑しているが、周りは気にせず続けた。

「候補に織斑一夏だな。他には？他薦でも、自薦でもいいぞ」

千冬の説明。まあ、面白そうだ、とランチアは思った。あいつなら、やらかしてくれそうだ。

「誰もいないのであれば、無条件で当選
納得が行きませんわ――」

でも、そんなに簡単には行かない。やはり、セシリ亞が黙つてい

なかつた。

「男がクラス代表など……。いい恥晒しですーーそのような屈辱を、一年間通して味わえとーー？」

「なら、自薦すりやよかつたじゃねエか……」

ランチアがぼそりと呟く。しかし、それが耳に聞こえたらしい。

「黙りなさい！実力からすれば、私が選ばれるのは当然……。なのに、珍しい」という、そんな理由だけで、こんな極東の猿と交易に決めるなど！」

「なら、ストラトスくんは？」

セシリアの意見を遮り、誰かがランチアを推薦した。千冬が苦い顔をし、ランチアはずつこけた。

「言い忘れていた。ストラトスは学園上の理由で、代表を務めることが出来ない」

「へ？」

千冬がその場凌ぎの嘘を言い始めた。周囲から、間抜けた声が上がった。

「なあ、ストラトス？」

「あ、はい。実は、学園長直々の授業がありまして、僕だけ抜き出されたんですよ。だから、余裕がないので」

ランチア自身も嘘を付く。学園長が誰かも知らないのだが。

「だから 失礼」

千冬が言いかけた途端、彼女のＰＨＳが鳴り出す。廊下に出て邪魔にならないよう通話し始めた。

50秒程で終わり、教室に入ると、ランチアを呼び出した。

「ちょうど、その時間の様です。では」

ドアを静かに開け、教室を出していく。

セシリアも聞かされていなかった。もしや、あの男もなかなかの手練れなのでは？

その疑いを持った途端、更に彼女のプライドは燃え上がった。

Mission 2 戲れ

千冬は、ランチアを連れ出し、今の連絡の内容を伝えようとした。だが、ランチア自体感づいていたようだ。

「悪魔、でしょ?」
「気付いていたのか」
「異質ですか?」

言つた途端、悠季としての顔を出した。

悠季が左手に石を握り込む様な形にする。ビックリともなく、黒塗りの鞘に収まつた日本刀が出て来た。

「どうやつた?

まあいい。場所は……まあ、わかるだろ?」

「はい。南20。ですね。余裕です」

悠季が近くの窓から飛び降りようとする。しかし、千冬はそれを止めた。

「倒す前に死んでどうする。それに、制服は脱げ
「え、脱いでいいなら」

返り血を浴びた時、制服だと色々マズイ。悠季はコートを渡し、制服だけ脱いで、「コートをまた着る。

「じゃ、行つてきます。あ、死にませんよ、大丈夫」

そういう、ひょいつ、と飛び降りていった。窓から下を覗きこんだ途端、悠季は壁を蹴り付け、前へと進み出す。

今、自分が見たものが信じられない。

「アイツは、本当の化け物だ。」

千冬の、悠季への認識が、その様になってしまった。

「おほつ、いたいた」

広い敷地無いの、森の様に入り組んでいる所に悪魔はいた。

ISを使って攻撃をしている様だが、全く当たりもしていない。

「あれは自動運転か？そんなんじゃ、仕留められないっての」

闇魔刀を構え、地上に降り立つ。四つん這いの、人間の様な顔をした生き物が、一斉に悠季を見た。

「ムシラね……。『与メつとい』」

片手に携帯。カシャリと音が鳴り、鮮明な画像が見れる。

その動作をしながら、爪で斬り掛かってきた一体のムシラを紙一重で避ける。後ろに着地した直後、閻魔刀の鞘を刺した。

「あーらよつと」

残り三体のムシラに、刺したそれを投げ付けた。間髪入れず、腰のホルスターに入っていた回転式拳銃を抜き、撃ち込む。

60口径のマグナム、ツエリスカ。それをモデルに改造したのが悠季の銃だ。名を「デスイービル」といい、本来シングルアクションのこの銃をダブルアクションにしたり、トリガーを長め、且つ滑り止め加工にしたり、グリップを変えたりしている。

「これだけじゃつまんないねえ」

片手でデスイービルを撃ちながら、死んでいくムシラに言った。数も少ないし、強くも無い。つまりは、手応えが無い。

「これの5倍はいるでしょ？」

そこいら中にムシラの血が飛散した。無論、悠季の顔にもかかつた。

彼は周りを眺める。まだ本当にいるようで、14つの赤い光点が見えた。

「×2+4かい。つまらん」

彼を興奮させるには、少しばかり数が足りなかつた様だ。

ちょうど1-2体出て来る。サイズの大きいものもいた。それでも、

雑魚には変わりが無い。

「ふう……。闇魔刀でちやつちやと終わらせる……」

軽くその場でジャンプする。そして、するりと闇魔刀を抜き、剣先をムシラに向けた。

「U - mon wimp・（来な、弱虫）」

悠季の眼はムシラを見据えている。いつ攻撃されようが、全て避ける気だ。

早まつたのは一体。両サイドから、爪を立ててきた。

悠季はその場で飛び上がり、真下にテスイービルを撃ち始める。

鬼畜な威力を誇るテスイービルだ。食らって無事では済まない。

「Who is next? Common full power!
！（次は誰だ？全力で來い）」

「一体の死亡を確認すると、死骸に足を乗せて、挑発する。恐怖心を煽りながらだ。」

ムシラが一步引くよつた感じであるが、まだまだ、彼等の闘争心は萎えていない。

悠季は闇魔刀を構え、ムシラ達の行動に対応出来るよつ、体勢を整えた。

ムシラが動く前に、悠季は動き出す。軽く走つて、一体にドロップキックをお見舞いした。

吹つ飛びふそれに見向させず、他のムシラを斬り付ける。

左難^ぎ払い、すかさず右の逆袈裟斬り。向きを変えながら、別のムシラにも攻撃を与えていた。

一撃喰らつ度にのけ反る。その間にも、悠季は攻撃を続けていた。

鋭い突きから、踏み込みながら斬り払い。彼の基本連撃だ。速さも威力も申し分ない。

太刀筋は早過ぎて、人間の眼では確認出来ない。しかし、無駄がない、ということだけは解る。

「ほらほら、やられっぱなしひけないんじやない？」

蹴り上げながら、血らを独楽のように回転させ、闇魔刀で斬りまくる。アクロバティックショーでも見てるかの様な動きだ。

残りは4体。一気に力タを着けるため、悠季は闇魔刀を鞘に納めた。

攻撃が止んだかと思い、ムシラ達は悠季に一斉に飛び掛かる。醜い顔面が、更に醜く歪む。

にやり。

悠季は闇魔刀に手をかける。そして、三回ほど、腕を動かした。

田の前に、三個ほどの大きな球体が現れる。斬撃が蠢くドーム。

悠季から、ドームに突進したムシラは、それに呑まれて、血を降らしながら死んだ。

死体は残っていない。ドームは消えた。

「技一つ。次元斬」

次元斬。その名の通り、次元を斬る技だ。好きな所に、自由な形で、好きなだけ出せる強力な技。悠季が創龍に教わった技だ。

しかも、その発動方法も居合である。抜刀と納刀は腕を動かした様にしか見えない。人の枠を超えた化け物だ。

居合は彼と創龍の十八番。その居合も特殊で、間髪入れず、連続で繰り返すのが彼等のやり方だ。

「戻るかねー。あまりにもつまらないから、不完全燃焼だけど」

イカれた発言が飛び出して来る。まるで戦いを楽しむ様な、戦闘狂の気持ちを表したようだ。

「こ)のまま戻るか？血生臭いけど

「いや、どうにかしろ」

「ああ、千冬さん、来てたの？」

いつの間にか、千冬が来ていたらしい。悠季が後ろを振り返ると、手刀で頭を殴られそうになつた。

片手で白刃取りの様な真似をする。きちんと手刀は止められた。

「織斑先生と呼べ」

「僕も仕事中だから、いいんでないの?裏と表は別に」

「まあ、そりではあるが」

血でびしょびしょの悠季を見て、千冬は溜息を着く。

「やり過ぎだ。銃も発砲しおつて。お前、少しは考える」「考える間にやられたら、カッコ悪いでしょ?スタイリッシュ、かつクレイジーに倒さなきゃ、織斑女史」

「キチガイか、お前は。変な呼び方もするな」

至つて眞面目に話しているつもりなのだが、悠季はヘラヘラとしている。段々千冬のフラストレーションが溜まつてきた。

「おい、いい加減に」「おつと」

言いかけた途端、悠季はデスイービルを抜き、一発、千冬ね後ろを撃つ。仕留め忘れていた、一体のムシラがいたのだ。

後ろを見る千冬。ムシラがもがき苦しみながら地に倒れる。悠季はそれを踏み付け、トドメを刺した。

「悪い、血が付いちやつたかも」

「かもじやない、付いた。礼を言つ

「……、強すぎや。

まともにやり合っても勝機がないよつに思えた。化け物が自分のクラスにいると思つと、やつとする。

反面、頼もしいのも事実だ。クラスだけじゃない、学園全体にとつても、悠季は必要だ。

そう考えると、出来ればクラス代表になつてほしい。

しかし、代表は無理と言つてしまつた。ならば、と千冬は悠季に聞く。

「神威、お前、クラス副代表をやらなあいか？」
「別にいいですけど、副なら」

即決。實際、女子もその様なことを言つていたが、実力が怪しかつた為、その場では決めなかつた。

「よし。では、教室に戻れ。血を拭いてな」

「タオル下さい」

「すまない、忘れた」

「……がない、と悠季は言つ。彼は学園へと向かつて、「エアトリック」という瞬間移動技で、足早に戻つて行つた。

「……化け物め」

千冬が、一回田のその言葉を発する。彼女は溜息を付き、歩いて

校舎に戻つた。

ちゃんと血を拭き、教室に戻ってきたランチア。臭いだけはあまり取れていなが。

どうやら放課らしい。教室内には殆ど人は残っていなかつた。一夏はランチアのノートを見、理解しようとしている。

「やつと戻つて来ましたわね。……あなた、何か臭いますけど」

セシリアがわざわざ近付いて来る。あまり気付いて欲しくはない臭いだ。

事実化するため、背中に幻影剣という、魔力で生成した飛来武器を刺して、自傷する。

「ちょっと怪我して、出血した。ま、大丈夫大丈夫。全部やれたし」「まあ、情けない……つて！足元！」

少しばかりやり過ぎたようだ。足元に血が垂れている。

「ああ、止まつてなかつたんだ。大丈夫、睡でも付けときや治るよ」「睡つて……汚らしい。それに、背中に届かないでしそう。大人しく救護室へお行きなさい」「だりイ。すぐ止まるさ」

痛そうな素振りを見せらず、セシリアの横を通り、セシリアがラン

チアの背中を見たとき、傷口が次第に塞がっていくのが見えた。

「な、なんですか？」

つい声が出てしまったが、ランチアはセシリアに答えようもせず、一夏に近付いた。

「どう、歩ってる？」

「ん？ ああ、お前のお陰でな」

ちょうど終わつたらしく。一夏のノートと、右手の側面が真っ黒だ。

「これ出して、補修を逃れよつかな、って考へてるんだけど」「良いじやん。それでこきなよ」

一夏の提案。それなら、山田先生はわかつてくれるだろ？。

「ちよつと、来た様だよ」

言葉通り、山田先生が教室に入ってきた。彼女はこひらに向かって歩いて来る。

「先生、これ、今日の授業のノートです」

「あ、はい？」

一夏からいきなりノートを渡されて、困る山田先生。ノートを開くと、要點と補足が綺麗にまとまっている。

「素晴らしい……」

「これで、補修無しでいいですよね？」

「素晴らしい……」

「あ、はあ。

つというか、それより。ストラトス君に、織斑君。もつと重要なことがあります」

「はい?」

一 夏にひとつて重要なのは、今日の補修。それより大事な物とは、何か?

「寮の部屋を決めましょ」

「ああ、なるほど」

そういえば、この学園には寮があつた。ランチアも忘れていた。三食寝床付きとは聞かされていただけだが。

「ストラトス君と織斑君だけ、まだ部屋が決まっておらず、織斑君は自宅から通うように、との連絡があつたと思します」

「あ、ああ、そんなこと、聞いていたような……」

何もかもがつる覚え。ランチアは、一夏の発言にくすりと笑った。

「ストラトス君は、どうしようも無いので、ホテルと言われたはずです。しかし、都合が変わり、部屋が空いたので、今からそれを決めたいんです」

「俺とランチア、一緒じゃダメなんですか?」

「上からもう言われてます」

珍しい男のエリ操縦者だから、何かしら狙われる率が高くなる。そう考へてのことだらう。

「今のところ、666号室と、667号室が空いています。666

は完全に一人、667は相部屋です

ランチアが666に入るのが好ましいだろつ。一人で対処出来るのは彼くらいだ。逆に、一夏が666では、自己防衛手段に乏しい。

「僕は666で。一夏は?」

「じゃ、俺は667でお願いします」

一分掛からず決まった。山田先生は、彼等二人の仲の良さを見て、心が落ち着いた。

「良かった……。さつきみたいなことがあつたから、ストラトス君と織斑君の仲も悪いと思いましたが、全くの反対でしたね」「さつき?」

先程の授業のことだろつ。ランチアは一夏に聞いた。

「ああ、あのセシリ亞って奴が、日本を侮辱したんだ。俺も少し力ツとなつて言い返したら、決闘だつて言われて、でもそつちのほうが簡単でいいから受けた」

「やるじやん」

呆れるか、と思った一夏だが、ランチアは笑いながら褒めた。意外に思つた一夏が、更に続ける。

「来週の月曜だとぞ」

「来週ねえ。大丈夫、勝てる勝てる。副代表を信じなさい」

「あ、お前、副代表になつたのか」

「まあね」

「Jの立場だと、一夏をサポートするのか、若しくはセシリ亞をサポートするのかが悩み所だ。しかし、ランチアはそういう考えを持たなかつた。

「思う存分やりなよ。僕はただ見てるからさ」

中立の意見。一夏は、それを、意図を理解して領いた。

Mission 3 魔剣士と女剣士

生徒寮。一夏と一緒に移動し、666号室の鍵を開けると、ワンチアはドアを開けた。

「セーラーの部屋だね」

ベッド一つに、机一つ。ソファと、トイレ、シャワールームが着いていた。

率直な感想をワンチアが述べる。しかし、一夏にとっては少し豪華過ぎた様だ。

「高級ホテルのスイートみたいだな……。よく見ろ、冷蔵庫、液晶テレビ、Bロプレイヤーに、マッサージ椅子まである」

一夏に言われるまで気が付かなかつた。と、いうか……。

「これ、全部僕ん家の部屋のじゃないか……。」「は、はあー?」

近付いて、傷や使用感などを確かめる。本当に全て『Black Cherry』の、悠季の部屋に置いてあるものだ。

「ふわけんなよ……。戻すの大変だらう」「……」

「いやいや、シシ ハハ所がおかしい。それに、お前はセーラーまで金持ちだったのか」

あつちでは自分で稼いでいるのだ、食費は家族で賄つていりし、自然と金は貯まる。

「」となんより、エレクトロベガイの方を運んで欲しかったよ…

…

ランチアがボソリと呟く。一夏は知らぬ間にマッサージ椅子の虜になつてゐる。

「ああ、極楽……」

「じゃねエよ…おま、使つなつて…」

勝手に使われるのはあまり快いものではない。ランチアは椅子を止め、一夏の頭を掴み、667号室へ移動した。

片手で軽々と運ばれる一夏。頭にはそんなに力はかかるつていない。

「ほらっ

隣のドアを開けた。ちょうど、一夏のルームメイトがシャワーから出て来たようで、バスタオル姿で現れた。

「ああ、同じ部屋の者……か……」

「ほ、ほほ、笄！？」

ランチアはこつそりと逃げ、自室に入る。隣からは、騒がしい声と、一夏の謝罪が聞こえてきた。

「い、一夏…何のマネだ！？」

「い、いいいや、ランチアが！－つか、不可抗力！－」

どつたんぱつたんと、迷惑になりそうな行動だ。しかし、ランチアは面白がり、笑った。

「笑うなランチア ああ！－つか、お前も悪いだろおお！－」

必死な悲鳴。一夏の命は風前の灯だ。ランチアは笑うことやめず、ベッドに腰掛けた。

しばらぐすると、音が止み、666のドアが開く。

ボロボロの一夏を連れた、黒髪のポニーテールの女性が、ランチアの前に来た。

「悪い、見苦しい姿を見せてしまったな」

「いやいや、僕も悪かった訳だし」

笑顔で応対するランチア。しかし、女性はまだ怒ったような顔をしている。

「篠ノ乃さん、だつけか？一夏と知り合いなの？」

「出来れば、下の名前で呼んでくれないか、ストラトス」

篠ノ乃篠。いかにも、純日本人の顔立ち。美人で、清楚といったイメージがランチアの頭に入っている。

「それじゃ、篠さん。なら、僕もランチアって呼んでよ」「ランチアか。わかつた」

表情は変わらない。ランチアは、彼女の顔を緩くしようと、一いつ

「リと笑った。

「ランチア、ここには元々こんな顔だから　ひでぶつ！」

「余計な事を言つた。ああ、一夏と私は幼なじみで、小4の時に、私が転校したんだ」

「へ、へえ……」「…

段々一夏が氣の毒になってきた。千冬の時と同じく、今度は落ちてあつた小説で、一夏の頭を叩いた。

二人に共通することだが、振りが速い。ランチアにはゆっくりと見えるが、常人には、何をしたか分からないだろう。

篠の腕をマジマジと見る。なるほど、剣に使う筋肉が着いている。

「篠さんって、剣道でもやつてたりする？」

「ん？ああ。昔から、これ一本でやつていてな」

「毎年、全国大会で優勝する腕なんだぜ？」

試しに聞いてみて、篠がその様に答え、一夏がマネージャーの様に彼女を宣伝する。

「知っていたのか？」

「幼なじみのことは知つておきたいからな。ランチア、実は俺も剣道やってたぞ」

「へえ」

正直、一夏が剣道をやつていたのはどうでもよかった。しかし、

今の一夏の発言で、何故か篠が顔を赤らめる。

「照れてるでしょ？」

「な、何をつー?」

「今のこと」

クスクス、と笑いながら篠に言った。頬を真っ赤に染めながら、
篠はしゃらばつくれた。

絶対、一夏に気があるだろ。

幼なじみの関係を超えたようつだ。誰が今の状況を見てもそう思
うだろ?!

しかし、一夏は気付かない。どうやらやうじの男、かなりの鈍感らし
い。

「いやー、一ブチンさんがあれだと、苦労するね?」
「ぐつ……。ああ、全く……」

その言葉を意味するのが大体分かり、篠が恥ずかしそうに返した。

「ま、チャンス到来?な訳だし、頑張ってほしいなア」「つう……」

更に顔が赤くなり、一夏を横目で見る篠。ランチアは思つ。是非
とも頑張つて欲しいと。

「ははつ。ま、時間もあるし、ゆっくり仲を深めて行きなよ。僕の
部屋でもいいからね」

「あ、ああ……」

「よし、じゃあマッサージ椅子でも使つか

遠慮なくマッサージ椅子に直行する一夏。ランチアは苦笑いしながら一夏を見た。

「しかし、お前の部屋は豪華だな……」

「全部、実家の、私物です……」

篠も、この部屋の豪華さには溜息を着く。それが全部ランチアの者というのだから、更に驚きだ。

「ま、仲良くなつや、隣人同士や」

「なんだ、この手は」

「スター篠ノ乃に握手を求めてるのぞ」

意味もなくヨイショし始めた。篠はふつと軽く笑い、その手を握った。

「ふいー……。やつぱ風呂ついでいいわ……」

篠が戻つてから、シャワーを浴びたランチア。一夏しかいないので、自前のカーゴパンツだけ履いて、上半身は裸でいた。逞しい身体付き。全身の筋肉が、入念に鍛え上げられている。制服の上からは、誰がこの様な身体を想像出来ただろうか。

「う、うひっ……」

「なに見てんだよ……。ああ、動物のBロね

「ボブちゃん可愛いなあー！」

適当に買った動物のビデオを見ていた。いわゆる、アニマルビデオである。

「アザラシーいわあ……。もふもふもふもふ

「ははっ」

ベッドで寝転がっていた一夏の前を通り、冷蔵庫を開けた。中身もそのまままだ、ペプシやらなにやら、沢山入っている。

ペプシを取り出し、栓を開けた。ふしつ、と炭酸が抜ける音がし、それに気付いた一夏が、自分にも、と言つた。

ペプシではなく、ファンタオレンジを渡す。遠慮無く、一夏はそれを飲み始めた。

ベッドに腰を下ろし、ボトルのキャップを閉めて、そこいらに置いておく。

ちょうど同時、ノック無しに、ドアが開くが、ランチアは見向きもしなかつた。

「いつまでいるん……、お、おい……！」

「ん、
なに?
」

「お前、服を着ろ！」

やはり簞だ。ランチアはコートを羽織り、一夏の首根っこをを掴んで、簞に渡した。

「はい」

「たから」朋を着て

卷之三

中を養ふの圖

もがく一夏を横目に、篠とランチアは話す。渋々、一夏を離して黒のハイネックインナーを着る。

「身体のラインが出過ぎだが、まあいい
てか」「僕の部屋だから、良くない？
こんなことが多々あるから良くない」

多々あるのも困る、ヒランチャは言つた。

「修学旅行のノリみたいに、3日くらい経つたら冷めるよ」

「なんだ、それ

そのノリが判らない。筈は溜息を付きながら言つた。

「つたく。風呂上がりの姿は見られるわ、上半身を見せ付けられるわ、散々だ」

「筈さんと同じ、筋肉の身体だよ。筈さんも、筋肉の付き具合は、普通の女子以上だもの」

「トリカシーといつものがないのか、貴様にはー?」

それが、ランチアにとつて一番の欠点だらう。しかし、裸で無くとも、服から筋肉のラインがうつすり見えているのだ。

「そりや、剣を振る身体付きにならう。嫌でもな。しかし、考えて発言しろ」「¹ねん」

確かに、ランチアが今のは悪い。謝罪し、小さく笑つ。

「何か、憎めん奴だな」

「はい、肉まん」

ランチアの笑顔に、あきれた様に笑つ筈。ランチアはすかさず、その発言のボケを実行した。

「¹から出したー?」

「ホールから。いつち来る時に¹ンベード貰つたの忘れてた。¹つ?

差し出すが、忘れられていた一夏が、普段よりも恐ろしげ背筋力を見せ、肉まんにかぶりつく。

「冷めてんなー」

「お前が食つんじゃねよ」

「温めてくれよ」

「聞いてないな」

一夏の感想に、ランチアと箸が突っ込む。ランチアは、ベッドに一夏を起き、一瞬で、掛け布団で簞巻きにした。

「はい、一夏巻き」

「ばつ、お前、バツキヤロー！」

「助かる、これでこいつも悪さをしないだろ？」

一人で一夏巻きを担ぐ。具が喰いているが氣にしない。

ランチアが667号室のドアを蹴り開け、ぱいっ、と同時に一夏巻きを投げ飛ばした。

「よし……。食事に行くか

「良いね、何食べる？」

「ちょ、お前ら……。これ解けつて

「久しぶりに麺ものが食べたい

「いいね。ラーメンでも食べようか

「おじ口か、洒落になつてねえぞ！？」

学生食堂に、ランチアと箸、一人で向かう。身動きが出来ない一夏が、『ひる』ころ転がるが、ベッドに顔面を強打し、悶絶した。

「たわばつー！」

「ピザもどう？』

「食堂にあるか？」

ドアが閉められる。一夏の八方が塞がつた。

「ちょ！？」「めんなさい！…もつ長居しませんからー…これ解いて
！…助けて！…メシ食いたい！…
お願いしますだ纂さまー！…「ランチアさまー…！」

「お前、昨夜あれだけ喰つておいて、何故またそんなに食える……」

翌日。ランチアと篠、一夏が一緒に食堂まで行き、朝食を取つていた。

「それでも腹が減るから」

「寝ただけでか」

「朝に身体動かしてたよ」

朝4時位に起きていたランチア。広大なグラウンドを20周ほど走り、ストレッチやラジオ体操などで身体を日覚めさせていた。

因みに、ここ のグラウンドは一周約5km。約100km走つて いる計算になる。

「織斑君って、朝、結構食べるんだねー」

「晩飯食つてないからな。誰かの所為で」

「ファンタあげたじやん」

ランチアと篠の間の一夏も、量が恐ろしい。茶碗がいくつも重ね てある。

「落ち着いて食べなよ」

「時間がねえよ。遅刻でもしてみり、きっと千冬姉に叩かれるぞ」

「聞こえていいんだよ、馬鹿者」

後ろから、ポコリと叩かれる。ちゅうど千冬がそこにいた。

彼女は一年の寮長も勤めているらしい。正是スーパー・ウーマンである。

「迅速かつ効率的に食事は行え。遅刻した者は、ストラットス以外校庭5周だ」

「僕は無しなんですか？」

「お前は50周だ。見ていたぞ、朝の。お前、体力は無尽蔵にあるだろつ」

見られていたのか。千冬が見た限り、ランチアは速いペースで20周を走り切り、息切れも何もしなかったといつ。

「化け物め……」

千冬だけではなく、篝と一夏も言い始めた。面と向かって言われるとかなり傷が付くらしい。

「マジ萎えたわ……」

「いいから早く食べろ、私は走るつもつはない」

食べ物を口に全て頬張り、牛乳で流し込む。一夏もそれに続き、味噌汁でどじめを刺した。異様な光景を目の当たりにした篝が、変な顔をする。

「それは味わえるのか？」

飲み込んだランチアと、喉を通らせる一夏が、一緒に首を横に振る。

「もつと、品のある食べ方をしろ……」「時間ないなら、手段は選ばないよ」

一夏と篠の食器類を持ち、返却口に床すランチア。頭にも、自分の食器を乗せていった。

「サンキュー、ランチア」

「ありがとう」

「いいから、準備しようつか一夏、篠さん」

やつと飲み込んだ一夏が、ランチアに礼を言つ。篠もそれに続き、ランチアは笑顔で返しながら言つた。

「おし、10分前」

「案外、余裕だつたね」

教室に着くと、バラバラと生徒が集まつていた。時間的にも余裕があつた。流し込み作戦が効果的だつたのだろう。

それぞれの席に座り、教科の準備をする。チャイムが鳴り、SHRが2分で終了すると、時間を早めて授業をし始めた。

授業開始の時に、言い忘れていたことを千冬が話した。

「ああ、そうだ。副クラス代表だが、ストラトスが快く引き受けてくれた」

「皆さん、よろしくお願ひします」

「一〇一〇としながら立ち上がり、挨拶するランチア。セシリアが何かこちらを睨むが（と、いつても、ジト目のようにしか見えないが）、ランチアは気にしない。

「クラス代表が決まるまでは、ストラトスに従え。いいな」

千冬の釘刺し。しかし、教師権限を使っている為、セシリ亞にも反論出来ない。

「では、授業に入る」

「―――ここまで判らないもの、いるか?」

一夏の専用機の話から、今に至る。まだ、時間がかかるということをついでに言つたのだ。ちょいと、今日の授業もその関連らしく、一夏に教科書を音読させた。

ランチアが拳手をし、質問する。

「世界に467機しか存在しないことですが、それは今、確認出来ている台数ですね？作られてはあるが、まだ公表・発見されていない、という機体もありますか？」

素朴な疑問。ランチアの質問に、千冬は感心する。

「いい質問だ。そうだな、まだ未知のI-Uがあるやもしれん。篠乃博士も、コアを作つて、外装を着けたが、公表していない、というものもあるだろうしな」

篠ノ乃博士、という単語に、女子がざわざわとし始めた。

「先生、篠ノ乃つて……」

「ん？ ああ。 博士は、 そこの篠ノ乃の姉だ」

やっぱり！、と騒ぎ始めた。ランチアが、筈の顔を後ろから伺う。

袴な心境だ

「ねえ、篠ノ乃さんも、E-Sの知識が豊富だつたりする？」

必要以上に酔^よ立てる。ランチアは腰を上げ、ゆつくりと簾の周
りに近づいた。

「今度、操縦教えて」「はいはい、授業中ですよ」

パンパンと手を叩き、気付かせた。筈の顔が、暗い顔から、途端に真顔になり、ランチアを見た。

「兄弟、姉妹だからって、同じ才能があるわけじゃないんだ。それ
ぞれ、個々の光るものを持つてはいるから、個性があるんだよ」

綺麗事だらうか、と思いながらも、ランチアは喜び。

彼自身、父親の才能と比べられるが、自分と父は違う、と自然に思つてゐる。

「ストラトスの言う通りだ。黙つて席に着け」

千冬のフォロー。篠はランチアを見続けた。ワインクで篠に答え、

ランチアも席に戻る。

再開する授業。ランチアはノートを取りながら、周りの様子を伺つた。

休み時間のチャイムが鳴り、ノートを閉じて、シャーペンを仕舞う。昨日の飲みかけのペプシのフタを開け、飲もうとする瞬間、一夏がランチアに近づく。

「副代表、流石」

「あ？ なにが？」

「さつきのことだよ。一まとめに言つちまつたし。俺もあれ、共感した。千冬姉がモンドクロッソンの覇者だからって、俺は俺だからさ」

そうだ、一夏も、篠と同じ様な者なのだ。

「う、ランチア……」

一人で話していふといふ、篠が照れ臭そうにやつてきた。

「さつきは、ありがとな……」

「いいよ、別に。当たり前のコトをしだけだからさ」

「そ、そつか。当たり前か

当たり前だと思えるランチアが強い、と一夏と篠は思った。

「ちゅうとー？ なんで私の知らない間で、あなた如きが副代表になつていますの！？」

「あのや、空氣を読めよ」

いきなり近付き、話を無理矢理変えたセシリ亞を、一夏が睨む。

「私の下に着くといつのなら、それなりの実力を見せなさい……！」「聞いちゃいねえ」

一夏は呆れ返る。自己中、と付け足した。

「ま、ヤシの方は専用機があるらしいですが、貴方は訓練機でやる」とになりますわね」

「何？僕とタイムン張るの？」

ランチアさえも呆れ返る。肩肘を付き、セシリ亞を着いた。
「どうせエリー＝トせんだから、『私は467機の中の、専用機持ち
！だから選ばれた存在！』ぢや？』とでもしたいんだろう？」

一夏が悪態を着く。図星だったようで、セシリ亞は悔しそうな顔
をする。

「と、といひで、あなた。どうやら篠ノ乃博士の妹みたいですね
『妹というだけだ。それがどうした』

無表情で返す筈。セシリ亞はそれが気に入らないようで、更に言
う。

「出来の悪い妹を持つて、博士も大変ですね」

「ランチアの耳にそれが入ったとき、彼の中で、何かが切れた。

「ま、誰であろうと、クラス代表は私が相応しいことをお忘れな

」

机を拳で叩き割り、セシリアを睨む。そして、彼女の胸倉を掴んだ。

「ふざけんなよ、お前……」

剥き出しの殺意。セシリアの顔に恐怖が現れる。

「何も知らない奴を、出来が悪いだ？よくもまあ、そんな偉そうな口が叩けるな」

そのまま壁に押さえ付ける。セシリアの足が震え出した。

「何がクラス代表だ。人を見下して口だけだろうが、てめ口は」

まともに目が会えば、視線で人が殺せるくらいだ。クラス内の空気が凍り、一夏と筹ですら、足が動かない。

「同じコト、言つてみろよ？」

気迫から伝わって来る。ランチアは本気だ。完全に躊躇上がつて、言葉が出ない。

「身体に一発入れないと、判らないか？」

拳を握る。そのままセシリアの顔面を狙うが、恐怖を振り切った一夏がランチアを止めた。

「もうその辺にしどけ」

鼻先スレスレで拳を止めた。同時に、掴んだ手を離す。

その手から滴り落ちる血。セシリ亞にもその血が着いた。

「助かつたな。次は無いと思え。

一夏。僕、気分悪いから救護室行つてくるわ」

ランチアは拳を固く握り締めた。更に血が溢れた。
ドアを開け、救護室に向かう。皆はそれを只見送るだけ。セシリ亞
が崩れ落ち、意氣消沈とした。

「今日は、全体的にお前が悪い」

一夏がそう言つ。彼が席に戻つて座ると、チャイムが鳴つた。

「はーい、私……が……」

入つて來た山田先生が、ランチアに壊された机と、空氣とを見て、
悲鳴を上げた。

救護室に行き、拳にてーピングを施しただけで、廊下に出る。どうせすぐに治りてしまつたが、取り敢えずテーピングをした。

「ホント、マジねエわ

狂暴な一面を晒し出した。獣の様に荒かつた。

机一つで済んで良かつた。あそいで一夏が止めていなければ、本当に殺していただろう。

「ああこいつの、本当にダメ……」

教室ではなく、自室へと戻らつたが、途中で千冬に見つかった。

「何処へ行く氣だ」
「自室です」
「机、弁償しろ」
「わかりました」

「ホールから財布を取り出し、1000ドロンド札を5枚ほど差し出した。

「日本円はないのか……」
「すいません。あります

勘違いした。1万円を5枚出し、千冬に渡す。

「自分で稼いでいるから、払えるのだろう。だが、お前が壊したのは公共物。公共物破損だぞ」

「すいません」

テープelingした箸の手から、血が止まらない。また強く握つていいのだろう。

「許せないんですよ、ああいうの。親父がクラウスの息子だから、僕も期待されてしまう」

「クラウス？」

「2000年前、魔界の侵攻から世界を救つた、魔剣士ですよ。ご存知ございませんか？」

「知らんな……」

その息子の創龍も、ニブガルムという異世界を救つたり、デュマーリといつ島を守つたりしている。裏では有名なのだが、悠季はその名に期待をされてしまう。

「誰もが、活躍している兄弟と、一緒の能力があるわけじゃない。何も知らない人間が、見てくれや名前だけで人を非難したり、比べていい筈が無い」

「まあな」

悠季は唇を噛み締める。唇が切れ、そこからも血が流れ出る。

「少し落ち着け、神威。お前の気持ちも、よくわかる」

「はい……。取り乱して、すいません。自室で頭を冷やしてきます

「解った。落ち着いたら、教室に来い」

今の状況では、どうにもならない。千冬は悠季に、自室に戻ることを許可し、彼女は教室へと向かう。

「魔剣士、か……」

興味を沸かせつゝも、それを抑えながら。

結局、悠季は教室には戻らなかつた。テープリングは血で真っ赤に染まつてゐる。新しいテープに変え、握つた手をやつと解いた。

ベッドに寝転がり、天井を見上げる。真っ白な、汚れなき天井を。

少しして、ドアのノックが聞こえた。ランチアとして気持ちを切り替え、ドアを開けると、そこには笄と一夏がいた。

「よつ、ランチア」

あんなことがあつたのに、一夏は変わらずランチアに接してくれた。ランチアは自然に笑顔になつた。

「どうしたの？」

「ランチア……。本当に、ありがと……」

笄がランチアの眼を見て言つた。ランチアは優しく微笑み、首を横に振る。

「篠さんは、篠さんだから。篠さんのお姉さんでもなく、篠さんだから」

「そうだよな。篠、ランチアの言つ通りだぜ」

「それでも、あそこまで怒つてくれる奴はいない……」

「僕も同じ境遇だからさ。家系がそんなんだし」

自分は自分。他者とは違うのだ。父・創龍の教えもあり、ランチアのモットーだ。

「右手、大丈夫か?」

「大丈夫。ピンピンしてるよ」

これ見よがしに、手を握つたり、開いたりする。テープニングにも血は付かない。

「よかつた。折れていたら、大変だからな」

「そんなヤフっちゃないよ、僕は」

「わかるよ、机割るくらいだからな。あれ、1つの衝撃くらいなら、軽く止めるらしいからな」

化け物の片鱗、その3。ランチアが苦笑いしながら、困ったようにした。

「大丈夫なら、剣でも振らないか?いいストレス解消になるぞ」

「いいの?」

「ああ。私が、相手になつてやる。ちよつと、一夏にも剣を振らせたいところだつたしな」

滅多に見せない笑顔を、篠が見せた。

「いいね。ついでに」

部屋のバックから、あまり見せてはいけないもの デスイービルを出した。

「射撃も、試さない？」

武道場へ移動し、篝は更衣室にて、胴着に着替えて出て来た。無論、愛用の竹刀もだ。

「適当に得物を取れ」

一夏は借りた胴着だが、ランチアはいつも通り、コートの姿である。ランチアにあつ胴着が無かったのだ。

一夏は竹刀を選んだ。ランチアは愛用の木刀を出し、肩に担いだ。

「一夏から行くぞ」

「い、いきなり！？」

有無を言わさず、打ち込みを入れる。体重を掛けた、重い一撃。速さもやはり申し分ない。

「ぬおつ！！」

肩膝を付き、受け止めた一夏。いくら女子でも、実力の差があり

あざれる。

「それで全力か！！」

「そうだよーーー！」

そろそろ腕が限界らしい。プルプルと震えている。

見切りを付け、ランチアは木刀を振り始める。ウォーミングアップとして、闇魔刀で行う四連撃を一度繰り返した。

続いて、左の斬り払いから、右の逆袈裟斬り。ここから派生し、右の回し蹴り、すかさず突進突き、そのまま連續突きをした。

「情けない……。三年間、何をやつていた！？」

「帰宅部だ！三年間、皆勤モーーー！」

「胸を張つて言ひづ」とかーーー！」

夫婦漫才。横では、黙々と剣の連撃をしているランチアがいた。

水面蹴りから、サマーソルトキック。飛び上がって、急降下しながら、兜割りを放つた。

剣からくる風圧。箒のポニー テールを揺らした。

「ランチアを見習え」

「出来るかよ、あんなんーーー！」

箒の方向を向き、ランチアが剣を構える。

「やれりうか」

「ああ……。行くぞつ！！」

先程より速い打ち込み。ランチアはそれを紙一重で避け、木刀を箒の頭に付ける。

「あれ？ 終わり？」

「ふつ……。なかなかだ、しかし、まだ終わらんよ」

竹刀が戻つてくる。ランチアは宙返りでそれを避けた。

宙返りの最中に、剣を突き出されるが、それをも木刀で捌き、避ける。

「まるでサークัสの一員みたいだな。自由自在に動き回る……」

着地を狙い、胴抜きを狙われるが、素早く左に転がつて避けた。身を翻し、突きを放たれるが、それをも木刀で防いだ。

息も付かせぬ高速バトル。一夏が竹刀を置き、二人の動きを必死に眼で追つた。

防戦一方に見えるランチア。だが、箒もいっぱいいっぱいな様だ。

「さて……。そろそろ反撃と行こうかい」

捌いていた剣撃を、力を入れて跳ね返す。箒の剣が上に行き、胴ががら空きになつた。

続けて、左袈裟斬り、右斬り上げ、右回転斬り、と、光速の連撃を繋いだ。箒の左肩から右脇腹、右脇から左腿に当たり、布を軽く

斬つた。

留めに、腹部を、とすっと軽く突く。これで完全に勝負ありだ。

「すげえ、勝つちまつたよ……。あの簫に……」

「ふつ、ふふつ……！流石だ、ランチア」

簫が竹刀を置くと、ランチアも木刀を肩に担ぐ。

「昨日の握手から、お前の掌は堅かつた。明らかに剣ダゴが出来ていた。しかし、剣道じやないな。実戦向きの剣術だ。どこで覚えた？」

木刀を頭上でぐるぐると回しながら、ランチアは答えた。

「オリジナルと、親父から教わった、代々伝わる剣術だよ」

「流派は？」

「無いよ。名付けるなら、クラウス・アーツ、かな？」

適当に名前を付けた。しかし、クラウス・アーツのネーミングセンスは悪くない、と自画自賛した。

「一夏。私とランチア、どちらに剣を教わりたい？」

「へ？俺は、出来れば簫の方が、人間味があつて、好きな剣なんだが」

「そ、そつか」

何故そこで照れる、と一夏が突つ込む。ランチアは、一夏の鈍感さに思わず吹き出してしまった。

「では、明日から稽古を付けてやる。E.S云々より、まずは生身の

身体の鈍りを取つてからだ

竹刀を一夏に向けて話す。彼は頭で考えた。

ここで鍛えておけば、後々 IIS の操縦にもスタミナでカバー出来るだろう。それに、専用 IIS も無いことだから、それに備えるのも大切だ、と。

「よろしく頼むぜ、簫」

「後は、クラウス・アーツも教われ。剣だけじゃなく、回避も技だ」「僕が教えるの?まあ、いいけど」

「判った、ビシバシ来い」

「ここまでしてやるんだ、絶対オルコットに勝てよ」

そういうえば、来週がセシリリアとの決闘か。ランチアが思い出すと、一夏は拳を握り、顔を真剣さで埋め尽くした。

「任せろ、お前らがいれば怖くない」

そいつは頼もしい。ランチアと簫は、一夏の眼差しを見てそう思つた。

武道場から、射撃練習場へと移動したランチア達。ランチアが耳栓とゴーグルを一夏と簞に渡すと、銃の説明をし始めた。

「自動拳銃の話をしようつ。ここがスライドね。弾切れ時に後ろでストップする。その時は、マガジンを入れ替えて、スライドを引く」試しに弾を一発的に撃ち、弾切れ状態を作り出した。スライドが止まるのを確認すると、マガジンを取り替え、スライドを引く。次弾がチャンバーに装填され、スライドが戻った。

「弾丸は9mmパラベラムだから、これをマガジンに詰めて装填してね」

「詳しいな、お前」

「まあね」

「ここにある銃は、M9とグロック18、U.S.P.そして、コルト357 パイソン。

「ちゃんと両手で、こういう風に持つてね」

U.S.P.を持って、実演して見せる。一発、人型の的の脳天部分に撃ち込んで見せた。

「リボルバーは、撃つのは同じなんだけど、装填は、クイックロー
ダーか、一発ずつ詰める」

パインソンに持ち替えて、シリンドラーをスイングアウトする。薬莢を全部抜くと、クイックローダーにセットされた弾を差し込み、真ん中のボタンを押して、横に引いた。

「ま、これが一番速いかな」

「軍隊出身者か、お前」

セフティを掛け、くるくるとガンプレイをするワントニア。まるで西部劇のガンマンみたいだ。

「じゃ、実際に撃つてみよつか。好きな銃を取つて」

一夏がM9、弾はUHPを選んだ。ランチアはそのままトスイーピルで、的に向かう。

「なんかワクワクしてきた……」

男だから、と軽いものもあるだろ？。一夏はニヤニヤしながら、トリガーを引いた。

心臓部に当たる。なかなかの腕前だ。

反動で腕が少し弾けたが、怪我になりそうな訳でも無い。

隣の篝はといふと、UHPを一発撃つた後、ジャムらせてしまった。ランチアがそれに気付くと、UHPの薬莢を抜き、直して渡す。今度は、と思って、三連射。ジャムることなく、綺麗に頭を撃ち抜いた。

「なるほどな……」

「コツを掴んだらしい。籌は続いて、下腹部の方を狙い、五連射した。

「やるじゃない、二人とも」

デスイーブルを片手で撃ちながら、ランチアが叫ぶ。全くと言つていいほど、反動がない様に見えた。

連射速度が速い。まるでサブマシンガンでも撃つているかの様だ。若干速度は落ちるが。

的を撃ち抜いて何か模様を作つたらしい。双眼鏡で筹が的を見てみると、薔薇が華麗に咲いていた。

「軍人だろ、お前」

「違うよ」

反動の逃がし方といい、精度といい、何かしらがレベルが高い。

「剣と銃、どちらも強いとか、万能過ぎだろ。羨ましいぜ」「いやあ、照れるなあ」

一夏がランチアを称賛する。素直に彼はそれを嬉しがった。

「一人も上手いよ。なかなかの腕前で」

「そうなのか?」

「うん。初回であそこまで出来たら、もつひとつひと無しだよ」

反動の逃がし方も、精度も、やはり剣道からくる、力の使い方なのだろう。

「銃か……。」ひらりも、極めてみよづ

「剣道の一環でね。肩とかも強くなるだらづ」

筈がHSRを気に入つたようだ。グリップから手を離そうとする
気配が無い。勿論、セフティは掛かっている状態だ。

「息抜きにやるとするわ。その時は、ランチアに付き合つてもうつ
「僕？いいけど……」

ふふっ、と笑いながら、ランチアは立ち上がり、筈の耳元で囁いた。

「一夏のハートは、自分で撃ち抜きなよ。なるべく早田にね」

筈の顔が赤くなり、ランチアを見た。ランチアは笑いながら、筈の肩を叩き、自室に戻った。

Mission 4 力の証明

「よしみじみしつ……」

決闘当日。朝から一夏はハイテンションでいた。

クラウス・アーツの回避術、「バックムーン」、「スイッチング」、「シャツフル」などを教わり、また、筈の剣の教えで、身体の鈍りは完全に取れている。

「肝心なのは、専用機だな」

まだ専用機は来ていない。到着予定は今日の午後らしい。それまで、授業の辛抱だ。

「勝つてやる……俺なら出来るつ……」

自信満々な一夏。しかし、それをやっているのは教室だ。

「つるねこ、馬鹿者。判つたから落ち着け」

筈のツッコみ。「一夏はそのテンショソで、筈に親指を立てた。

「そりいや、ランチアが来ないな……」

結局、ランチアが来ないまま、決闘の時間になつた。アリーナに移り、自分のピットへと入つた。一緒に簾も着いてきたが、別に誰も気にはしなかつた。

「お、織斑くん織斑くん！」

ピットに駆け込んでくる山田先生。落ち着きがない。

「先生、ストップ。そのまま息を吸つてー」

言われた通りに、山田先生は息を吸つ。

「吐いてー」

「はあー」

「一夏、全然面白味がない」

吐ぐと同時に、ランチアがドアを開けて入つてくる。千冬も一緒だ。

「ランチアーーーどこに行つてたーーー？」

「学園長んとーーー」

勿論、嘘である。パシラされて、一夏の専用機を取りに行つっていたのだ。

「ほひー、一夏。お前のHIS

「ンヒテナがランチアの後ろから顔を出した。一夏がそれを開けると、くすんだ白い機体が現れた。

「白式」という。織斑、初期化^{フォーマット}と最適化^{フィットティング}をしろ。最速でな。すぐに

出るぞ！

千冬が指示した通り、一つの作業を素早く行つた後、装備して力タパルトに移動する。

「一夏」

「ん? なんだ」

ランチアが一夏の前に出る。拳を突き出し、言つた。

「呑きのめして！」……お前ならやれる……いや、やれ……殺つち
まえッ！……
「応！……」

拳を突き合わせた。男の友情。千冬や篠、真耶がそれを見て笑つた。

大空へと飛び立つ一夏。背中を見守り、送ると、ランチアは外へ出よつとする。

「待て、ストラトス。お前も後で戦うんだぞ」
「判つてますよ……。力の差を、見せ付けてやりますから……」
「ISを準備しておけ。それと、渡したいものがあるから、ついて
来い」

ピット内部でか?と疑問に思つたが、ビリヤー、本当にそのようである。

何やら、細長い段ボールに包まれた物。千冬はそれを渡したい。

「お前の親父さんからだ」

ランチアの手と、段ボールとが、稻妻で結ばれている。

大体予想がついた。段ボールを引っ張り、エアキャップを取ると、所謂ストラトキャスターと呼ばれるエレキギターが姿を見せた。

「エレクトロ、ヘヴィ……」

千冬の顔を見る。ランチアは、ネックを両手で持ち、軽く振った。ギターが変形し、鎌の様な形になる。

ネックの中心から割れ、ピックガードが刃になっている。ランチアは肩にそれを抱き、にやりと笑った。

「これは魔具だ。偶然で出来た産物だが。

「そのような使い方なのか」

篝が眼を見開きながら、エレクトロヘヴィのボディ部を触った。指先から、得体のしれないパワーを感じ、手を押された。

「つーーー！」

「これで、篝さんにはバレちゃったかな……」

「ストラトス。いや……、神威」

「ほえつー？」

本名でランチアを呼ぶ千冬。真耶と篠が、ランチア　いや、悠李を見た。

「神威悠季。一夏の後に、オルコットに、何者であるかを思い知らせてやれ。悪魔狩りの力、私に見せ付けてみろ」

「あいよ」

鎌を閉じる。悠季はそこにエレクトロヘヴィを立てかけると、腰溜めに構え、身体全身に、魔力を行き渡らせた。

「ロイヤルガードが一つ、ドレッドノート……！」

魔力の鎧。恐ろしい外見をしており、全身が刺々しい。

人間から掛け離れた生物。それを見た三人が息を呑む。

「ランチア。いや、悠季と呼ばせてもらおう。お前は、何なんだ？」「ISを使えると勘違いされ、学園にぶち込まれ、その学園の依頼を受ける、便利屋さ」

エローが掛かつた声。不気味さを強調している。

難攻不落の、魔力の鎧。悠季は手を握り、木刀を出した。

「それも、人とは違う、悪魔つていう生き物のね」

コレクトロヘヴィを担ぎ、悠季は歩き出す。カタパルトはいらないらしい。レールの上を歩き始め、上空を見上げた。

一夏とセシリ亞が戦う景色。悠季はそれを見て笑った。

「篠ノ乃、山田君。いいな。今聞いたことは、極秘事項だ。あの馬鹿が全部喋ってしまったが、決して口外しないでくれ」

悠季の背中を見つめる篠。彼女の眼には、悠季が悪魔の化身にはとても見えなかつた。

2 (前書き)

こんばんは。初めてお田にかかります。尾時山です。

今回、原作通りではなく、オリジナルでセシリ亞戦を進めていきます。結果が違いますので、ご了承下さいませ。

「あら、逃げずに来ましたのね」「誰が逃げるかよ」

空中にて、一夏とセシリ亞が睨み合つ。セシリ亞が腰に手を当て、喋つているが、一夏は無視をした。

「最後のチャンスをあげますわ」「それは、こっちの台詞だな」「んまつ……。本当のこと言つて、何が悪いのですか！？」

唯一の武器であるブレードをセシリ亞に向けて、一夏が言い放つた。

「今、籌と、日本の事を謝れば、見逃してやる。それを断るのであれば、俺はお前を叩き潰す」

チツ、と一夏が舌打ちをした。スラスターを吹かし、セシリ亞に急接近し、特攻を仕掛ける。

「潰される覚悟はあるようだな。いいぜ、溺れちまいな！自分の傲慢さが作り出した、毒の海に……」

ブレードで、セシリ亞の専用機・ブルーティアーズに傷を付ける。シールドエネルギーが、少しではあるが、減少する。

「なあつー？私に、一撃を……っー！」

途端に激昂し、ブルーティアーズから、八機程のビットが射出される。一夏はビットを確認し、スラスターを吹かしながら、ビットの焦点をずらした。

「動きが荒いっー！」

動いている最中、隙ありと言わんばかりに、セシリニアがライフルを乱射してくる。横目でそれを確認した一夏は、身体をぐるりと一回転させ、受け流した。

クラウス・アーツの回避技、リバーシブルという技だ。単純かつ汎用性の高い技である。

「外した！？」

「ハエが止まって見えるぜ」

ビットのオールレンジ攻撃をものともせず、ブレードで反射させながら、別のビットを撃たせた。機転の応用。ブレードならば、シールドは減らないし、反射も出来る。

ランチアと笄のおかげで身についた危機察知能力と動体視力。十分にそれを発揮しながら戦っている。

「くつ……ー！」

一夏の白式の移動速度が遅いのが、逆に狙いにくい。当たた思つたら、残像であつたり、ブレードで防がれたり。

「どうした、ヒロードさん……」

ゆつくつと近付いてくる一夏に向かって、後ろひきがりながらライフルを連射する。

射撃特化機体なので、弾数が多いが、それでも、弾切れは怖い。セシリアが少し焦りを見せながら、トリガーを引き絞る。

「当たり……なさいっ……」

思わず、顔面に撃ち込む。搭乗者の命を守るシールドが張られているので、大丈夫ではあると思うが、それでも顔面は剥き出しであるため、衝撃はとてもないだろう。

「ちいっ……！」

歯を食いしばって、受け止める一夏。エネルギーが大幅に減るが、それでもまだ、一夏の方が多い。

衝撃で口が切れ、流血する。しかし、そんなことで止まる一夏ではなかつた。

「くっ……一夏こまで……」

ライフルのビームを刃と見立て、サーベルにして斬りかかるセシリア。一夏は後ろに下がつてそれを避け、振り切った隙を突き、踏み込んで前蹴りをお見舞いした。

「きやあっ……！」

セシリアのシールドエネルギーはもう殆ど残っていない。一か八かで、数少ないビットを一斉掃射するが、一夏はスラスターの推力

を切り、急降下して、セシリアに自爆させる。

「一発一発が軽いな、ビットは」

「つーーー！」

一夏がビットの弱点を突いた。まさにその通り、セシリアのシリードエネルギーはまだ切れない。

「こんなこと、時間が掛かってしょうがない……。だから……」

白式から、くすみが取れ、純白の輝きが見えた。ブレードからは、ビームが出、先程とは違つ機体の様な印象を受けた。

「ファースト・シフト一次移行……！？まさか、初期状態で、私を圧倒していたと！？」

「一気に、カタを付ける！！」

ブレードのビームがほとばしる。シールドエネルギー残量をも食つているが、一撃でセシリアを倒せるなら、小さい対価だろ？。

一閃。ブレードがセシリアを斬り付け、とどめを刺した。試合終了。ブザーが鳴り響き、アナウンスが入る。

「勝者、織斑一夏。織斑一夏」

ブレードのビームを止め、セシリアを見る。

「俺の勝ちだ。謝りに来いよ」

信じられない。自分が、この男に負けるなんて！

悔しげに歯を食い縛る。しかし、次の戦いに備える為、セシリ亞はピットに戻った。

「やつた！！一夏が勝った…！」

悠季が手を握り、自分のことの様に喜ぶ。ちょうど、一夏が帰還すると、ハイタッチを交わした。

「やるじゃん」

「いやいや、ランチアと篠のおかげさ。ん？お前も、あいつと戦うのか？」

悠季がドレッドノートを開いていたことに気付いた。悠季は額ぐと、そのままカタパルト無しで飛び上がった。

「人間、じゃねえなあ、あいつ……」

的を得た言葉だ。事実、彼は人間ではないのだから。

「そこか……」

セシリアを視認する。悠季はエレクトロヘヴィを鎌に変え、セシリアの正面に現れた。

「来ましたわね、殺人鬼」

「……否定はしない」

悠季とセシリアの眼が暗くなる。暗黙の空気が張り詰めた。

「大体、あれはお前も悪い。確かに、キレたことは謝る。『じめん』その場で頭を下げる悠季。しかし、セシリアは銃口を向け、引き金を引いた。

「あなたの方が、人を見下していくよ」

自分が舐められている、と感じたのか。悠季はビームを避けず、そのまま頭で受け止めた。

ドレッジドノートは全ての攻撃を防ぐ。大したショックも何もない。

「……これで、あなたの気は済んだか？セシリア・オルコット嬢」

悠季が顔を上げる。セシリアは驚いたように眼を開いた。

「あなた、それで怒らないんですね！？」

「戦いに、卑怯もクソもあるもんか。それに、僕だけならまだいい

しかし。

言いかけた途端、悠季の身体が消える。セシリアが動搖し、辺りを見回した。

気付くと、喉元には、エレクトロヘヴィの刃があった。まだ斬られてはいないが、首を刈り取られてしまいそうだ。

「負ける気は、そっそくない」

セシリアの背後に悠季が現れた。しかも、彼は宙に浮いているのではなく、宙で立っている。

魔力で足場を固める、ホバリングという技を使っているのだ。悠季はそのまま、セシリアの頭を、片手に持っている木刀で叩く。

一撃で、1／3のエネルギーを持って行った。続いて、ビットを一つずつ握り潰し、セシリアの腕から、ライフルを奪い取る。

ここまでして動かないセシリア。動けないのである。悠季がしている、独特のオーラに触れているため。

「終わりだ」

めぐるましいスピードでライフルを連射する。エネルギーがみるみる削られ、セシリアの負けが決まった。

わずか1分の戦い。セシリアが呆然とするが、悠季はセシリアの腕を掴み、彼女のピットへと連れ込む。

「あ、あなたは……」

「実力は見せた。文句はないだろう?」

あまりにも呆氣ない。悠季はライフルを返し、血の塊のピットに戻つた。

「圧倒的だったな、おい」

ピットにて、一夏がまず最初に出迎えた。ドレッドノートを解除し、Hレクトロヘヴィを収縮・収容する。

「Hアトリックからの、スラッシュもどきで終了です。あまりにも弱すぎる」

「そりが……」

悠季の感想。Hアトリックは千冬は前に見た。彼の瞬間移動技だ。

「なあ、ランチア」

一夏がランチアを呼ぶ。彼だけ、千冬から話を聞かされていないのだろう。

「お前が、俺の補佐になるんだろう？それなら、お前が代表になつてほしいんだが」

「一夏、話聞いてるよね？僕は」

「名前だけなら、代表にはなる。けど、実質的な代表は、お前の方がいい」

一夏がそういう。それなら支障は出ないだろうが、それでいいのか？

「織斑先生、どうすれば……」

「クラス代表の命だ、従え」

つまり、一夏の言づ通りにしろ、といふとか。

「……わあつた。僕に任せな。でも、対抗戦は一夏、君が出で
「ああ」

二人に繋がる手。この二人の友情は、どんなものよりも固い絆で
結ばれている様だ。

「よろしくな、副代表さん」

「こっちこそ、代表」

「けり」と笑い合つ。本当に彼等は仲がいい。

「終わつたら戻るぞ。ゆっくり休め」

「はい」

ランチアと悠季。表裏一体の同一人物。

一夏がそれを知る日は、いつ来るのであらうか……。

Mission 5 中国女孩在恋（前書き）

下ネタ注意です……、すいません。

翌日の夜。

その日は、ILSの飛行練習や、何やらがあり、一夏が少しヘマをして、顔面から墜落した。

ランチアが一夏を抱き、救護室に運んで、その後も、訓練機の後片付けや、山田先生の気付けなど、雑用に追われた一日であった。

セシリアとは和解し、第、一夏共々、彼女に謝罪された。ランチアに至っては、ピットに連れられた礼をも言われたのだ。

「ふーー……」

自室にて、シャワーを浴びて、制服でベッドに寝転がる。同タイミングで、千冬から携帯の方に連絡が入った。

「はあー……」

「悪いな、疲れているところ。どうやら、校舎内に不審人物がいるらしい。見回りに行ってくれ」

それは用務員の仕事だろう、と言つも、仕方なく従つ。トークを羽織り、あぐびをしながら、校舎に戻るのであった。

「無駄に広いわね……」

暗闇の校舎内の中、ツインテールの少女が一人。地図を見ながら移動するも、なかなか目的地に着かない。

「イライラするわね、どこにあんのよ、事務受付」

同じ所をぐるぐる回つてゐるだけな気がしてならない。彼女は溜息を付き、座り込む。

「冷静に考えるのよ、鳳鈴音。例えば、いつこう時は、人を呼ぶとか」

ちゅうび、コツコツと、ソールと地面がぶつかる音がした。それは、どんどん彼女に近付いてくる。

「ナイスタイミング……！」

「ふああ……っ。なんだ、不審者じゃないじやん」

無論、その人物は悠季であつた。携帯を取り出し、連絡をし始めた。

「もしもし、千冬さん？不審者じゃなかつたです。なんか、迷つてるだけみたいです」

「そうか。案内してやれ。終わつたら、食堂に来いく

「人使い荒つらあ……」

「通話終了」。くるくると携帯を回して、仕舞つた。

「とのことなので、君を今から案内する」とになりました。どう

行くの？」

「一階、生徒受付」

「はいよ……」

大きなあぐびをしながら、悠季は彼女の前に立ち、案内する。あまりにも悠季が大きいので、彼女はコートしか見えなかつた。

「いくつあんのよ、身長」

「184cm……。眠い……」

「だつらしないわね」

「疲れてんだよ……」

「ジジ」と歩く悠季。歩いて3分で目的地に到着した。

「ほい、いつてらっしゃい」

「ありがと、助かったわ。そういうや、アンタの名前を聞いてなかつたわね」

「ランチア・ストラトス……。好きな呼び方していいよ」

眠そうな受け答え。相当疲れているのだ、と彼女は思い、早めに用を済ませた。

「ファン・リンイン鳳鈴音さん、よつこセーラー学園へ。2組への編入です。案内は、そこ

隣を見ると、眠眠打破を飲んでいるランチア。段々彼が気の毒になってきた。

「全然効かねえ……」

「大丈夫なの、あんた？」

「大丈夫。1組の副代表さんに任せなさい」

立ち上がるランチア。コートから飴玉を取り出し、舐めながら、鳳鈴音をまた案内する。

階段を上り、1組の教室の隣に立だ、と紹介してから、さつわとずらかるうとする。

「ああ、そういうや

「まだなにか……？」

「寮も案内してくんない？ 666号室って行つてたんだけど」

ランチアの中で、何かが崩れ落ちた。まさかの、一人部屋生活からの転落。

「それ、僕の部屋

「ならちょうどいいわ……って、ええ！？」

「ああ、大丈夫大丈夫、君にあんま興味ないから、襲つたりなんかしたりしないよ」

「したらぶつ殺すわよ」

勘弁してくれ、とランチアがぼやいた。しうがなく、彼女を連れて自室に戻る。

「ほれ

「だから、なんでこんなに広いのよ。しかもアンタ、これじゃスウイートじゃない」

どうでもいいだろ、なんなん、と言つて、ランチアは外に出た。

「じゃ、呼び出し掛かつてゐるから、『やつくり

足早に離れるランチア。ゆつくりした方がいいのは彼自身だらつ、と鈴は感じた。

そして、呼ばれた通り食堂に向かう。中に入ると、1組全員がランチアを出迎えた。

「クラス代表＆副代表決定記念」という、派手な幕が下がり、一夏が鼻に絆創膏を貼つたまま、写真を撮られている。ランチアは横目で軽く笑うと、千冬の元へ動く。

「お疲れ様です……」

「お前がな……。大丈夫か？」

「まあ、大丈夫です。転校生のファン・リンインさんが同室つてことは知らなかつたので、メンタル持つてかれましたけど」「ファン？ ああ、そいつは中国の代表候補生だ。後は、一夏の幼なじみでな」

「あいつ、そういうの多いなあ……」

学園で顔見知りも多いのは羨ましい。一夏を羨むのは何か新鮮だ。

「神威、呑むか？」

「酒ですか？」

「親父さんから聞いたぞ。なかなかイケる口とな」

「あのバカ親父が勝手に呑ませるだけですよ」

ビールを渡す千冬に、悠季は、教師がしていいことか、と思つた。全て創龍の所為にしておきたいが、酒は嫌いな訳ではない。

プルタブを開け、一気に飲み干した。缶を握り潰し、近くのゴミ箱に投げ入れた。

「まだあるぞ」

「宴会じゃないんですから……。普通に「一ラ」とか下をこよ」

「あいつらの中に特攻すれば飲めるかもな」

「だから普通に表現しなさいって」

千冬にシッコリながら、悠季が女子の群れに入つていく。肩を触られた女子が黄色い声を上げながら、顔を赤くする。

「なんかちょうどいい。飲み物と食べ物」

「はい、喜んでっ」

一斉にピザを差し出された。続いて、ペットボトルのスプライトを渡される。

一枚取つて口に入れながら、スプライトを飲む。炭酸の刺激が心地好い。

「ランチアさん、こちらもいかが?」

「ありがとうございます、セシリシアさん」

「普通にお呼びになつてくださいな」

声をかけたセシリシアが、ショートケーキを提供する。一口で平らげると、指に付いたクリームをペロリと舐め取る。

「グローブも、お外しにならなければ？」

「そだね」

フィンガーレスグローブのベルトを外し、コートのポケットにしまつ。手を握つたり、開いたりした後に、ちょっとしたマジックを行つた。

掌から、大福が出て来た。それを口の中に投げ入れ、もぐもぐと味わう。

「んむ、んまい」

「凄いマジックですわね」

Black Cherryの居候である女性から教わつた。カロリーを消費して出来るマジックだ。

「食べる？」

一個目を作り出す。チョコレート餡の大福だ。

「素敵なマジックですこと。美味しいですわ」

セシリ亞にも喜ばれる。笑顔にする為のマジックだと教わつたら、使い道は正しい。

「いたいたつ！副代表ランチア・ストラトス！」「あー……」

学園内の新聞部であろうつか。カメラで写真を撮りながら、ランチアに近付いてきた。

「どう? 心境は?」

「え……。あんなが代表なので、僕が副代表として、命を削つて努めさせていただく気持ちを持つてます」「大人……」

口からでまかせ。ランチアがスプライトを飲みながら言つた。

「そこ」のセシリア・オルコットさんとの戦いは、どういう感じだった?」

「女性の強さを、生徒代表として表に出していました。正直、気にやられそうでした。結果には勝ちましたが、気持ちだけなら、彼女が勝っていたと思います」

実際、恐怖心などなかつたが、気持ちも持つていなかつた。その点、セシリアは、ちゃんと闘心を持つていたことを、ランチアは評価していた。

「ここ」の方こそ、我が大英帝国の誇りですわ

「あまり持ち上げないでよ?」

「事実ですもの」

何か?とセシリアが言つ。ランチアは薄く苦笑いした。

「もしかして、お二人は『テキちゃん』たり?」

「それはない

「ないですわね」

即答。あまりの速さに、新聞部が引いてしまつた。

「ランチア？ビーフした、ピザ、食べないのか？」

ちょうど後ろから、ピザを持った篠がやってくる。これをネタに……、と思つた新聞部が、また質問した。

「じゃあ、篠ノ乃さんとテキてるの？」

「何ですか？」

「ないねー」

先程と同じ様な反応。一応先輩なので、篠が敬語を使う。ランチアは、篠が持つて来たピザを食べながら言つた。

「いや、篠ノ乃さんとストラトスくんが恋人同士か、ってコト」「ああ、それないです。確かに頼もしいし、なつてくれたら、助かるとは思いますが」

「遠回しに好きって言つてないかい？それ……」

変な言い回しをした所為で、突つ込まれてしまつ。篠が顔を赤らめながら、否定した。

「無いです！！」

「だつて、思い人は僕じやないもんね」

「……なるほど」

ランチアの一言で感づいた。一夏か。

「ランチアさん、それは言つてはダメでしょう

「なんで？だつて、学園外の人間かもしけないじゃん」

わかつてゐるから、余計質が悪い。しかし、それはそれでごまか

せるとと思つた。

「学園外？」

「例えば、アイドルグループの人とか、同中の男の子とか」「マジで？」

「……東〇紀〇ですよ」

「……渋くね？」

あまりの年代差に、ランチアと新聞部が突っ込んだ。唯一そのネタが判らないのがセシリ亞である。彼女の頭の回りに、？がたくさん浮かんでいた。

「ま、まあ。随分ネタも貰つたし、〇山紀〇が好きって判つたしで、私はここらでお邪魔するよ」

「お疲れ様でした」

「あ、そつそつ。ギャフ」

新聞部がポケットから、缶と、袋を出した。

「レッドブルと、バガ付く五文字のもの」

「ちょ、これは洒落になりませんよ？セクハラですよ？つか、買っちゃダメでしょ」

「何を貰つた？」

ランチアの手元が気になる箒。見よつとするが、ランチアが必死に抵抗する。

最終的に、その場から走つて離れ、箒を振り切る。その時であつた。

「うわわわあっ！？」

女子とぶつかり、飲み物がランチアに直撃した。無論、ランチアがびしょびしょになり、制服が汚れる。

「ごめんっ！大丈夫？」

「う、うん……」

びしょびしょのランチアが妙にエロい。服が張り付き、気持ちが悪いランチアは、上の制服を脱ぎ、アンダーウェアだけになつた。アンダーウェアが濡れて、透けている。そこから見える、逞しい筋肉に、数人の女子が魅了された。

「ら、ランチアああっ！－」「コードは羽織れっ！－！」

「え？あ、あかん！－」

美しい背筋。逆三角の体。それを見た筈が顔をまた赤くし、叫んだ。

「んまあっ、努力の体です」と……」

セシリアが遠目から見る。筋肉の盛り上がり様が尋常ではない。努力して作った身体だろう。

「いやああっ！－」「真提供ありがとおおおっ！－」

帰る直前の新聞部に、シャッターを連写される。ランチアはまた走り、レンズを避けながら、自室に戻った。

「ぐはあ……。なんじゅうじつやあつ……」

「あら、おかえり……！」

「見、見ちゃダメだよ！？」

「アンタ、なかなか良いカラダしてんわね。ボディビルダー？」

「そっすげじゃねェだろおつー！」

浴室の鈴音に、見当違いの言葉を言われる。ランチアはアンダーウェアをシャワールームで脱ぐと、自分のマッサージ椅子に放り、バッグからタンクトップを取り出して、着替えた。

「制服も「一もびちょびちょだよ……」

「酒臭いわよ、「一」

「あの子、酒呑んでたのかよー！」

「あら、何か落ちたわよ……って、なんつーモン持つてんのよー！」

ポケットから出たバイ〇グ〇。ランチアは慌ててそれをごみ箱にぶん投げ、その場に膝と手を付いた。

「もうやだ……。この学園、なんか怖い…………」

「うぐう……」

翌朝。腹部に鈍痛を感じたランチアが、痛みの余りに眼を覚ます。鈴のボストンバッグが腹部に落ちていた。そして、横にはその当事者が。

「あのねえ、私に起しそれたら、せつせと起きなさいよ。
……おはよー、『じわこまゆ』

ボストンバッグを床に置き、ベッドから出る。乾かした制服を着、汚れたコートはそのままに、バッグから別の白いコートを着て、顔を洗う。

寝癖が酷い。手櫛で適当に整え、ゴム紐で後ろ髪を纏めた。

「今何時だ……？」

左腕のロレックスの腕時計を確認。7時になつたばかりだ。

「朝メシはどうしたの？」
「食堂わかんないから、行けないっての」
「……それで、この有様か」

冷蔵庫から、緑茶と冷凍のパスタが出ていた。レンジで温め、食

べたらしい。

「あんまりパスタ好きじゃないんだけど」

「何故食つたし……」

昨夜のレッドブルを飲み干しながら、鈴に言つた。

「始業が8：00からだから、まだ時間あるよね」

「余裕じやない。食堂行くなら、さつとこしなきことよ」

「鈴音さんも行く？」

「勿論。早く行くわよ、神威悠季」

随分と偉そだな、と思つたが、その時に、悠季と呼ばれたのに気付いた。

「アンタねえ、裏の人間の神威創龍の息子とか、……。アンタのバッグの連絡先から判つたわ」

「まさか、親父に電話とか」

「したわよ。起こし方を聞きたく。『一発入れりやア起きンだら』とか言われたわ」

なんと酷い親だろ？ 悠季が頭を抱えながら思つた。

「取り敢えず、ランチアで今は生きてるから、その名はあまり呼ば

ないで」

「なんで？」

「裏関係が混じってるんだよ」

「……ああ。なるほど」

裏関係、多分、彼等の本業だらう。感づかれては困るため、元、偽名を使つてゐるのだ。

「じゃ、食堂行きましょつか」

「5分で行くわよ」

「5分?」

ランチアが鈴を抱ぐ。ちょうど、ランチアの肩から、腰で分かれ
る感じだ。

「2分で行くわ」

階段を全て飛び越え、言葉通り2分で着いた。ランチアは鈴を下
ろすと、鈴がランチアの背中を叩いた。

「やるじゃない、アンタ!...」

「いいからメシだメシ」

料理を受け取るため、カウンターに行こうとするといふと、生徒が一斉
にランチアに料理を渡す。

「ストラトスくん、食べて!...」

「私自身を食べて!...」

「最後はイラネ」

ありがたく頂戴し、空席に座る。鈴が隣に座ると、ランチアの料
理を摘みはじめた。

「なにやつてんの?」

頬を手で挟み込むよつに掴みながら、鈴に問うランチア。

「いいじゃな……いたたたた!!離せつ!!」

「謝りなさいよ、まずは」

「悪かつたからあつ!?

ランチアの手が外れた。鈴は顎をペたペたと触り、怪我が無いか確かめた。

「食べたかつたら、言えばいいのに」

「ちつさいことを一々言ひつてられるかつての」

食事を進めるランチアに、鈴は睨みながら言つた。余程痛かつたのだろう。

「パンとスープ、おかわりしてこよつと」

「ついでに私のもね」

「判つた」

パシリな感じではあるが、別に気にしない。料理を受け取り、人混みを飛び越えながら、元いた場所へ戻る。

「速いじゃない」

「飛んだからね」

「便利な身体能力よねえ。羨ましいわ

パンにかぶりつく鈴。ランチアはスープを啜りながら、彼女と話す。

「これも、父さんのおかげかな」

「何てつたって、父親があの神威創龍だからね。敵なしの、最強の裏の人間よ」

「知っているのは、それだけか」

やはり、悪魔狩りの話は出て来ない。しかし、鈴は何故創龍を知っているのだろうか。ランチアが聞いた。

「アンタの父親はね、中国の麻薬のシンジゲートを一人で制圧したりと有名なの。その手柄を公にしたくない政府は、軍隊の手柄としてるけどね。中国の英雄なのよ、あの人は」

その話なら知っている。なるほど、それなら辻褄が合つ。「んで、ウチの親父と喋つて、息子の僕と出会つて、僕の冷凍パスタを食らう、と」「あれ、美味しかったわ。」じちそうとも

二人とも、持つて来た料理を平らげ、食器を片付ける。そのまま校舎へ移動すると、1組の教室にて、鈴の話題が飛び交つていた。

「Jの時期に転入生！？」

「まさか、その子が対抗戦の相手……？」

「それはないでしょ。いきなりクラス代表を変えるなんて無理だし」

「そういうや、Jのクラス代表は？」

「織斑一夏。君の幼なじみでしょ」

「一夏！？ふふふ……、チャンス到来ー！」

Jの子も、一夏目当てか。ランチアが苦笑いしながら鈴を見る。

そういう理由で入つてこれるも凄い。

その為の実力なのか、どうなのか、果して。

「対抗戦は4組とここが大穴なんだってさ。専用機持ちがそれだけだから」

「その情報、古いよ」

「いきなりカツ」「つけはじめながら、鈴が話し始めた。ランチアは苦笑いしながら、彼女を見守る。

「2組も専用機持ちが代表になったから。そう簡単には優勝させないわよ」

「おはよ」

「ああ、ランチア。おはよ」

「人の話を聞きなさい！！」

教室に入り、先に来ていた一夏と挨拶を交わし、次に簫、セシリアと、お馴染みの面子に声をかけた。

「んで、なんで鈴がいるんだ」

「やっぱり、知つてたんだね」

「転入してきたのよ。代表候補生としてね。今日は宣戦布告つてワケ

ランチアと一緒にいて、なんだそれ？と突っ込む一夏。鈴がランチアを見るが、「こいつは副代表なだけでしょ、しても無駄無駄」

と言つた。

「ま、楽しみに」

「し、志村ー！…後ろー！…！」

「あん？後ろ？……つて誰が　　ぶみゅつ！…」

観客のランチアと一夏が叫ぶ。志村けん　ではなく、鈴の後ろから、出席簿という突っ込みが入つた。相方の加藤茶　ではなく、これまたお馴染みの千冬である。

「いいから教室に戻れ。SHRの時間が過ぎてるぞ。それと、ストラトスに織斑。80年代はやめろ」

「ええーっ」

ネタを知つている人間が何人いることだらう。ランチアがつまらなさそうに言つが、皆には大ウケであった。

「これでも、私も笑いをこらえているのだよ」

千冬が言つ。どう転んでもそんな風には見えないが。

志村で始まる朝の学園。8時だよーの偉大さを思い知らせたランチアと一夏であった。

「それで、一夏。あいつはなんなんだ？」

昼夜休み。簾が一夏に問い合わせるが、一夏はまたさかさずボケる。

因みに、それが気になり、午前中だけで、五回も出席簿による兜割りを食らっている簾。ランチアが氷嚢を持ってくると、ありがたく頂戴し、頭頂部を冷やした。

「お前、まさか志村けんを知らないのか！？」
「そつちじやない！今朝の転入生だ」

志村けんは誰でも知っているだろ？。ランチアはツッコんだが、セシリ亞だけ、ネタに着いていけていない。

「ランチアさん、志村けんとは？」

「日本のお笑い芸人だよ。チャッププリンみたいなヒゲを付けてヒゲダンスをやつたり、顔に白粉塗つて、バカ殿とかやつたりね」「是非、見てみたいですね」

ズレた会話が隣でされているが、簾は気にもしない。

「鈴か？お前が引っ越したのが小四だから、あいつが小五のころここちにきたんだよ。いわば、セカンド幼なじみ」
「じゃ、じゃあ彼女とかでは無いんだな？」

「何故彼女になる……」

一夏の緩いシッ ハハ。最近、この集団はシッ ハハ戦になつてゐる気がする。

昼食の為に食堂にやつてきたが、ちょいび鉢が出迎えた。

「待つてたわよ、一夏……」

「よつ志村」

「志村、じやなこつ……！」

そしてボケ。志村のノリが氣に入つたのだろうか。

「いいから、そこどいてくれないか？食券が買えんし、通行の邪魔

だし」

「わ、わかつてるわよつ……！」

手に持つてゐるラーメン。そこで、今日のランチアの昼食は決まつた。激辛坦々麺を頼むつもりだ。

「麵、伸びるよ？」

「一夏が早く来れば、伸びなかつたわ」

「俺の所為かよ」

食券を取り、カウンターに向かつ一夏。それにランチア、箸、セシリ亞が続く。

「あ、鈴音さん？」

「何よ」

「席取つといで」

真つ赤なスープの坦々麺を持ち、鈴が取つておいた席に座る。彼女がスープを覗き込んだ途端、顔が「うわあ……」となる。

「それは人の食べ物じゃないわあ……」「そう?」

箸を咥え、ぱきッ割る。巷では、この割り方を「仕事人」と言つらしい。

「臭いが凄いな……」

ランチアの隣に座る篝。彼女はきつねうどんを頼んだ様だ。因みにセシリアは洋食セット、一夏は鯖の味噌煮と、バラバラなメニューだ。

「しかも、普通に食つてるし」「美味しいよ? 食べてみる?」

一夏に、スープが良く絡んだ麺を、自分の箸で取つて食べさせた。よく言つ「あーん」状態だ。

「か、辛つー! バカ辛いー!」

口から火を吹くほど辛いらしい。ランチアは大袈裟と思いつつ、水を差し出した。

「あのですね、あなたたちの視線が痛いんですけど」

篝と鈴がランチアを睨む。別にそこまでおかしなことはしていない。

「い、一夏！－私のきつねも……」

「いや、今は水が欲しい……」

一杯の水がわずか3秒で無くなつた。まるで吸水機だ。

「それにしても久しぶりだなあ。丁度丸一年ぶりになるが、元氣だつたか？」

「げ、元氣にしてたわよ。あんたこそ怪我病氣しなさいよ」

「今、まさに怪我してませんか……？」

セシリアのツッコマ。一夏の舌は燃えている。

「なかなか上手いよ、今の『
いや、思つただけですが』

ランチアの評価。セシリアは苦笑いしながら言つた。

「そいで、一夏。対抗戦の為の練習なんだけど」

「あ、ああ。筈はダメだな」

「な、何をつ……」

筈が激昂するが、ランチアは致し方ない、と思つた。

擬音や感覚のみで話すのだ、彼女は。

「あれでわからないのか……！」

「いや、あれは無理がありますわ……。私が指導した方がいいのか

もしそれませんが、やはりランチアさんに敵うのは誰ひとりいませんし

「グリッドターントかは教えた方がいいよ」

「随分初步的ね」

「鈴が釘を刺すが、しょうがないと思った。実際、一夏は初心者なのだから。

「でも、ランチアさんは凄いんですよ？あの回避法は特殊かつ画期的です」

「ああ、リバーシブルとシャツフル？他にもスイッチとか、バックムーンとか教えたんだけどね」

スイッチは、自分と相手が入れ替わるように思わせる技だ。そして、バックムーンは後方宙返りである。

「剣も教えよっか？」

「それは筈の方がいい」

「わかつているじゃないか」

自信ありげな顔をする筈。ランチアがそれを見て笑った。

「あとは、あの瞬間移動だな」

「私との戦いで使つたあれですね」

「あー。あれは流石に教えたくないなあ」

「アトリックは魔力が関係してくる。そのため、彼等には不可能だ。」

「流石、化け物」

横の鈴がそう言ひ。この子こまで、そう言われるのか、と思い、
がくりと肩を落とした。

そして、午後の授業も終わり、訓練が始まる。

「そうぞ、そんな感じ」

回避技の「130R」を教えたランチア。バックムーンの要領で、
頭を視点にし、足を振り子のように振つて、元いた場所に着地する
技だ。

「それと、グリッドターンでかなりの力が得られますわ
「なるほど」

セシリニアとの共同授業。箒は竹刀を持つて待機している。

「後、一つだけ。僕取つておきの攻撃を教えちゃおつ

箒の竹刀を借りる。生身のまま、地面を蹴りだし、光線の様な速
れで、剣を突いた。

「うおおお……」
「突進突き。クラウス・アーツの一つ、『ステインガー』さ。ブー
スターを吹かせば出来るでしょ？」

一撃当たれば、即撃墜の可能性もある、強力な技だ。ランチア以
外が目を見開き、彼を注目した。

「おい、地面にクレーター出来てるぞ」

「あー。ほー」

砂を蹴り飛ばし、地面を埋めた。続いて、竹刀を箒に投げ渡す。

「実用的な」

「まあね」

箒の一言。実戦向きの型だが、悪魔狩りにしか使用したことが無い。

「ステインガー、ね。なるほど、使ってみよう」

そして夜。ランチアは箒の射撃練習に付き合つため、射撃練習場に来ていた。

「……」

「箒さん? U.S.P の弾は9mmパラベラムだよ?」

「これは違うのか?」

「それは45ACP弾。誰が使つてんだ、これ」

見知らぬカートリッジ。気になつて隣を見てみれば、千冬がソーゴム・Mk・23を撃つていた。

「何してはるんですか」

「見ればわかるだろう」

「いえ、わかりません」

射撃練習は教師も使えたのか。というか、これは私物なのだろうか。

「自前すか？」

「学校のだ」

「え、この前M9とグローブとU.S.Aとバイソンしか無かつたんですけど」

「探せばもっとある。M1911A1とかな」

「（）は武器庫か。悠季はため息を呞いた。

ちよつて悠季のテスイービルに気付いた千冬も、それを見て呆れる。

「ゴツいリボルバーと思えば、ツエリスカか……。なんでものを。象狩りの拳銃など、お前しか使えないだろ」

「親父が使えます。アイツはDEを片手で、且つ無反動で連射しますからね」

「化け物家族め」

片手で60口径の大砲を撃つ人間が目の前が居るから、この世界は広いと感じさせられる。

「悠季、弾をくれ」

「あい」

新たに持つて来たマガジンを渡す。きちんとマグチョンジも出来る筈に、千冬が感心する。

「第、誰から教わった」

「そのへラへラ笑つてゐる死神から」

「なるほど」

「千冬さん、軍隊出身だつけ？」

千冬も、マグチョンジから、初弾までの動作が速い。悠季がそれに感づいた。

「ああ、ドイツにな」

「ミハエル・シュー・マッハ、いた？」

「ああ」

いきなりF-1の顎兄弟の話が始まつた。悠季はひといひといひとも詳しい。

「フザけた看板した店もあつたさ。見知らぬスラムの辺りだつた。確か、『Black Cherry』だつたか？」

「そこ、僕ん家……」

まさか、家を知つていたとは。悠季がははつと笑つ。

「しかも、そこは国の範囲にない……」

「無国地だと……」

「政府が関与しないから……」

色々とメチャクチャだ。千冬と篠が苦い顔をした。

「あそここの店主、女しかいなかつたが

「どんな人？」

「水色のロングの髪の毛だ」

「キリエさんだ。槍とガバメント使いだよ」

創龍が異世界に行つた時、相棒として連れ帰つたらしい。

「てか、なんでウチに?」

「雨宿りだ。少し迷つてしまつてな」

スラムで迷うと危険である。何に襲われるかわからない。悠季も幼い頃、暴漢に襲われたが、走つて逃げ切り、最終的に暴漢が創龍に殴られて力タガ着いた。

スラムまで来て雨宿りとは、なんとも呑氣だと悠季が思つた。

「悠季、そろそろ帰るか」

「あ、うん。解つた。では、お先に失礼します」

「ちよつと待て」

千冬が悠季達を制する。彼女はスーツのポケットから、小銭を出した。

「なんか買つてこい」

「やつた!!」

「何を勘違いしてんだ、私にだ」

適当にコーヒーを買つて、千冬に渡して血室に戻る。篝が肩を叩き、悠季を慰めた。

「そつこいつ日もあるわ」
「教師がやる」とじやねえ……

生徒をパシる教師など、前代未聞。これを教育委員会に訴えたらどうなることやら。

帰りに自分の金でお茶を買つ悠季。ついでに簫にも齧つてやった。

「ありがとな」

「いいよ。簫さんなら、ドンペリだつて入れちゃう」

「アホか」

ふふつ、と笑う簫。悠季はボトルを傾け、口に緑茶を注いで喉を潤した。

「あとな。呼び捨てでいいぞ？私も呼び捨てでお前を呼んでいるんだから」

「じゃ、遠慮なく簫つて呼ぶね」

「じりりと笑顔。簫もそれに釣られて笑つた。

自室内に入る。鈴がいない。隣にいるのだろう。

一日でベッドがぐひゃぐひゃだ。鈴の荷物を片付け、衣服は自前の洗濯機にかける。

「い、言つたわね！…言つてはいけないことを言つたわね！…」

案の定、隣から鈴の声。感情的になつてゐるようだ。

続いて、鳴り響く爆発音。悠季は慌てて隣に駆け込む。

鈴が片腕だけE/S展開をしていた。一夏が怯え、篠は頭を抱えている。

「鈴音さん、自重しようつか

「つるつてこーーー黙つてなぞーー

言こながらも、首根っこを捕まれ、弓をあらいでいく鈴音。ドアが閉まる前、鈴が捨て台詞を吐いた。

「あんた、次の対抗戦、覚えてなぞーーーギッタンギタンにして、思こ出させてやるーー！」

「落ち着けって」

「これが落ち着いてられるか……」

「話を聞かせてよ」

「部外者は黙つてなさい」

部屋へ連れ戻したはいいが、鈴音の怒りは収まらない。取り敢えず、ISを仕舞わせたはいいが、話は聞かせてくれない。

「なんであんなに大切なことを……っ」

その瞳には、うつすらと涙が浮かんでいる。悠季は鈴の瞳を見つめ、優しい聲音で言った。

「ねえ。泣いている女の子を、無視出来る訳、ないじゃないか。話を聞かせてよ」

「な、泣いてなんか……」

「泣いてるよ。アイツの鈍感さが、ここまで傷付けたのは、予想出来る。だから、話して」

微笑む悠季。潤んだ瞳から、河を作る一滴が流れた。

ティッシュで涙を拭き取つてやる。まるで、小さな子供の相手をしているようだ。

「あ、アイツ、昔交わした約束の意味を、判つていなくて……」

「どんな約束？」

「『毎日酢豚を作つてあげる』、って。アンタなら、解るわよね？」

大切な人の為に、料理を作つてあげるとこつ意味だらう。つまりは、『付き合つて』といつ意味か。

「なるほどねえ……」

「なんでわかんないのよ、つて言つたら、逆ギレされて、しまいには貧乳呼ばわりよー?」

発展途上の胸の膨らみ。『ンンアレックスを悪く言われたら、流石に怒るだらう。

「僕よりテリカシーがないなんて……。あのバカ」

「でしょ!だから、一回痛い目に会わせて、思い出をせめてやるんだから」

「鈍感であるなら

「

悠季が言いかける。鈴音が悠季を見ると、彼がフツと笑つて言った。

「遠回しじゃなく、直球で行くべきだと思つ」

「そんな勇氣、あるわけないじやない……」

「そうしてゐ間に、筹とかに持つてかれるよ、後悔したくないなら、

今言わなきゃ」

それでも、彼女には勇氣が出ないのであつか?

悠季は疑心暗鬼に思つた。

案の定、鈴音には無理らしい。悠季はため息をつき、苦笑いをす

る。

「今度、対抗戦の後で告白しちゃいなよ」

「それが出来ないのに?」

「いや、君なら出来るさ」

何の根拠も無いが、自信が無ければ出来るものも出来ない。そう考えて、悠季は背中を押した。

「アンタ、本当にいい奴ね」

「そう言つてもらえば嬉しい」

微笑む悠季。鈴音の怒りが収まつたようなら、良しとしたい。彼はそう思った。

「それでさ、鈴音さん」

「鈴でいいわよ。アンタなら」

「鈴。洗濯機、回してるけど、着替えはちゃんとあるよね?」

「勿論。無ければアンタの服を借りるわよ」

貸してもいいが、彼女には大きすぎるだろう。丈は大きく、ズボンの裾を踏んでコケてしまふ姿が想像出来た。

184cmの巨体に合つ服を見つけるだけでも精一杯だが、それ以上に、女子の服を見つけて来ること、特に下着を探すのが難しい。性別といつ点でも、サイズといつ点でもだ。

「でも、随分静かな洗濯機ね? 縛らしたの?」

「500ポンド。5万くらいかな？小型洗濯機なんだよ」

確かに、洗濯機のサイズ自体は小さい。しかも、ドラム式洗濯機だ。

「ランドリー、ちゃんとついてるのに」

「僕だけ特別なのさ」

「まあ、便利屋だからね」

この時だけ、悠季の職業が羨ましい。

学園に依頼される人間だから、それなりの対応をしたのだろう。

代表候補生のセシリアも、私物を持ち込んだ部屋だと悠季と鈴は聞いているが、これより豪華ならば、セシリアの財力をフルに使った部屋であるのだろう。

「よしつー。アンタから元氣を貰つたことだし、お風呂でも入つてこよつと」

「ああ、大浴場は一番下だよ」

「判つたわ、ありがと」

洗面用具を持つて、鈴が部屋を出る。確認したあと、ほつと悠季は胸を撫で下ろした。

「よ、よかつた……。この寮が消し炭になるところだった……」

安堵感に包まれる。コートを脱ぎ、制服から、タンクトップの姿になる。

「ら、ランチア？鈴はいるか？」

ドアを開ける音。鈍感大王の一夏が入つて來た。

「一夏」

「なんだよ」

「首吊つて死ね」

「お前も言つか！？」

簞にも、先程の事で何か言われたらしい。

当たり前だろう。女性の胸を馬鹿にするなど言語道断であるし、セクハラもある。

「悠……じゃなかつた。ランチア？夕飯を食べに行くぞ
「簞、ちょっと待つて」

ランチアに再び戻り、一夏を隣の部屋の椅子に縛り付け、二人は食堂に行つた。

対抗戦当日。食堂のデザート半年フリー・パスの期待を背負つた一夏。だが、それ以上に、鈴のプレッシャーが一夏を圧倒していた。

朝の食堂からおかしな重圧。一夏にだけ、的確にかけてきた。

そして、会場の第2アリーナ。観客は大勢いたし、無論ランチアと筹、セシリ亞もピットにいた。

「一夏さん、ランチアさんの期待に応えて勝つてくださいね」

「あ、ああ」

「あっちからのプレッシャーがバネにつす」

向こう側のピットからの重圧。まるで殺しに行くかの様な気負いだ。

「い、行つてくる……」

勿論、いつまでもピットに籠るわけにはいかない。勢い良く打ち出され、大空へと舞い上がる。

「……待つてたわよ、一夏」

こぞ田の前にすると、やはつとてつもないプレッシャー。それだけで負けてしまいそうだ。

「今許しを請うなり、痛め付けるレブノルを下げてやつてもいいわよ」

「雀の涙程だらうが。いらねえよ
「シールドを貫く程の強い衝撃を『えれば、本体の方にもダメージが行く。それでアンタの記憶を取り戻させてあげるわ』

凄んだ声。本気さが伝わって来る

ここで負けたくない、その気持ちを再確認した一夏は、鈴を見据えた。

「いやぞ……。最初から本気だ」

「当たり前じやない」

試合開始の合図。同時に一夏が雪片を突き出し、突進する。
ランチアの「スティングガー」を見様見真似でやつたのだ。

「オラアツー！」

「な、何つー？」

完全に出足を挫かれた。しかし、ギリギリで、鈴のエリの非固定武装^{アンロック}が一夏の足を止めた。

「なんぢやつて」

非固定武装の装甲がスライドし、見えない何かに襲われる。一夏がそれを確認出来ずに吹っ飛んだ。

「『』の甲龍、舐めて貰つちや困るわ……」

そのまま見えない何かに翻弄される。ピットでは、セシリ亞の解説が入った。

「あれは衝撃砲。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃。それ自体を砲弾化して撃ち出す、ブルーティアーズと同じ、第三世代型兵器ですわ」

次元斬と似た様なモノか、と解釈する。ランチアは壁に寄り掛かる。

「空氣に色を塗らないと、避けられないか」

「スラスターの搖らぎを見れば、避けられるんではない？」

「最悪なことに、あの兵器には死角が無いようです」

「まさに、四面楚歌か」

アイツにはいい教育になる、と思つランチア。モニターを見て呴いた。

「パニック状態になれば、それこそ冷静に行動できなくなる。あの状況で、どこまで気を保てるか……」

アイツにはいい教育になる、と思つランチア。モニターを見て呴いた。

ランチアならば、エアトリックで鈴の後ろを取つて攻撃するだろう。しかし、一夏は人間だ。いきなり魔力を使いこなすなど、出来はしない。

「つたく、無駄に敵を作るから、そななるんだよ……」

笑いながら言つ。全然説得力が無い。

苦戦し続ける一夏。突破口を探し出そうとする引き換えに、エネルギーを削られていく。

「……ならつ……」「うだ……」

アンロック・ユニットを上手く誘導し、一機を破壊する。そのままステインガーをもう一発放つた。

一撃で、大半のゲージを持つていく。使用した一夏でさえ威力に驚愕する。

「くつ……」

「やられっぱなしは、性に合わないんだよおつ……」

燃え上がる二人の闘魂。

「何か、来た」

それを邪魔するかのように、二人の間に、煙が立ち上がった。

咄嗟の悠季の反応。アリーナのシールドを突き破り、衝撃がほとばしる。

「何事だ」

「エラだと思います」

千冬が落ち着いて悠季に状況を聞く。悠季も冷静に事を返した。

「織斑！…鳳！…戦闘中止だ！…」

インカムに向かって指示。彼らに聞こえてはいるようだが、煙が立ち上がっている為、相手を視認出来ない。

「ストラトス。緊急任務だ。いいな？」

「判つてます。アイツを壊せば良いんでしょう？」

一やりと笑いながら、悠季は返した。肩を軽く回すと、手から両刃の長剣を取り出した。

「天上天下なら、余裕です。でも、ちょっとこいですか？」

「何だ？」

「アイツらがどじまでもやるのか、見てみよじゃないですか」

楽観視しきぎでいる。千冬が冷静を装おうと、コーヒーを注ぐが、砂糖ではなく塩を入れていたので、かなり動搖していることが解る。

「やつぱり、僕が出た方がいいで

悠季が言いかけた時、簾が部屋を飛び出した。悠季はそれに気付くと、彼女を追う。

「ストラトス！！」

「簾は守ります。責任は取りますから」

千冬のストップが掛かるが、振り切った。簾が走って管制塔に向かうが、悠季に易々と追い付かれた。

「勝手に飛び出すんじゃない」

「黙つて行かせてくれ」

「行くなら僕に声を掛ける。君に何かあつたら、一夏ごとの面下げていこきやいい？」

「行く」と自体を否定してはいなじょうだ。つまり、悠季が簾を守る、と言っている。

「死なせる訳にはいかないんだ」

管制塔にちよび着ぐ。先にいた、シールドなどの緊急調整を行っていた上級生のインカムをひつたくり、叫ぶ。

「一夏ッ！－男ならッ！－そんなもの、勝つて当然だわッ－－！」

無茶苦茶だ。だが、それだけ、彼に期待しているのだろう。

出所不明のHSのカメラがこちらを向いた。銃口を向け、しつらに撃ち込もうとしている。

「つ……。面倒をかけるつ……」

ガラスを叩き割り、HSのビームを天上天下無双剣で弾き返した。

「一夏、鈴！今だ！！」

声に応えるように、一夏の雪片式型がHSを斬り付け、鈴の衝撃砲がそれを地面に叩き付けた。

「なんなのよ、アイツは……」「……」

「おい……。自己再生だと……」

鈴と一夏の通信が聞こえる。HSの状況を伝えているのだらう。

「チイツ！！悪魔が取り憑いてんのかよ！？」

管制塔から飛び降りる悠季。それを狙ったのか、HSもいきなり飛び上がった。

「Cut off！！（斬り落としてやる！）」

兜割りですれ違い、片腕を斬り落とす。同時に、HSを踏み台にし、瞬時にエレクトロヘヴィに持ち替え、空中で搔き鳴らした。

ギターから、電撃と、雷を帯びた蝙蝠が飛び出して来る。それを顔面に当て、視界を殺した。

「これでも……喰らいなつ！？」

最後の止めに、左手でテスイービルを構えた。持った手が光り輝

くと同時に、トリガーを引き抜いた。

紫色のマズルフラッシュ。着弾し、炎が上がる。

「ああ……。出でてい、悪魔……」

叫び声に応えるかのよつて、「」の装甲から、黒装束の、骸骨の仮面をした悪魔が、大きな鎌を持って、悠季に襲い掛かった。

「ヘル＝バンガード？ ハツ、上等……」

斬り上げた鎌の刃を蹴り付け、飛び上がる。管制塔の高さまで、また戻った。

「ら、ランチア！？ それに、あれはなんだ？！」

「一夏！？ 目の前のISに集中しなさい！！」

悠季の戦いに気を取られるが、鈴の声で我に戻った。ビームを撃たれると同時に、130Rで一夏はそれを避けた。

「一夏、エネルギー残量はどうぞ？」

「700ちょいだ！ お前は？」

「私は600強はあるわ」

ギリギリの戦い。気を抜けば、やられてしまう。

「やるわやねえ……」

雪片でビームを逸らしながら近付く。セシリ亞戦でも見せた、「ウェポンマジック」という技だ。

「いやにいや、ランチアの為にも負けらんねえんだよーー！」

上で必死に未知の生物と戦っている悠季に、このEISまで乱入させては、余計に彼に負担が掛かる。それを考えての行動だった。

「管制塔ツー！総員待避しろーー！」

ヘル＝バンガードの攻撃を避けながら、悠季が指示する。上級生が慌てて逃げ出すも、篝はその場で悠季を見続けた。

「悠季ツー！お前の力を見せろツーー！」

「あいよオツーー！」

ヘル＝バンガードが眼を光らせて消える。そして、悠季の足元から、地獄の門番が、鎌を斬り上げながら上昇した。

「Gunsーー！（ガンズーー）」

足元に魔力の足場を作り出し、それを蹴り付け エアハイクで上昇した。最上位までに到達したバンガードをまた踏み付け、高みを目指す。

「Fuck offーー！（くたばれーー）」

正面に、また死神のゲートが表れ、悠季の首を刈り取ろうとする。それを避けつつ、零距離で先程のチャージショットを放ち、自らの回りに幻影剣6本で円陣を作った。

2回目の突進。エアハイクでまたもや避けると、幻影剣をバンガ

ーデの回りに展開し、一気に射出した。

烈風幻影剣という、ガンスリングスタイルで使用する、幻影剣の技だ。一気に射出するから、威力が上がる。

「Hey, what's up? (オイ、どうした?)」

バンガードへの挑発。悠季は余裕を見せ付ける。

地獄の門番がそれに怯み、悠季から距離を取るが、どんなレンジでも、悠季の攻撃は当たる。

管制塔に入り、筈の横で、闇魔刀を出し、次元斬を放つ。

悪魔から吹き出す血。管制塔の壁を汚し、朱に染める。

悠季が天上天下に持ち替え、腰だめに構え、ブーメランの様に剣を投げ付けた。

またもや連続攻撃。バンガードを剣が斬り刻んでいる間、悠季はまた空中に飛び出し、闇魔刀で追撃する。

バンガードを踏み台にしながら、華麗な4連斬。空中連撃と、ラウンドトリップという技のコンビネーション。

息を付かせる間もなく、ひたすら攻撃を当てていく。

「Enjoy now! - (楽しもうぜーーー)」

闇魔刀を腰に、そして、見えない速さで、抜刀二連撃。創龍から教わった、空中連斬という技だ。

抜刀を主体とする創龍の技。それと、抜き身の刀メインで戦う悠

李。二つの技を合わせ、強力な剣技に変えた。

「逝つちまえ！！」

壁にバンガードを叩き付けた。そのまま、背後に魔力の足場を作つて蹴り出し、前に進んだ。

天上天下を突き刺し、串刺しにしたまま、下のISに投げた。命中し、ISの体勢が崩れる。

「これで終わつただ……ろ？」

しかし、ISの加速は止まらない。手に持ったライフルから、図太いビームが放たれる。

完全に油断していた。悠季は身体を空中で反らし、ビームを避けたが、すぐに一発目が待つていた。

ちょうど管制塔の真ん前にいるところを狙い撃ちされた。悠季の腹部をビームが貫き、彼が管制塔の壁に叩き付けられた。
そして、怨みを晴らさんとばかりに、ヘル＝バンガードがヘル＝ゲートを開き、悠季の肩から腰までを深く斬り付ける。

床と壁に悠季の血。彼の足元には血溜まりが出来、それが今、更に広がりつつとしている。

ヘル＝バンガードは追撃を止めない。転がり落ちた天上天下無双剣を、突進しながら悠季の腹部に突き刺した。

顔が凍り付く筈。今日の前で起こっている惨劇に、成す術も無い。

悠季の眼は完全に閉じている。苦しみに悶えながら。

ヘル＝バンガードが悠季を地面に倒し、鎌でまた斬り付ける。残忍な悪魔の本性。田の当たりにした笄は、顔を青くする。

「ゆ、悠季つ……」

必死の力で悠季の名を呼ぶ。届いているか、聴こえているかは判らない。

門番がすかさず標的を笄に変える。そこで漂っていたISも、ライフルを構え、笄を狙つた。

絶体絶命。生き残る望みが無い。

足が竦む。腕は動かない。最早、声すらも出ない。

もう終わりだ。マズルと鎌が、交叉する。

両者が一斉に動き出す。眼を閉じることすら、笄には出来なかつた。

剣が吹き飛び、天井にぶつかる寸前。

幕に向かつて来る攻撃が、死んでいた筈である悠季によつて、止められた。

片手で鎌を止め、もう片手で魔力を張り、ビームを吸収する。

「ゆ、悠季……？」

「死なせねエよ。僕がここにいる限り、誰一人も」

傷は完全に塞がつている。落ちてきた天上天下無双剣を拾つと、バンガードを斬り飛ばした。

「ちょっと、寝てたがね……。僕がこんなモノで、死ぬとでも？」

悠季が完全に復活した。ISのメインカメラを銃撃で破壊する。

「僕をここまで追い詰めたのは、お前らが初めてだよ

悠季の身体に、紫電が走る。次第にそれが速くなつていき、悠季を完全に包み込んだ。

「その度胸、気に入つた。ならば、僕も、全力で応えないとな」

ドレッドノートの時と同じ、エコーが掛かる。雷が更に強くなり、光の繭の中から、人とは掛け離れた 悪魔の姿が見えた。

「Are you ready?」

異常に強化された左手。眼光は鋭く、全身が刺で覆われた様な外見。左手で天上天下を持ち、横にゅっくりと剣を振った。

ヘル＝バンガードが、鎌」と真つ一いつになり、半身ずつが別れる。

僅か2秒の出来事。何の造作もないように、地獄の門番を屠つてしまつた。

「お……お前、悠季なのか……？」

「ああ。正真正銘の、神威悠季の真の姿だ」

突然の出来事が重なり過ぎて、声が暫く出なかつた筈が、その口を開いた。

そこには、悠季である。魔人の姿の、神威悠季。

「ストラトス、篠ノ乃！－無事……か……」

上の衝撃音に、慌てて千冬達が駆け込んできたが、その光景に言葉を失つた。

「ら、ランチアさん……？」

「いかにも、僕がランチア　いや、神威悠季だ」

暫く敵のIISが動かなかつたが、セシリ亞達が入つて来た途端、次弾を撃とうとする。

「Can you wait a while?（少しの間も待て

ないのか？）」

迸るビームを、自らの身で受け止めた。勿論、傷は付けられたが、一瞬でそれを再生してみせた。

「Ok…….C-mon.Crash you.(いいぜ、来な。
ブツ壊してやる。)」

千冬達がその現象に驚き、動きを止めた中、悠季がゆっくりと言
い、エアトリックでISに急接近し、蹴った。
たつた蹴り一発のみで、機体が吹っ飛び、内部パーツが碎かれた。
悠季はそれだけでは止まらず、魔力の足場を蹴り出すスカイス
ターで距離を詰め、天上天下で、空中の四連斬「エリアルレイブ」
で追撃した。

四つに細切れにされ、それが地面に落ちていく。

下にいる一夏達が、悠季を確認する。本物の悪魔の姿。だが、不思議と安堵感が心に湧く。

「ふう……」

頭を後ろに振り、悪魔の姿から、人間へと戻る。

「神威……。良くやつた……」

千冬が血で朱に染まった管制塔から言つ。その言葉を聞いて、急に悠季は気絶した。

「ランチアフ！？待つてろ、今行く！！」

地上へと急降下していく悠季。一夏がそれに気付き、スラスターを吹かして、親友を受け止めた。

「ランチア……」

悠季の顔を覗き込む一夏。生気がまだあると、にこりと笑った。

＾＾一夏つ！！ストラトスは無事なのか！？＾＾

「大丈夫だ、気絶してるだけだよ」

取り乱す千冬を、穏やかに抑える一夏。

悠季を抱え、ピットに戻ると、来ていた救護班に悠季を渡し、自らの武装を解除した。

Mission 7 悪魔の引金（前書き）

再びじんにわは。

前回、悠季の魔人化が出て来ましたが、その絵をあげるのを忘れていました。

下のURLから見れますので、興味がある方は見てやつてください。

<http://m.mぶp.net/d/165672.jpg>

Mission 7 悪魔の引き金

「……ん？」

見知らぬベッドに、見知らぬ天井。服はコードと、破れた制服。起き上がり、回りを見渡す。どうやら、自分は病院にいるらしい。

「やつと起きたか、神威」

馴染みのある声。黒ステッジの千冬が、悠季に声をかけた。

「千冬さん?」「は?」

「病院だ」

頭を押さえ、記憶を呼び戻す。

確かに、悪魔になつて、気絶したんだっけ……。

「頭が痛むのか?」

「いや、思い出していただけ」「そうか」

握り締めていた右手を開く。血で汚れており、鉄の臭いがした。

「よくやつてくれた。本当に」「ありがとうございます」

千冬が誉めるイメージなど、浮かびもしなかつた為、少し笑みが
悠季の顔に浮かんだ。

「診断では、内部の損傷が無いとのことだ」「まあ……。半人半魔の長所ですね」「完全に、あの姿は悪魔だつたぞ」

千冬にもそう言われるが、自分でも良く分からぬ。あの時、自分
の身に、何が起こったのかが、理解できなかつた。

「筹も外傷ゼロだ。制服に血が付いているがな
「後で謝らないと」

薄く笑う悠季。千冬が溜息をつくも、軽く笑つた。

「何か飲みたい物はあるか?」「へ?」「食べ物でもいいぞ」

物珍しい眼で千冬を見た。「どうかしたか?」と言わんばかりの
顔を彼女がする。

「キヤラジじゃないですね」「まあな……」「取り敢えず、お茶を貰えますか」「判つた」

千冬が病室のドアを開ける。外には、一夏らが待機していた。

「よつ、元気か、悠季？」

「一夏。聞いたの？」

「ああ。全部聞いたぜ。」この人に

後ろから、水色の長い髪を携えた女性が出て来る。悠季にとつて、とても身近な人だった。

「悠季、お久しぶりです。大丈夫ですか？」

「キリエさん、久しぶり。仕事は？」

「創龍に任せきました」

ゆづくつと悠季に近付く、キリエと呼ばれた女性。千冬が見た、「Black Cherry」の一人がする。

「なので、オフです」

「へえ……。ま、親父には良いかもしけんね」

「そうですね。あっちの音姫さんが大変ですが」

「でも、音姫さんは喜ぶでしょ？」

「それをイジる創龍が想像付きますよね？」

「まあね」

ベッドの横の椅子に座り、悠季と店の会話をする。完全に一夏達を置いてきぼりにした。

「さて……。一夏さんに、篠さん、セシリ亞さん、鈴音さん

「はい？」

「ありがとうございました。」この子の親友であつてくれて。特に、一夏さんがいなければ、この子の首は逝っていましたから

大体状況を聞いたらしい。

それから予想出来ることを想像したら、背筋がゾッとする。

「コイツは、死なせませんよ。俺の親友ですかうね」

「生意気言つねえ」

「つるせえ」

笑い合いながら話す一夏と悠季。キリエが微笑ましく思い、悠季達を見た。

「笄さんからも、お話は聞きましたよ。自らの引き金を引いた様ですね」

「引き金……？」

悠季が首を傾げた。それを知りたいのは悠季だけではなく、一夏や笄達も聞く様子だ。

「創龍から、聞かされていないのですか？貴方には、クラウスの血が流れているのです。更に言えば、貴方はクラウスと同じ存在……」「……へつ？」

間抜けた声。あまりの真実に、気が抜けた。

「貴方はバーミンガムで拾われた、それは聞きましたよね？」

「うん。それが？」

「拾われた場所が、教会だったのです。それも、クラウスとスパードを崇める教会……」

クラウスとスパード、魔界の侵攻から人間界を救った、伝説の魔

剣士の兄弟。

魔帝に最も信頼された悪魔。人間の愛を知り、魔帝に背き、その剣で魔帝を討ち滅ぼした。

「僕は、御祖父様のコピー？」

ゆりくつと額くキリヒ。悠季は自分の手を見つめた。

この手も、御祖父様の……？

困惑するしかない。それを受け入れるのは、あまりにも難しい。

「創龍が今28ですから、およそ13年前となると、15ですね。貴方がまだ、3つか2つの頃に、拾ってきたようですね。」

「捨て子……？」

「いえ……。教会の狂信者達が、創龍の血を元に、貴方を創ったのです……」

時は13年前。黒いコートを着た、長髪の男が、雨の中に傘も差さずについた。

「ようじや、教会へ……」

「随分ときつたねエ教会だね。臭くて鼻が曲がっちまうぜ」

悪態を付きながら、教会の出入口で、教徒と話す。教会の中がうつすらと見えた。血で床は汚れ、一番奥には巨大な石像が見えた。

「血生臭エな。俺も、このアートの絵の具になつちまうのかね？」「いや？貴方は丁重にお持て成し致しますよ……」

フードを被つた教徒が、にやりと笑う。

そして、隠していたナイフで男の腹部を刺した。

「はア……。あのよ、効かねエの、判つてやつてんのかよ？」

「貴方の血が欲しかったのですよ……」

ナイフを引き抜き、そのまま後ろに投げる。ちゅうど石像の前に落ちた。

「変わりモンだね、アンタも」

間髪入れず、男が改造したデザートイーグルを撃ち、教徒の頭を吹っ飛ばした。首から血が吹き出し、アートの一部になってしまつ

た。

「つたぐ、ぐだらね」

その場から立ち去る。しかし、田の前に、まばゆい光が発せられ、男の興味をそそった。

歩きながら光に近づく。その光が消えると、裸の男の子供が現れた。

「オイオイ、何だよ、こいつや」

身体を見る限り、2・3くらいか。男はその子を抱き抱える。

「……親父？」

つい口から出てしまった言葉。その子と、実父との感じや力が、非常に似ているのだ。

「そ、創龍……様……」

「ん……？誰だ？」

「こちら……です……」

創龍と呼ばれた男が、身を声がした方に動かす。初老の、心優しそうな男性が、多数の切り傷で苦しそうにしていた。

どうやら、先程の教徒にやられたらしい。男性は腹を抱えて話す。
「貴方は、クラウス様の『子息の創龍様でしょう』……？」「じいさん、無理すんな。今助けてやる」

先程殺した男の服を引き裂く。自らのコートから出したウイスキ

一ボトルの中身で消毒し、服をガーゼや包帯の様に、傷口に当てた。

「あ……ありがとうございます……」

「礼には及ばねエ。それより、あのガキはなんだよ?」

「あれは……。あの男が作り出した、クラウス様の複製です……」

「素体も、何も判らずに、か」

幼い子供。創龍の眼に、それが映る。

この、まだ年端も行かないこの子供が、そのような産まれ方をするとは、なんと残酷で悲しきことだらうか。

先程の男の死骸を見る。見れば見るほど、それに対する怒りと、子供への悲しみが込み上げてきた。

「あの男は、クラウス様に心酔し、自らクラウス様を蘇らせようと致しました……。そして、クラウス様の肉片と、貴方の血とを組み合わせ、あの子供を作り出したのです……」

「親父の肉? そんなモン、どこに……」

クラウスは何年か前に死んでいる。埋葬されたのか、燃やされたのかは、息子の創龍にも判らなかつた。

人の親の血肉を使う。それさえ、創龍を怒らせるのに十分であつたし、同時に、そこまでするのに理解できない、とまで思わせた。

「こここの墓地に、クラウス様は眠つております……」

「初耳だぜ」

「てつきり、知つてているのかと思つておりましたが……」

誰が埋めたのか、検討はある。多分、クラウスの弟であり、創龍の伯父である、スパークダであろう。

「……俺の親父で、創られたのであれば」

子供の所に行き、コートを脱いで、その子を包む。そして、その子を抱き抱えた。

「俺が、コイツを守つて、立派な子に育て上げてやる。俺の様な血に塗れた奴にはしたくないが、コイツがそれを望むなら、やむを得ねエさ」

「創龍様……」

「こいつア、俺の子だ。親父がいない今、俺が責任を取るしかあるめエよ」

教会を出ていく創龍。雨に打たれ、便利屋へと戻つていく。

「名前も決めねエとな……。悠か長い時を経て、大きな李の木のよう、育つてほしい……。悠季、だ」

一瞬の閃き。しかし、重みがある名前だ。
ゆつくりと、人間臭い男に育つてほしい。自分とは違い、より人間の様に。

「悠季、よろしくな

悠季の頬を撫で、微笑む15の若者。随分と若い父親だ。

不釣り合いかもしれない。しかし、血族である以上、責任は果たす。

その瞬間から、創龍の背中が、父親の背中になつた。

「実の母親も、父親もなく、只一人の血族が創龍。貴方を守るため、創龍は引き取ったのです」

「初めて聞いた……」

悠季の眼が丸くなる。キリエは優しく微笑み、悠季の手を握った。

「いきなり受け入れるのは、キツいかもしれません……」

「うん。まさか、親父がそんなに若かったなんて」

「あら?」

悠季以外がずつこけた。ちょうど、ペットボトルの緑茶を持って来た千冬が入ってくると、ずつこけた現場を見て、首を傾げた。

「注目すべきトコはそっちじゃないだろおつーー！」

「一夏、何が？」

「お世話様です、レイソーンさん」

「は、はい……。どうも……」

緑茶を投げ、それをキャッチする悠季。キャップを開け、茶を飲む。

「キリエさん。僕がどうやって産まれたのか、何者なのかを知つても」

真剣な目付き。悠季がキャップを閉め、ゆっくりと口を開いた。

「僕は、神威創龍の息子。神威悠季である」と、変わりはないよ。

僕は僕だ

「そうですね。流石は、創龍の息子」

予想していた様に、キリエが返した。悠季がまたもやキヨトンとなる。

続けて、キリエが口を開いた。悪魔の力について、話そつとしているらしい。

「貴方が、魔人に変身する時、身体はある引き金を引きます。それを、創龍はこいつ呼んでいます」

デビルトリガー

悪魔の引き金……と。

悠季の顔付きが更に真剣になった。一夏らも、キリエの話を聞き入る。

「貴方の悪魔の血は覚醒しましたね？それによつて、貴方は魔人に変身出来るのです」

「覚醒が、引き金、と」

「表現するならば、ですが」

「――と笑顔を絶やさないキリエ。悠季と違い、楽観視している。

「魔人になれば、あなたの人並み外れた身体能力が更に向上し、大

抵の攻撃では死ななくなります」

先日のあれが実証済みだ。身を持つて体感もしている。

あの恐るべき再生能力。特筆すべきは、ビームを喰らい、「仰け反らなかつた」ことだらう。

「しかし、あなたのことですから、過信はしないでじょう

「ああ。力を信じすぎれば、その分力に呑まれるからね」

「それでいいのです。気持ちとしては」

悠季の手を摩りはじめた。悠季が恥ずかしそうにするのを見て、一夏達が笑う。

「私が、可愛い弟子に言えることは一つ。デビルトリガーやを使いこなせ。これだけです」

どんな状況でも、どんな場所でも。

使いこなせば、とてつもない力となるだらう。

「キリエさん……」

「それと……。これは、選別です」

腰元から、二丁のM1911A1が出て来た。水色と、黒の、改造された銃。

「ガバメント……？」

「千冬さん、よくモーテルを、存知で。これは、『鏡花水月』。クラウスが使っていた銃です」

悠季が試しに一丁持つてみる。

とてつもなく軽い。羽のよう、軽量だ。

「これ、キリエさんが使つていた奴じゃないか！？」

「私より、あなたの方が相応しいと思いましたので。それに、私は新しい1911を手に入れましたし」

ふふふ、と笑うキリエ。悠季は鏡花水月をぐるぐると回して腰に差した。

続いて、ホルスターが渡される。最後に、美しい装飾の槍を渡された。

「これも？」

「私には、ボルヴェルクがあります。『マグナカルタ』昔使つていた槍です。愛弟子の為と思えば、槍の一本なぞ、安いモノ。それに、元々貴方に渡すつもりでいましたから」

槍を握り締めた。キリエの想いが、親友達の気持ちが、身に染みて伝わつて来る。

「キリエさん」

「何でしう？」

「よく、税関に止められなかつたね」

再び一夏達がずつこけた。しかし、今回だけ、キリエは平然と返した。

しかし、その内容も生々しいものであった。

「税関なんぞ、幾らでも騙せます」

「そりつと凄こことをおっしゃいましたわ！－」

セシリ亞の、スター・ライトマチーノの射速並のシシ『III』の所、彼女のシシ『III』のキレイがいい。

悠季はベッドから立ち、コートを着直した。そして、腰にホルスターを付け、鏡花水円を装備してみせる。

「なかなか、サマになってるじゃない」

「そうか？」

鈴の感想。少し疑問系にしてみると、自分でも気にいってもらいたい。

「では、神威。学園に戻るか」

「そうします。色々心配かけてすいませんでした」

千冬に頭を下げる悠季。千冬は首を横に振り、悠季の頭をぽんつと叩いた。

「ヒカヒカヒカ、色々と気負わせて済まなかつた。今回ばかりは、このひの責任だ」

そう言つた時、椅子から離れたキリエが、千冬に近付き、眼を優しく見た。終始笑顔のキリエに、千冬が吊られてしまつ。

「千冬さん。この子を、よろしく」

「ヒカヒカ、悠季君にようしく言つたといふのです」

「ふふつ、そうですか。手塩かけて、鍛えた甲斐がありました。で

は、また一つの口か

めぐくつと去るキリヒ。物腰は柔らかに、悠然よつも掴み所のな
れやうな女性だ。

「ところで、千冬さん？」

「なんだ」

「僕、幾らくらべて寝てたの？」

疑問に思った口。千冬は真顔に戻り、教えてやった。

「2日だ」

「ぐう～～！…久しづつ自室だあ～～！」

寮に戻り、背伸びをしながら自室に入る悠季。鈴の荷物はもうない。どうやら、部屋を移動したようである。

暁と一夏も別々の部屋になつたようだ。一夏が部屋を離れるだけだつたが。

「やっぱ、一人は気楽でいいなあ」

「口ごとにベッドで寝転ぶ悠季。その時、ちょうど暁が部屋に入ってきた。

「悠季。少しいいか？」

「いいよー」

寝転がりながら、返事をする悠季。それを見て、少し笑う暁がいた。

彼女はベッドの近くまで歩み寄り、悠季の皿の前に立つ。

「どうした わっぷ」

こきなり抱き締められた。彼女は、そんなことをするキャラじゅなこと、悠季は思っていたのだが。

「心配した……。でも、よかつた……」

「オイオイ、そこまでヤツじゃないんだぜ、僕は
判つてゐる。でも……」

簞の頭を撫でながら宥める。じつせり、泣いているらしく。
いつから女泣かせになってしまったのだらう。悠季はそんなことを
考えていた。

「一夏に見られたら、どうすんの」

「どうもしない。お前は、大切な親友だから。いや、もしかしたら、

それ以上かもしれない」

「それ以上……。ふふつ

少し笑みながら、簞を抱き返した。頭を撫で続け、まるで妹の様
に扱いながら。

「あまり僕をからかうなよ。君は、一夏がいるだろ」

「私の中で、一夏とお前の存在があるから、凄く困っているのだ。

一夏は大切な幼なじみで、長く時を共にして來た。お前は大切な親

友であり、何度も救われた

「惚れっぽいんじゃなく？」

「そうかもしれん」

簞を優しく離す。彼女がそれを感じ、悠季を離すと、彼がゆっくり
りと立ち上がった。

「でも、決めるのはまだ時期早々。悩んで、悩んで。それでも、僕
がいいと言つのなら」

悠季がドアに近付いた。そして、満面の笑みで答えた。

「『Black Cherry』に来な。僕はこつでも、便利屋にいふ」

便利屋の連絡先と、住所のデータが入ったマイクロSDを投げ渡した。そのまま悠季は外に出て、横を見る。

「やーー、女泣かせー」

「うるさい。セシリアヒ一夏まで、しかも千々さんまで。この野次馬どもめ」

鈴達が盗み聞きしていた。一ヤーハと悠季を見ながら、イジくり始めた。

「悠季さん……。貴方、女性に興味が無いんですね?」

「どーしてそーなる」

「はつ……もしゃ、あんたも一夏を…渡さないわよ、一夏は…」

「いえ、一夏さんは私が……」

「あー……。ちょっといいか」

一夏が口を開き、皆がそちらを見る。

その口から発せられたのは、まさに一夏らしい、と思わせるものであった。

「俺がどひつした?」

「い、いの鈍感……」

皆がひつくり返った。鈴に至っては、地面に亀裂まで入れている。

「へ？」

「お前……。流石だわ……」

悠季のツツ「ハハ。腹を抱えて笑いながら。

「まあ……。なんだ。取り敢えず、一見落着……なのかな？」

「そうだな……。後は、お前がデビルトリガーを使いこなすまでか

悪魔の力。人を助けるべき力。自覚して力を振るう。

「どうかしたか？」

ちょっととしてから、篝が666から出て来る。顔なじみの面子がいたが、特に何も気にしなかった。

「なんでもないよ」

悠季の一言。そつか、といつもの済まし顔で、戻つていくかと思つたが。

「退院祝いに、パーティでもやるか」

篝から言つのも珍しい。悠季は笑顔で言つた。

「いいね。今日は、僕が奢つたる」

気前のいい悠季。皆が笑いながら、食堂に向かつた。

その翌日、皆が酒で酔い潰れたのは、秘密である。

Mission 8 共鳴

「……ロジュー。」

旅客機内。眠つこけた少女に、黒コートの、少し長い髪をした男が声をかける。

「Jの男が創龍。悠季の父親だ。」

「シャルロット……着いたぞ」

フランスから、日本の成田空港へと飛んだのだ。
創龍にとつては第一の故郷。そして、シャルロットと呼ばれた、ブロンドの少女は、初の日本。

「ん……。おじさん、JにJでJ?」

「成田だ。もう着いたって言つてんだろ」

シャルロットの頭をぽんぽんと叩き、眼を覚まさせる。既に乗客の半分が降りていた。

「Jから電車だぞ。魔の成田線だ」

「いやいや、スカイアクセスで羽田まで行くんじゃないの?」

「成田線は心が洗われるぞ」

成田線と言つても、我孫子支線の方だ。成田を出ると、単線が続
也、田畠や林などの緑と眼を合わせることになる。

「じゃあ、成田線がいい」

「決まりだ」

創龍がシャルロットの手を引き、出口へと向かつ。

「お嬢ちゃんも、HS学園の生徒さんかい？」

銀髪の、右眼に眼帯をした少女に声をかけた。少女はドイツ語で、創龍に返した。

「Sie, aber wer? (貴様、何者だ?)」

創龍があぐびをしながら答えた。

「Ist ein Handwerker? (便利屋だが?)」

彼は多数の言語を話せる。英語に、イタリア語、フランス、ドイツ語、スペイン語等。勿論、日本語は第一の母国語だ。

「Ich tun? Schule in den IS, ich gehen? (どうだい? 一緒にHS学園、行かねエか?)」

「. . . Zögern. Nehmen Sie eine Fahrt von Narita Sky zugreifen. (遠慮しておく。スカイアクセスで行くからな)」

「Hauptversammlung. Ja, das war unehlich. (そりゃ失礼した)」

機内で飛び交うドイツ語。不思議な風景。シャルロットが首を傾げた。

「行くぜシャルロット。時間がねエ」

「え？」

「成田線は1時間に大体2本しかない。ローカル線だ」

「それはマズいね……。つて、普通にスカイアクセス乗ればいいのに」

「時間に一々身体を縛られてちゃ、楽しいモンも楽しめねエぞ」

大の大人が言つていい言葉なのだろうか。シャルロットが不思議に思った。

「悠季、元気かな？」

「あいつア、元気が取り柄だからな」

なんの根拠も無いことを言つた。一度目があくびをしながら、創龍がまた口を開く。

「第一ターミナルから電車出てるから、さつさと乗っちゃうぜ」

彼がICOカードを手渡した。これで切符を買う手間が省ける。少し強引に手を引かれ、駅に行くシャルロット。少女はそれを見、なにか勘違いしたのか、創龍に蹴りを食らわせようとした。後ろからの不意打ち。しかし創龍はそれを視認せず、脚を掴んで、逆さまにぶら下げた。

「つー！そいつと私を離せ！！」

「おい、日本語が話せんなら最初からそう言えよ」

シャルロットと少女を離す。シャルロットはキヨトンと少女を見

た。

「勘違いしてない？」

「？」

少女の頭に浮かぶ、多数のクエスチョンマーク。シャルロットは説明する。

「この人、ボクの護衛だよ？それに、幼なじみの父親だから、安心出来るし」

「……。すまなかつた」

単純な勘違い。創龍は少しだけショックを受けた。

俺、そんなに悪人顔してるか？ 深々と頭を下げる少女。創龍は彼女の頭の下に手を添え、軽く掴んで立たせた。

一寸ともブレない腕。恐るべき腕力だ。

「お嬢ちゃんも早くした方がいいぜ？時間は限られてるからな

「ああ……」

少女は足早に機内から降りる。創龍達も降り、ダッシュで駅に向かつた。

「ハリが上野?」

そのまま上野に出た創龍達は、少しだけアメ横で寄り道していた。

「やうだぜ。ほれ、甘栗」

近くの出店で買ってきた甘栗をシャルロットに渡す。ほかほかと温かい。

対する創龍は、肉まんを一、二個ほど食べている。

「おじれそ、食べるね」

「日本に来たら、まず食つことだ。焼きそば、タコ焼き、焼き鳥、

お好み焼き。日本酒とか焼酎もいいな」

ダメ人間の発言だ。シャルロットが呆れて笑った。

「箸も買つてやつたぞ。お前は箸は上手く使えないだろ?」

「うん。悠季に教えてもらひからいにけど」

「ホント、悠季好きだな。親としては嬉しいが」

肉まんの一 個田を口に放り込みながら言つた。シャルロットが頬を染める。

単なる恋愛感情だらうか、それとも。

「ま、女だつてバレない程度にイチャつけや」

「お、おじさん！！」

「実際、お前がしたいコトだろ」

軽く笑いながらからかう。顔を真っ赤にしたシャルロットが創龍を睨むが、怖くもなんともない。

「それで睨んでるのか？」

「む……」

「全然怖くねHよ」

三個田を一口でいった創龍。十秒位してそれを飲み込み、立ち上がる。

「あ、そうだ」

しかし、何かを思い出したようで、創龍はシャルロットに袋を手渡す。

「制服着とけ。あと、アミコアミコノシテは悠矢に渡してくれや」「うん」

元気な返事。甘栗の袋を丸め、近くの更衣室で着替え、また電車の旅を再開した。

「何か来た？」

いつものトレーニングを終えシャワーを浴びた後、身に覚えのある感覚を感じ取った悠季。だが、危険とは全く掛け離れた感覚である。

制服を着、ドアを開け、朝食を取りに食堂へと向かつ。ちょうど隙から簞も出て来た。

「おはよう」

挨拶を交わし、一人揃つて食堂へと向かう。途中で一夏とも合流し、感覚の話をした。

「なんか、身に覚えのある感覚なんだよね」「シックスセンス的な奴か？」

「いや。この感覚……。あ、親父か」

思い出した。道理で創龍の魔力が感じ取れる訳だ。更に、創龍が来た理由も思い出す。仕事で日本に来るとか言つていた。しかも、IS学園に。

「お前の父親は、どんな人なんだ？」

「むっちゃくちゃガタイが良くて、性格が破天荒。しかも、クッソ強い」

「なんか面白そうな親父さんだな」

笑いながら一夏が言つ。それを聞いた悠季が、とんでもない、と言つた。

「アイツの所為で苦労することが多いんだよね。しかも、尻拭いは大抵僕がしなきゃいけないし」

「いいじゃないか。親がいるだけで」

一夏の言葉が気になつた。彼には、親がないのだろうか？

「俺、気付いた時から、千冬姉しかいなかつたからさ」

「お前の方が苦労してるじゃないか」

「つか、色々俺ら苦労してるよな」

満場一致。三人しかいないが。

目的地の食堂で席を取り、いつもの様に食券を取る。一夏が座ると同時に、ビニからともなく鈴とセシリ亞が吸い寄せられるように現れた。

「おはよう一夏！」

「おはようございまーす一夏さんー！」

「お、おはよう……」

朝から元氣な奴らだ、と朝から100kmを軽く走つている悠季が言つ。お前が言つても説得力がないと幕に突つ込まれた。

「なあ悠季……」

「バカ、他の奴がいる時はランチアだつての」

「あ、悪い。忘れてた」未だ全体的に悠季の名前はバレてはいない。対抗戦の時は、『あれは別人だ』で何とかごまかせた。

「ランチア、回避技つてまだあるのか？」

「テーブルホッパーつてのと、後は完成型のミラージュだね。てか

一夏、ミラージュとウホポンマジック勘違いしてゐるでしょ

「ウホポンマジック?」

「武器使って反らすヤツ」

かなり重宝する回避技だ。使い方によつては、相手に返すことでも出来る。

「あの、空中ジャンプは?」

「エアハイクは魔力扱いになつちやう。魔力無いからね、君達には「なるほど」

色々と思い出そうとする悠季。そこへ、トリックスターの一つが使えるのを思い出した。

悠季と創龍は、『スタイル』と呼んでいる、戦闘の型の様な物がある。

変幻自在に動き回る『トリックスター』。

華麗な近接の『コンビネーション』『ソードマスター』。

蠅さえも寄せつけない『ガンスリングガー』。

鉄壁の防御術『ロイヤルガード』。

魔劍士の魂の技を扱う『ダークスレイヤー』。

大きく分けて五つ。また、時の流れを緩やかにしたり、分身を作り出したりするスタイルもある。

「フリッパーっていう技なんだけね」「ピンボールとかについてるあれか？」

「そう。回避技じゃないんだけど、空中で受け身を取る」

吹っ飛ばされた時には有利であるが、果して吹っ飛ぶことがあるだろうか。

体勢をすぐに立て直すところは、次に決めている行動も頭に入っているということもある。ように思わせることが可能だ。

「御望みとあらば、体術とともにやりますが、どうしますかイ、一夏の旦那？」

「いやいや、ランチアのオヤビン、無理言いなさんな。アンタの体術は人間離れしてそうで覚えられそうにないでさア」

そして変な話し方の掛け合い。クスクスと周りが笑う。

それを狙っていた悠季と一夏が、『計画通り！』と言わんばかりにニヤリと口角を吊り上げた。

口調をまた変える二人。息の合ったコンビネーションで、笑いの渦を広げていく。

「いいちかさーアン？剣のぼーウは、どーうしますカー？」

「おーウ、ランチアサーン。ステインガーだけで十分ネー」

「他にも！ハイタイム、ヘルムブレイカー、プロップなどをおかげで付けてこの価格！！！」

「あらま奥さん…これは安いわねー。タダですってよー…これは覚えるしか無いわ…！」

「お電話でのご注文、お待ちしております…！」

「フリー・ダイヤル0120、よんよん、いちの……」

「やめんか馬鹿者」

片言外国人から、ジャパネットの高田社長とその奥さんまで再現した。ちなみに奥さんは鈴が真似した。

次第にノつていぐ内、食堂の笑いが止まらず、最終的に笑いを堪えた千冬によつて強制終了せられた。

「おはようございます社長」

「誰が社長か。全く。それよりストラトス」

「はい?」

「転入生が来る。仕事だ」

はいよ、悠季はと手を付けていなかつた朝食のパンケーキにかぶりつきながら呟つ。

「教室まで案内してやれ。それとな……」

「ふあーい?」

口に頬張りながら、悠季が氣の抜けた声を言った。
牛乳で流し込み、千冬に向き直る。

「お前の親父さんが学園内に来るそうだ」

「それは知つてますよ。親父から連絡がありました。粗方、護衛の依頼でもされたんでしょ」

「まあな。わかつているじやないか。取り敢えずそいつことだ。

お前は今日遅れても構わん

「俺は?」

クラス代表の一夏が問つ。代表なのだから、当然何があると思つたようだつた。

「ない。ネタでも考へてる。絶対にお前は遅刻するなよ」

「あいあいわー」

「……ストラトス。あまつゝこいつを改造するんじゃない」

敬礼しながら自分に返す一夏を見て、千冬はランチアを睨みなが
ら言った。すまんね、と、一枚の皿を土台として作られたパンケー
キ・タワーを、ゆっくりと崩しながら、ランチアは言った。

「ふ……はあ……」

あくびをして、校門前で待つ悠季。父親の創龍はまだ来ない。千冬からの情報によれば、転入生が二人来るらしい。その内一人がシャルル・デュノア、もう一人がラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツの代表候補生

「ボーデヴィッヒって、ドイツっぽいなあ。……やっぱり。しかも

手渡された資料を見ながら呟く。顔写真を見ると、眼帯をした少女。

「ビッグボスか、この子」

ある私設武力組織のトップの名前を口に出した。顔も何もかも違うが、眼帯だけは同じ所だ。

続いて、シャルル・デュノアの資料を見ようとしたその時。

大排気量バイクのエキゾースト音が高鳴る。そして、そのバイクがジャンプし、悠季の目の前に着地した。

資料が吹き飛ぶが、動じずにバイクを見る。二人乗りで来た創龍と、もう一人。

フルフェイスヘルメットを被っているので、顔が解らない。

「よう、悠季」

「普通に来い、バカ親父。それより、そのバイク、どうしたの？」

「何年か昔、ダチの家に停めてたんだよ。それで、カギ挿して、こいつ乗せてきた。なあ、シャルル？」

「ああ、シャルルさん？ よろし……」

「随分余所余所しいね。久しぶりの再会なのに」

ヘルメットを取り、髪を直した。

悠季がその顔を見て驚いた。本当に何年ぶりだらうか。

「しゃ、シャルロット！？」

「久しぶり、悠季！？」

思い切り悠季に抱き着くシャルロット。しかも、男装で。

「ひ、久しぶり……、シャルロ」

「シャルル、だよ？ ランチアくん」

「え、なんで男装？」

「そいつア、色々あるから、聞くな」

シャルロットは離れない。創龍がハツ、と笑った。

「おい。もう一人来たぞ。ドイツの嬢ちゃんが」

ラウラ・ボーデヴィッヒと思われる人物が来た。そして、抱き着かれている所を見られた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒさん？」

「ああ。貴様が、案内人のランチア・ストラトスか？」

「うん。よつこせ、EIS学園へ
「貴様、公衆の面前で、しかも男と抱き合っておつて、恥と思わんのか」

シャルロットがそれに気付き、すぐに離れた。悠季がシャルロットの頭をぽんと叩き、ラウラに呟ひしくと言つた。

「お疲れ様です、護衛どの」「
「ン？ああ、何もしてねエガ」「
「親父、この子に向かした？」

悠季が創龍に問い合わせる。いや、と彼は返した。

「この方はな、成田で私の過ちを優しく許して下さった方なのだが。
しかも、私の蹴りを見向きもせずに止められた」

創龍のコトを、眼をキラキラと輝かせながら説明し始めた。ヒー
ローか何か、勘違いしているのではないだろうか。

はあ、と溜息をついて、創龍をジト目で見た。

「この口コーン」「
「どこがだ。俺は何もしてねエだ」「
「音姫さんに言い付けてやる」「
「めんどくせHからやめる」

Hキゾーストから聞こえるノイズが、更に大きくなる。ラウラは
そのバイクにも眼を輝かせ、創龍に聞いた。

「このバイクは日本製でしょうか！？」

「お？お嬢ちゃん、バイク興味あるのか？いいねいね。

「こいつは、スズキのハヤブサだ。GSX1300Rっていうモデルだ」

ドゥン、とアクセルレバーを回し、吹かす。悠季は呆れ、シャルロット達を連れていく。

「父さん、悪いけど、これから授業なんだ」

「そうか。じゃ、俺は職員室らへんでダベってるから、なんかあつたら呼んでくれや」

「か・え・れ！？」

「シャルル・デュノアです」

教室に着き、自己紹介が始まった。シャルルの紹介が始まつた後、クラスの女子の黄色い声が上がる。

「3人目の中学生よつ！」

「ブランドの貴公子だわ！」

チツ、と悠季が舌打ちした。僕の時はそんなの言つてくれなかつたじやないか、と少しいじけた。

「ボーデヴィッヒ。次だぞ」

「了解しました、教官」

千冬の声にラウラが返す。教官と言われた千冬が、はあ、と息を

吐いた。

「ノルマはドイツの軍でも無い。そして、私はもう教官でもない。先生と呼べ」

「了解しました」

いつまでも固い雰囲気。悠季は肩肘を付き、ラウラを見る。

「ラウラ・ボーデヴィッツヒだ」

名前だけか。あまりのシンプルさに、教室の空気が冷め、久しづりの山田真耶先生がオドオドし始めた。

「それだけ？」

「ああ」

「では、席は一人ともストラトスの隣でいいな」

「構いません」

「むしろ心から喜んで」

シャルルに一人口ケる悠季。千冬が少し戸惑つた。

そして、席に来る途中、ラウラが一夏の目の前まで移動する。

ぼーっとした眼でラウラを見る一夏。何があるのか、と彼は思つていた矢先。

平手打ち。彼の右頬に、思い切り、だ。

頬に綺麗な桟の後。電光石火のビンタが炸裂した時、悠季は思わず笑ってしまった。

「な、何すんだ！！」

「貴様があの人の弟であるものか。私は認めん」

「あー、さいですか。そういうことですか」

この手の挑発や文句はセシリアの時でもう慣れた一夏。軽く流して相手にしないようにした。

ラウラの行動に面白がり、悠季はどうから取り出したか解らないピコピコハンマーをラウラに投げ渡す。

視認したラウラがそれをキャッチし、一夏の頭をぽこっと叩いた。

「いでつ

「ふん」

済ました顔で自席に移動する。そして、悠季にも、今度はハイキックを入れる。

椅子に座った状態で、顔を逸らし、蹴りを鼻先ストレスで避けた。カウンターに、膝裏に指先で突きを入れる。

大した攻撃ではないが、それでもラウラの膝裏には指先大の痣が出来た。

軽くラウラが笑うと、大人しく席に座り、キリッと顔を引き締め、悠季にサムズアップをした。

「仲良くやろう、息子どの」
「なんだアンタ」

悠季のツッ 「!!。どうやら、この子は所謂『厨二病患者』らしい。軍人だから、創龍の強さに憧れたのもあるかもしれないが、それ以外にも何かおかしい。

「ハア、と溜息を付く。しかし、呆れさせる間も与えず、千冬が声をかけた。

「これにてHRを終わる。各人はすぐに着替えて、第一グラウンドへ集合。今日は一組と合同でIRS模擬戦闘を行う。解散！」

解散指令。悠季は椅子から立ち上がり、シャルルを見た。

「ランチア？ どうしたの？」

「いや……。お前、これから女子に追い掛けられるから、気をつけないとな、つて」

「なら、早く行こう」

ランチアとシャルル。一人でアリーナの更衣室へと向かおうとした時。

「ちょっと待て、ランチア。俺を置いてくな

「ああ、悪いね。大丈夫？」

「つか、お前のピコハンが余計だったわ」

一夏がランチアの肩に顔を乗せながら睨んでくる。ランチアが笑顔を絶やさずに、一夏の頭をぽんぽんと叩いた。

「あー、そこが痛い」

「どんだけ力入れたんだ、ボーテさんは」

「はははっ、多分500kgはあるんじやね？」

「おつと、悪いなデユノア。俺は織斑一夏。コイツの親友だ。一夏で

いいぞ「

ランチアの首を腕で締めながら、シャルルに自己紹介。しかしランチアは顎でツボを突き、痛覚を刺激した。

「よろしく。じゃ、ボクもシャルルでいいよ。ね、ランチア？」

「なんで僕に振った？」

「何となく」

幼なじみのダル絡みのようだが、ランチアは嫌な顔を一つもしなかつた。

廊下に出れば、ランチアの言った通り、大勢の女子に絡まれた。ランチアは一人を抱き抱え、階段を全部飛び越えて、アリーナへと向かった。

更衣室。今回はE-Sースツに着替えるための場。

悠季達三人は着いてからもじばらぐ話していた。

「お前はE-Sースツなんて適当でいいだろ? ってか、ハイネックのヤツ着ときやいいじゃん」

「それで誤魔化せるかな?」

「しょうがねえよ、ねえモンはねえんだから」

悠季が制服を脱ぐ。下からはハイネックインナーとカーボパンツが出て来た。

黒と紫のコートをまた着て、シャルルを見る。ずっと眼を反らしていたらしい。

「……ん? シャルル? なんで眼を反らしてんだ?」

シャルルの行為を不思議に思った一夏が聞いた。悠季はシャルルに苦笑いをしながら言った。

「そういうの、この子はあまり慣れてないんだよ」

「ああ、なるほど。育ちがいい、ってやつか。ならしゃあない。俺はあつちで着替えるわ」

悠季の助言で、シャルルが助かつた。一夏がロッカーの列を一個

挟み、ISスーツに着替え始めた。

「シャルル？大丈夫？」

「ごめん、耐性ないみたい……」

「タダのカーゴパンツで、ねえ……？」

はははっ、と笑いながらシャルルに言った。
また恥ずかしそうに悠季を見る。悠季は頭を優しく叩きながら、シ
ヤルルを見た。

「シャルル、スーツ着込んでるなら、早く脱いじゃいなよ」
「な、なんで解るの！？」

「首元」

スーツは首の少し下まで覆っている。なるほど、道理でわかつた
わけだ。シャルルは納得し、制服を脱いだ。

「……それは、バレるな」

「え、ええつ！？」

「胸。ほんの少し、形が……」

創龍に教わったサラシで押さえ付けているはずだが、それでもラ
インは怪しい。

悠季がコートから薄い板を出し、シャルロットに渡した。
シャルロットがそれを応用し、胸に詰めた。

「これで！」まかせない？」

胸筋の様な形。大丈夫だと悠季は判断する。

「ランチア、もう大丈夫か？
シャルル、お前胸筋すげえな……」

一夏がスーツの姿でこちらを見てくる。
悠季は一人を見て、こんなにピチピチなスーツは着たくないと思つた。モロに身体が締め付けられていそうで、動きにくそうだ。

「じゃあ、行くぞ」
「うん。シャルル、行こ」

シャルルの手を引く悠季。その途端、シャルルの顔が赤くなつた。

「シャルル、ここだと勘違ひされるからやめろよ」
「あ、うん……」
「こういう同人誌が非公認で描かれてたりして」
「ランチアが言つと冗談じや無いよう[に思えるな」

少し背筋をゾッとした一夏がランチアに言つた。
この学園には、B級カッ普プリングを考える女子がいる。腐女子と言われる奴である。

その彼女達の脳内で、自分達がどんな風になつてているのか、考えてみようとも思わなくなるほどだ。

「やつべ、時間ねえよーー一夏、シャルル！ー急ぐぞーー！」

ロレックスをチラつと見たときに気付いた。一限に遅刻してしまふ。

ランチアが一気に走り出す。その後ろに一人が続いた。

「ギリギリ、20秒前だ」

千冬の出席簿を避けられた三人。セーフ、と一緒に言った。

「ストラトス。スーツは？」

「織斑先生……。そんなことも聞いていないし、持つてもいいです」

「……あ。それはすまなかつた」

スーツの話をした時、ランチアはいなかつたのだ。それはしがないだろう。

「仕方ない。男子用のも無いしな。ま、お前のTISは特殊だから、スーツ也要らんだろう。好きな格好でいいぞ」

「ありがとうミリィ！」

「誰が足付きのオペレーターか」

ランチアの頭に、精度が上がった出席簿アタックが当たる。しかし、今日は指一本で避けられた。

「危ない危ない」

ニヤリと笑つて出席簿を離す。その時に、後ろから何か叩かれた衝撃が走った。

「そうそう、危ないよな」

ガスマスクを被り、コートの上にフードを被つた男。一発で悠季に創龍と見抜かれてしまったが、気にしない。

「あー、今日だけ特別に手伝いをして頂く、霞^{がす} 麻宿先生だ」
「よろしくな、ガキンちども」

そのまんまかよ、と悠季が突っ込んだ。しかも、創龍はボコーダーを使って声を変声しながら話している。

「霞先生、山田先生は？」
「真耶やんは……。けょひど、シャルルの上だ」

言つのが遅い。シャルルの上に山田先生が落ちてきた。

IS装備のまま、シャルルに落ちたが、幸い一人とも怪我はなかった。山田先生の方には、メンタルで少し傷が付いたが。

「んむつー？」

山田先生の胸に顔が埋まり、窒息しかけるシャルル。それを知らせようと背中を叩こうとしたが、先生の胸を掴んでしまう。

彼女が悲鳴を上げたとき、やれやれとランチアが先生を立たせた。
「あ、ありがとう、ストラトスくん」

IS自体重いのに、軽々と片手で持ち上げるのはどうかしている、と周りは思つた。

「山田先生と模擬戦闘してもらおう。相手は……、オルコット、鳳！」

「なんで私が……」

「そうよ、それに、なんでこいつなんかと」

一ヤリとガスマスクの下で創龍が笑った。そのまま一人に近付き、耳打ちする。

「いいのか？お前らが勝つたら、あの坊主にいとこ見せられるぜ。やつたら、無条件で俺から坊主の生写真もやるよ」

ボコーダーで話しているため、違和感はあるが、それでも一夏を指す言葉があれば、彼女達を燃えさせるエネルギーになる。

思惑通り、鈴とセシリアの瞳が、身体が、魂が燃え上がった。

「ケケツ、扱いやすい嬢ちゃんたちだ」

「お前、後で音姫さんに言い付けてやるからな、バカ親父」

ガスマスクの吸気口に爪楊枝を突っ込みながら悠季が言った。創龍は、ふんっ、と息を吐き、それを排出する。

「オリムー、こいつどうにかしていいかい？」

「やつてみろ馬鹿野郎」

「はあ……」

戦闘中だというのに、この馬鹿親子は。

千冬が頭を抱え、溜息を付いた。一応、ガスマスクは創龍だと知っている。

ヒュロー、ヒュロー、という呼吸の音。それすらもボコーダーで変えているため、生徒にはバカウケだ。

「ちょうどいい。『テュノア、山田先生のIRSの解説をしてみる』
『はい。先生が搭乗なさっている『ラファール・リヴァイヴ』は、
第一世代型と言われるもので、射撃特化した『テュノア社製IRS』です
『よろしい』テュノア君。俺が平常点10点あげよう』

「霞先生、少し黙つてください」

余計な茶々を創龍が入れて来るのに対し、千冬は悠季と一緒に創龍に釘を刺した。

創龍は、ちえつ、とつまらなさそうに『いい』、何故かその場で左手の人差し指一本で逆立ちし始めた。

「おおっ！…先生凄いっ！…」

「あらよっ、とな」

そのまま空中に飛び上がり、ぐるぐると身を回転させて、着地した。

「そろそろ終わんじゃねエか？アイツらの動きは協調性も何もねエ
し」

空を見上げ、戦闘の様子を把握した。個々のIRSが強力なだけに、上手く使わなければ、協力が台なしになってしまいます。

山田先生は、ライフルで一人を一点に纏めるよう誘導しながら撃つている。案の定、その罠にハマっている鈴とセシリ亞だが、それに気付かない。

「そこまでいったら、後はチェックメイトだ」

創龍と悠季がハモつた。思惑通り、一点に集中した時に、グレネードを投擲され、大被害を被つた。

二人のシールドエネルギーがゼロになり、結果、一夏に格好悪い一面を見せるハメになつた。

「山田先生は元代表候補生だ。これで私達教師の実力が解つただろう。これからは先生方を敬うように」

空から降りてきた山田先生が二口一口と笑顔で生徒を見た。今ので教師としての自信が付いたようだ。

「先生！ランチアくんと山田先生の模擬戦は！？」
「いいですねー。やってみましょーか」

悠季が「はあ？」と言ひづが、上機嫌の山田先生は快く了承した。

悠季に千冬と創龍が近付き、警告した。

「大人しく負けてくれ。勝つなら殺すなよ」「ば、馬鹿がアンタら！…それは権力の濫用だぞ！…それに殺しあしないっての！！」

「ストラトスくん、行きますよ～」

早々と空中に舞い上がる山田先生。嫌々ながら、ドレッドノートを発動し、悠季も空中に飛び上がつた。

「山田先生」

「はい」

「僕が負けろと言われたんですが……」

ちやっかりマグナカルタを手に持っている悠季が言つ。下で行われた職権濫用。全て話し、山田先生が苦笑いする。

槍をくるくると回しながら、先生を見て悠季が言つた。

「まあ、でも手を抜く気はあまりないんで
「そう」なくちや。私も全力で行きますよ」

少しの会話の後、一人は戦闘を開始した。悠季が走つて先生に近付くが、先生は冷静にライフルを撃ちながら距離を取る。マグナカルタでレーザー弾を霧散させながら、突つ込んでいく。彼のリーチに入つた時、ステインガーで突つ込んでいく。真耶は飛び上がってそれを避け、射撃を行うが、後ろ手で閻魔刀を取り出して、ウェポンマジックで反らされてしまった。

幻影剣を真耶に射出しながら、エアトリックで田の前に移動する。咄嗟の行動に冷静な判断が出来ない。

幻影剣でシールドエネルギーを削られると同時に、マグナカルタで、光速の連続突き ミリオンスタブを行つ悠季。

「Break down!!（砕け散れ!!）」

その言葉通り、エネルギーは砕け散つて無くなり、真耶の敗北が決まった。

「せ、セコイ……」

「鎌つるさー、勝つたんだからいいだろ」

サシで勝つてしまつた悠季。だが、真耶は「人外だからしうがない」と割り切つた。

「まあ……。これが学園長が直々に指導をした者の実力だ」「なるほど、ゴマカシ方も天下一品だな、千冬」

小さな声で創龍が釘を刺した。ギロリと悠季と千冬が創龍を睨むが、マスクの下はへラへラしている。

「では、授業に入る。1組8人でグループを作つてもうつ。端数は麻宿先生の所に行け。グループリーダーは専用機持ちの奴らでいいな?」

授業内容は何なのかをすつ飛ばした千冬に悠季が口ケた。

「悠季と一緒にになれないよ……」

「バカ、シャルル。その名で今は呼ぶンじゃねH」

「あ……。すいません、麻宿先生」

「そこは間違えねエのかよ」

創龍が軽く突つ込む。シャルルは肩を落としながらランチアを見るが、ランチアは気付かない。

「……あのお嬢ちゃんに狙われてたりしてな」

勘の強い創龍のコトである。迷いなく筆を指して言つた。先程のようにワザとシャルロットを燃やそうとしたが、彼女は逆にネガティブ思考になってしまった。

「ランチア、私が入つていいか?」「ん、いいけど」

IISスーツ姿の筆には、どこか違和感がある。

「デュノアくん、よろしくねー」「ガス先生、お願ひします」

次第にそれぞれに集まっていく生徒達。一人浮くガスマスク。とてもおかしな光景だ。

頭が痛くなりそうな場面に、必死に気を保ちながらも、授業内容の説明をする千冬。

今回は学園のラファールと、日本製の第一世代IIS「打鉄」を使って、フイットティングの体験をするようだ。

有無を言わさず、創龍がラファールをセシリ亞・シャルル・ラウラベ、打鉄を一夏・鈴・悠季、そして自分の所へと持つて来た。恐るべし神威家。軽々とIISを運ぶ人間など、この家族以外に誰が居ようか。

「じゃあ、フイットティングしてみよっか。よじ登つてフイットイングしてね。いざという時は、僕があそこまで持つていくから」

「お姫様抱っこでな」

「つるせえ、茶々入れんな」

ボコーダーの声が止まない。悠季が苛立たしく思った。

続いて、創龍が欠伸をしながら HIS の説明をする。

「ま、打鉄は固エが動きが鈍間、つてのが特徴らしげな。簡単に言えぱティ レンだ」

「先生、私はジ カと思いました」

「ありやスラスターいっぽはあるし、隠し腕もあるから全然違エよ」

何の話をしているのだ。千冬が、思い切り出席簿で創龍を殴りたくなる衝動を抑えつつ、出席簿を握り締めた。

「最初、笄からでいいや。登れる?」

「時間もないんでな、お前に手伝つてもうひつ」

「はいよ」

「頼む つて、きやあつ!—」

皮肉にも、創龍が言つたようなお姫様抱っこで連れていく。恥ずかしいのか、驚いたのか知らないが、可愛らしい悲鳴を上げた。

「……笄。なぜ首に腕を回す?」

「ハ、ハハ、怖いからだ!—こんなにきなり飛び上がられると、誰でも怖い!—」

一つ飛びで HIS の「クピット」へ。悠季はそこで笄を下ろし、様子を見た。

横の創龍は、IS を押して横に倒し、乗りやすい状況を作った。

「わざとじまいな。後が支える」

「つはあ……」

そして、事が終わり更衣室へ。先程の様に一夏はロッカーを挟み着替え、悠季とシャルロットは制服だけを着る。

「それにしても」

「ん?」

「まさか、悠季が工事を使えるなんて……ねえ?」「解つて言つてんだろ……」

「いや、しかも専用機なんて」

「……ああ、教えて無かつたつけ」

悠季が悪魔狩りになつたのは5年前だ。シャルロットと別れたのは8年前になる。

「僕さ、父さんの後継者なんだよ」

「あ……。成る程。じゃあ、あれはおじさん直伝なんだ」

昔、彼らは悪魔に襲われ、創龍に何度も助けて貰つた記憶がある。それを見ているシャルロットはもちろんそれが解つた。

「ああ、そうだ。ランチア、シャルル」

「なあに?」

「屋上で昼飯食わねえか?」

「ランチア、一夏？ 学食あるよね？」

「外で食つのも格別だぞ」

「氣分を変えるのもいい、と思つ。一人とも同意し、屋上へ向かつた。

先客というか、元々それが目当ての篠、セシリア、鈴、そして何故かガスマスク。

その隣にラウラが何故か居た。

「麻宿大佐！－！ドイツのレーションです、どうぞ」

「うむ、苦しゅうないぞ」

先程の授業で誤作動を起こしたI-Sを、瞬時にプログラミングして直し、倒れてきた機体を蹴り一発で立て直した創龍。ラウラからドイツ製の軍用携帯食を受け取りながら、フランスのそれを渡した。

「大佐、これはフランス軍のありますか？」

「うむ。美味だぞうえ！－！」

悠季が父に飛び蹴りを食らわせる。しかし創龍は頭しか動かない。マスクがポロリと外れ、素顔が見れるかと思いきや、その下にはダービーのマスクが出て来た。

「宇宙帝国軍……！？」

「ちげえよ、こいつはただのアホだ。なに餌付けてんだバカ」

「るせHな。因みに本当に俺は大佐だからな」

「どこの？」

「ウチの」

ダース・ベイダーの顔面を引っ張った。それで最後だったよう

で、ちやんと素顔が出て來た。

悠季と瓜二つの顔。創龍の方が釣り眼氣味だ。

「ゆ、悠季が、二人……」

「いや、これ親父」

「ええっ！－！この方が、悠季さんのお父様ですの！？」「あー……。

バレちまつたか。創龍だ、よろしく

軽く手を上げて自己紹介する創龍。悠季は顔をしかめた。

そして、本日二度目の「帰れ」。何も無いなら事務所で仕事してろ、と付け加えた。

「ああ、後補足。シャルルと悠季は幼馴染みだ。だから、悠季の事を聞きてエならシャルルに聞くといい。

……お嬢ちゃん、この前のあれだろ？つか、なんで色紙？」

いつの間にか、鈴が創龍の田の前でサインを要求している。この前言っていた、英雄が田の前にいるのだ。何か記念品を貰いたい気持ちは解る。

しかし、悠季は「こいつのサインは価値無いな」とか思つていた。いい加減男のサインだ、もちろん、サインもグチャグチャになるだろう。

「サイントさい！－！」

「……あこよ」

一緒に渡されたサインペンで、スラスラとサインを書く。悠季の予想が外れた。

とても丁寧かつ、サイズなどが考えられたサイン。

創龍の意外な一面に、悠季が口を大きく開いた。

「何だよ、そんなに俺がおかしいか？」「意外過ぎる……」

サインを貰つて喜ぶ鈴を脇目に、創龍が悠季に言つた。悠季の口が一向に塞がらないので、シャルロットが悪戯半分に、創龍に貰つた甘栗を放り入れた。

「ん？ アメ横の甘栗？」
「そう、おじさんには買つてもらつたんだ」
「つーか悠季、日本詳しきね？」
「親父が日本人の血も流れてるからね。時々、御祖母様の実家に行つたりするんだよ。キリエさんとかは来ないけど」「因みに、それはどこ？」
「千葉の印西」
「田舎だな」

甘栗を咀嚼しながら答える悠季。印西は、木下・小林方面は、昔ながらの田畠と商店街が広がる長閑な町だ。

「成田線で来たんだ」
「スカイアクセス使えばいいのに」

どうせまた創龍だろう。彼の思考は簡単に読み取れた。

「ねえ！ サイン貰つたし、そろそろ食べ始めない？」
「そうですわね。お腹も空いてきたこと 悠季さん？ 織斑先生ですか？」

鈴の一聲で始まる昼食と同時、悠季の携帯が鳴った。セシリアの言つ通り、千冬からであった。

「はい」

「休憩中済まない。何やら、また悪魔が出たそぐだくく

悪魔の存在。悠季と創龍は感知していたものの、弱々しいモノであつたため放置していた。

しかし、興味津々の創龍が、悠季の携帯をひったくり、千冬と話し始める。

「俺が行つてやンよ。場所は？」

「神威さんですか？場所は第三アリーナ付近です。感じていらっしゃるなら判るでしょうがくく

「じゃ、いつから行きやいいよな」

創龍がフェンスを飛び越えて空を飛ぶ。端から見れば自殺行為。しかし、彼らは猫のようにどんな高さからでも着地出来るし、また飛ぶことも出来る。

「凄いですわ！人間の常識を無視していますー！」

「息子どの、あれは凄いな」

「いや、僕でも出来るし」

セシリアとラウラが驚くものの、それ以外は「悠季の父親だから」で理解できている。シャルロットに至つては、昔からそれを見ているため、慣れている。

「あいつはほつといて、『飯食べよっか

「そりだな。俺も腹減つたし」

呑気な男一人。それにシャルロットが悠季にくつつく。
何かと怪しい光景だが、幼馴染みの兄貴分なのだから、おかしくもない。

「そりそり、一夏。これ！」

待つてました、といつよいに鈴がタッパを開けた。この前の騒動に発展した品。

そう、酢豚である。

「おっ、酢豚だ！！」

「そり！…朝早起きして作ったんだからね、味わって食べなさい！」

！」

悠季から渡された割り箸で摘み、ぱくりと一口。甘さと酸味がバランスよく、そして肉も柔らかく、そして引き締まっている。

「美味しい！！」

「やつた！！」

「あれの数パーは僕のおかげ～」

早朝、市場に行かされ、アグー豚を買いに行つた悠季である。そして少しだけ下準備もした。

「あの……。私も、実は作つて来ていまして」

「セシリ亞も？」

「はい。一夏さんに、イギリスにも美味しいモノがあると知つて欲しかったのです」

「あれつて、結局は品数少ないし、作る人間にも困るんだよね」「はい。わたくしも昔、酷いシェフの料理には泣きそうになりましたが、ゴートン・ラムゼイ氏のものは、とても気に入りましたわ」

バスケットを開けながらセシリアが言つ。中身はサンドイッチ。またもやひょいと摘む一夏。

タマゴサンドなのだが、少しだけ蜂蜜を入れているらしい。甘味がいいアクセントになつている。

「う、うめえ……。お見それしました」

「ふふふ、お気に召されたようでなによりです」

香りもよし。少しだけ、パセリの匂いがした。

悠季も、ハムチーズを一枚取つて、半分に割つてシャルロットに渡した。同時に口に入れ、味わうと、何か親近感が湧く味であった。

「これ、音姫さんの味付けじゃないか」

「うん、音姫お姉さんのだ」

「あ……。実は、『Black Cherry』さんに教えていた
だきまして」

「音姫さん、ご苦労様です」

「成る程、でも美味しい」

一夏の手は一枚目を取つていた。悠季が微笑ましく思い、笑う。

「な、なあ。少し作りすぎてしまつて、食べ切れないんだが、食べるか？」

「筈も？それはありがたい」

食べ物には容赦無い執着心を見せる一夏。筈が少し笑いながら、

弁当 といふか、重箱の蓋を開けた。

「おっ、唐揚げだ」

「ああ。頑張ったんだ。どうだ?」

悠季が箸で唐揚げをひょいと食べた。程よい醤油の風味と塩加減。うん、と言つて箸に伝えた。

「美味しいよ」

「本當か! よかった……」

「頑張ったねえ」

一夏も同様の意見。そして、悠季に食べさせられたシャルロットも同様だ。

「シャルル、箸は使えないのか?」

「わたくしも、あまり上手に使えませんので、おかしくはないです
が」

「うん、練習してるんだけどね」

「その点、悠季は綺麗に使えるよな」

今の日本人にも見ない、綺麗な箸の持ち方。この中で誰よりも綺麗に箸を使っているのではないかろつか。

「僕ん家、日本食多いよ?」

「うん、悠季の家は、お箸がデフォルトだったよね。でも僕はスプーンで食べてたよつな」

「音姫さんは無理強いしなかつたからね」

じやくさに紛れて鈴の酢豚まで食べる悠季だが、鈴は気にしなか

つた。

「うん、アグー豚美味しい」

「これ、いいお肉よね」

「100g1,000円したよ」

「高いわねー。それほどこだわりある豚なのね」

豚肉の話になつてゐる。鈴と悠季の和氣藹々な空氣。プロの料理人の会話だ。

「せ、世界が違うな……」

「うん。……ん? 何か来たよ?」

一夏との言葉の最中、シャルロットが気付いた。屋上に、ハヤブサで壁を走つてくる創龍がそこにいた。

「あーらよつと」

壁走りまでは見たことが無い。悠季とシャルロット以外が絶句した。

「お、お疲れ様であります、大佐どの」

「おっ」

片手に金色の大型拳銃、そしてもう片手には三段に詰まれたピザーラの箱。

「父さん、ありがと」

「いひつてことよ、俺の奢りだ」

ピザの箱を開ける。マルゲリータやエビマヨ、照り焼きなどがあった。更に創龍は「コードから飲み物と箱入りのポテトを出した。

「ほらよ、緑茶でも、紅茶でも、好きなモンを取りな」「じゃ、「コードお願いします」

遠慮無くドリンクを取る悠季達。創龍自身は大きなビール缶を出し、呑み始めた。

「昼間から、お酒ですか……」

「まあな。俺も、コードも、酔わないモンでね。普通に水分補給になつてゐる」

篠が創龍を変な目で見始めた。まあ、当たり前の反応だ、と悠季は思った。

「さつさと冷めない内に食いつきませ」

「そうだね 父さん」

「どうした?」

ピザを開ける悠季が、創龍の後ろに、悪魔の残りがいたのに気付いたが、既に創龍は知っていたらしい。ビールの空き缶を思い切り叩き付け、貫通させた。

一撃で地に平伏す悪魔。創龍の実力が諸に出た。

またもや絶句。今度はシャルロットまでもだ。明らかに、強いといつレベルを超えている。

「なんでもない」

「そうか」

何事も無かつたかの様にする一人。

この親子は、とてもなく恐ろしい。

午後の授業も終わり、一夏の日常のHS訓練をするべくアリーナへ移動する悠季達。

今回、悠季も自らの『DT』を扱いこなす為の練習をする予定であった。

アリーナに入り、フィールドに足を踏み込むと

「Welcome - this arena . (よひこなアリーナへ)

創龍が既にいた。

「キリ工達から話は聞いてるぜ。DTの修業だろ?」

「ああ。一夏達の邪魔にならないようにな」

一夏は既に白式を開いていた。指導者の筆、セシリ亞、鈴が創龍との会話を聞く。

「その前に、アップしようぜ」

愛剣・ヴェルギリウスを手に、切つ先を悠季に向かた。悠季も闇魔刀を出し、創龍に真剣で斬りかかる。

突っ込みも、振りも、やはり日に追えぬスピードである。しかし、易々とヴェルギリウスで闇魔刀を弾き、悠季を蹴り飛ばす。

その間、わずか0.0002秒。悠季がフリップバーで受け身を取りながら、鏡花水月を乱射した。しかし、それをヴェルギリウスで弾き、悠季に弾丸を返す。

闇魔刀で真つ二つにしながら、スカイスターで創龍との距離を詰めるが、創龍の反応は悠季を既に超え、悠季の目の前まで移動し、ヴェルギリウスで一撃する。

「うわっ！？」

「まだまだ甘いな、坊や」

流石の悠季でも避けられなかつた。腹から血が出ている。

「す、すげえ……。あれが、魔剣士か……」

田の前の出来事がリアルだと再確認すると、背筋がゾッとする。そうは言つても、既に鳥肌が立つてゐる。恐怖心なのか、それとも。

「おい、アップでこれかア？」

反応の速さ、攻撃の重さ。どれをとつても創龍が上だ。

悠季は闇魔刀と天上天下で一刀流に変えた。

「ソーダっ！！」

流れに沿い、ソーダマスターへとスタイルチェンジ。

そのままステインガーで突つ込み、創龍に避けられるのを悟りながら、保険として後ろ回し蹴りを付けた。

それをもストレスレで躲し、片手で愛用のカスタム・デザートトイ

グル 花鳥風月の金色、花鳥を、痙攣の様な速さで撃つた。歯で弾丸を噛み取り、他を闇魔刀で弾く。

ビデオの倍速コマ送りの様な戦い。一人以外の時の流れが遅く感じるのは、ほんの少しだ。

「Whew - cool!! (フー、クール!!)」

「呑気に言つてる暇があるのかつ！？」

後ろ手の闇魔刀で斬り払う。それもサイドロールで転がられ、避けられた。

「Rock-on!!」

立ち上がりを狙つていたらしい。またもやステインガーで創龍に襲い掛かる。

それは、正に電光石火。しかし、それをも無傷で受け止めてしまう創龍がいた。

少し腰溜めに構え、左手を突き出し、一瞬だけ魔力を張り、ジャ

ストタイミングでガードしたのだ。

悠季の腕が弾かれ、仰け反った。

幕には、信じられなかつた。悠季の剣が通用しないという、目の前の現実を、信じたくなかつた。あれだけ自分を圧倒した剣が、父親に傷一つ付けられていない。

「ジャストブロック！？あれで！？」

「ハツ、これでお前は負けだ。俺に攻撃した瞬間で負け

」

不意打ちで蹴りを繰り出す悠季。それに反応し、深く踏み込みながら、ジャストでカウンターを決める創龍がいた。

腹辺りに、掌底を喰らい、アリーナの壁まで吹き飛ぶ悠季。叩き付けられ、壁までも壊してしまつ。

倒れる瞬間、創龍がドロップキックで追い討ちした。酷い父親だ、ここまで容赦が無いとは。

「アップ終了だ。立ちな」
「嘘だろ？！？悠季が負けた！？」
「第、負けたわ！！」
「信じらんねえ……」

驚愕の光景である。一方的な創龍の勝利。悠季は地に手を着き、上半身を捻り、脚を回転させながら跳ね起きた。

「痛たたた……」
「あれ喰らって立つなんてな。大したモンだぜ

はははっと創龍の笑い声が響いた。悠季が腹を摩りながら言つた。

「やつぱり、敵わないな」
「動きはなかなか良いぜ？後はパワーくらいか」
「そう？」
「ああ。じゃ、ここから本題だ」

「ヤツと笑う創龍。少し不気味に感じながらも、悠季が言つた。

「デビルトリガーってさ……。引き方が判らないんだけど」「念じる。勝手に引ける」

言われた通りにしてみた。悠季の上に雷が落ち、周りに魔力の衝撃波が生まれた。

対抗戦の時に見た、悠季の魔人の姿。創龍は初見だが、なかなか気に入つたようだ。

「親父そのまんまだ」

「へ？」

クラウスと同じ姿。創龍は見て笑つた。

「適当に動いてみな」

試しにまず走つてみる。脚の回転が異常に速い。1時間もあれば日本を一周出来そうだ。

「速っ！？」

「適当に剣もやつてみな」

振りが更に速い。パワーも乗り、天上天下無双剣自体には紫電が纏わり付いていた。

ステインガーもやつてみる。魔力で創られた、螺旋状のドリルが剣と共に突かれる。

思考を巡らせる内、闇魔刀との一刀流で、両剣に魔力を流す。腰溜めで魔力を溜め、剣がより一層光ると同時、X状に一刀を振った。

巨大なXの魔力の斬撃波。最大の賭け マキシマムベットで
も名付けようか。

続いて、闇魔刀を逆手に持ち、高速で演武の様なことをしてみせる。隙が無く、連続で繋がる、終わりを締める技 ショウダウン。

「坊やと一緒に……。ククッ、面白！」

遠い血縁関係に、ネロという少年がいる。ネロも悪魔狩りで、悠李の今の二つと同じ技を使っているのだ。

ついでに、天上天下での剣の舞。袈裟斬り、斬り上げ、大車輪斬り 延々に続くダンス。

剣を魔力に一気に流しながら、地面に叩き付けながら、流し巨大な衝撃波として打ち出す「ドライブ」という技を三連発、そして、斬り上げ ハイタイムで打ち上げた後、自らも飛び上がり、グレイブティガーラーという剣を急降下しながら突き刺す技を見せた。

地面に突き刺さった剣を中心とし、独楽のように回る悠李。ダンスマカブルから、クレイジーダンスという、とても華麗なコンボである。

「……使いこなせてんじゃねェか。来て損したぜ」

息子の成長を喜びながらも、少し軽口を叩いた創龍。悠李が首を後ろに軽く振り、戻ると意識すると、元の姿に一瞬で戻った。

「なんか、出来ちゃってる」

「ああ。流石、俺の息子だ」

今度は素直に褒めた。悠季に近付きながら、創龍は笑う。

「そりだな……。頑張った奴にや、御褒美をやらねーとな
物がぶれるような音。それと同時、創龍が、巨大な銃器を持って
いた。

「ほれ。使わねエし、やるよ」

ずしりと来る重さ。よく見てみれば、レールガンである。こんな
物、どうやって扱えといつか、と周りが思った。

「ありがと、父さん」

しかし、当の本人はご機嫌である。連射は効かないかもしない
が、それよりも一発の威力を取れば、連射など出来無くともお釣り
が来る。

「俺も使つた」とはねエが、科学つてのはあんまり趣味でも無いんでね

軽々と片手で持つ悠季。担ぎ、創龍を見た。

「本当、ありがとね。色々為になつたよ」

「そりゃかい。そりやよかつた。じゃ、俺は帰る」

ガスマスクを着けて、アリーナから出していく創龍。片手を上げ、
合図などでもしながら。

その手と、悠季の腕とが光り始め、光線で繋いだ。切つても切れ

ぬ、親子の印。

やはり、悠季は息子だ。正真正銘の。

彼の芯も、剣も強くなつたのも分かる。創龍は、破天荒だが、いい父親だ。

共鳴。気持ちが振動している。悠季自身、創龍の息子にあることに、誇りを持っていた事を再確認した。

Mission 9 守護者と決意

「ふう……」

悠季は先に自室に戻らうとしていた。レールガンをちゃんと仕舞い、寮へと向かう。

腹の傷は塞がつてはいるが、制服は斬れている。後で直すか、買わなければ。

「」の学園に来て、およそ2ヶ月経つ。いくら、金を使つたのだろうか？

毎日の食費、机の修理費、休みの日に出掛けた電車賃、その先で使つた金。やつと10万は超えているだろ。

「次は、ディズニーかな？」

しかし、金はある。学園側からの依頼報酬一件の解決につき、何千万も貰つてしているのだ。しかも、千冬から、アタッショケースでの手渡しで。

学園が隠蔽したい事があるのも分かる。しかし、一件でこんなに大金を積む客など、悠季は見たことが無かつた。

「口座使えばよかつたかな？」

そもそもアタッショケースを見飽きた所だ。それに、一々心臓に

悪い。銀行か、郵便貯金の口座を作ってしまおうか。それとも、国際口座の方を使つてしまおうか。

そんなことを考えながら歩いている内に、666号室へと着いていた。今更であるが、666という数字は、キリスト教などで縁起が悪いとされており、敬遠されている。『アンチ・クリスト』とも見られてしまう。

悠季は宗教に興味など無いし、また無宗教である為、氣にもしないが。

がちやり。誰もいなかつた筈の部屋に、ドアを開ける音が響いた。悠季の荷物が積み込まれる前から、この部屋は広くて豪華であった。それも、高級ホテルの一室の様に。

1ヶ月程前まで鈴が使っていたベットの横に、見知らぬバッグと、トランクなどが綺麗に置いてある。

ラウラか、シャルロットと相部屋か。

「ま、いいか。別にそこまで困る訳じゃない」

「そういえば、シャワーを浴びる音がしている。既に先に着ていたのか。

「あ、そういうや、石鹼切れてたっけ」

余談だが、悠季は身体を洗うとき、牛乳石鹼という固形石鹼を使っている。肌触りがよく、匂いも良い。また、かなり汚れが落ちる。「ボディソープの方がいいのかな?でも、あれ以外は嫌だし」

リーズナブルである石鹼。それに比べ、学園備え付けのは高いだけ、悠季にしつくりこない。

シャンプーもただ高いだけ。普通に市販のしつくりきた安い物を使つている悠季。安いから好きなのではない、好きな物が安いだけなのだ。

「まあ、これ使つてもらおつか」

固形石鹼を取り出し、シャワールームのドアをノックした。
しかし、ちゃんと返答が返つてこない。

「ごめん、石鹼切れてただから、新しいの持つてきたんだけど……」

「悠季？」

「なんだ、シャルロットか

声で解つた。シャルロットとの相部屋だ。遠慮なくドアを開ける
が、それがマズかった。

女性の裸。湯煙であまりよく見えないが、綺麗だ、といつことほ
解つた。

「ゆ、悠季！！」

「はい、石鹼」

箱をひょいと投げ渡し、ドアを閉めた。『全く興味ないよ』と言
わんばかりに、自然にだ。

これが『リカシーのない奴か。筈にも言われたことを再確認し、
反省した。

「まあ、やつちまつたことはじゅあないよね

しかし、すぐ開き直つた。

収縮していたレールガンを出し、ベッドに置いてカチャカチャと弄り始めた。

自分の魔力を打ち出す様に改造・イメージし、ベルンダのサッシを開けて、外に撃つた。まばゆい光が空を駆け抜け、機械音が騒ぐ。

「へえ……」

なるほど。大体使い勝手は解った。

片手でぐるぐると回しながら、レールガンを弄ぶ。

確かに重いが、命などと較べれば軽い。殺される前に殺る。それがモットーだ。

「……悠季？」

シャワーから出て、ジャージに着替えたシャルロットが、新しい”オモチヤ”に気付きながら、悠季に近付いた。

レールガンだと判るが、人が生身で使うような兵器ではない。

「ああ、シャルロット」

魔力で収縮し、吸収した。そうだ、そういえば創龍もそんなことをやっていたな、と彼女は思い出した。

「シャルロット……。言い忘れてたけど、久しぶり。逢いたかった

よ

「悠季……」

「大きくなつたね、身体も」

「悠季には負けるよ……」

184cmの長身は、シャルロットを覆い隠す程である。その差30cm。顔一個は余裕である。

「そんではさ」

「なに?」

「なんで、偽名で来たの? 親父は突っ込むな、って言つてたけどさ。知らないことを知らないままにしておきたくないから。まして、幼馴染みだから、余計に知らなきゃダメな気もするし」

幼馴染みだから。シャルロットの心に、その言葉が残る。
身内以外では、一番親密　いや、もう家族なのである。シャルロットも、悠季も、そういう認識でいた。
シャルロット自身は、悠季に『恋愛感情』を持つているのだが。

「……8年前、私のお母さんが、亡くなつたとき、今の父親の部下が来たよね」

「ああ、僕がブツ飛ばされちやつた時だ」

引き取りに来た時、悪知恵を働かせ、創龍も、音姫も、キリエもいなかつた時を狙つたのだ。

時は、8年前に遡る。

わずか7歳のシャルロットと悠季。そして、創龍の知り合いの男
「バー・テンダー」のランディと呼ばれている、ひ弱そうな男が
いた。

シャルロットは母親を亡くした。それも、その一年前だ。病死
らしい。19であった創龍は、シャルロットのために、母親の遺体を、
自らの父が眠る墓地に埋葬したのだ。

創龍も、キリエも、そして、創龍の友人である『朝倉音姫』もい
ない。友人というか、彼女が絶賛片想い中で、創龍に引っ付いてき
ただけなのだが。

三人とも『Black Cherry』のキッチンにおり、ラン
ディが子供達の為に、自慢のノンアルコールカクテルを作っていた
のだ。

「ほら、出来たぞ」
「わあ、ありがとおじさん！－シャルロット、飲もうよ」
「うん……」

悲しみは癒えない。時間が経てば忘れる、そんなことがあるわけ
がない。大切な母親を亡くした悲しみは、深い傷痕を心に付けた。

それでも、悠季は優しく接してくれる。母親から貰った、シャルロットのペンダントが揺れ、悠季の笑みに応えたように思えた。

「マセてるな

「ませ？」

「大人びてる、ってことだ。お前、将来いい男になりそうだ。いや、もう充分いい男か？」

「ありがと」

からかわれているのかどうかは判らないが、取り敢えず礼だけ言う悠季。

「シャルロットは強いしな」

「強い？」

「心が強」

「僕も、シャルロットは心が強」と思つよ

「悠季、ありがと……」

「僕だったら、立ち直れないよ。でもシャルロットは、僕とお話ししてくれるから

悠季の言葉は、いつも自分の元気付けてくれた。少しづつ、元気をくれる。ランディは、やはり創龍の子だな、と思っていた。

「お、お、ランディ！一店開け……。おつ、創龍のガキとお嬢ちゃんか

「おじちゃん、何の様？」

「こや、ランディに店にいく、って言おうとしたんだが……。お前らもくるか？」

「お前がこいつに何かしようとするって思ったからだ」

「なんもしないよ、逆にお菓子でもくれてやる」

「だつて……シャルロット、行こひ……」

「うんひ」

悠季がシャルロットの手を引いていく。教育上宜しくないかもしれないが、まあいいだろう、トランディは思った。

全ての入口の鍵を閉める。事務所のもあれば、普通の住宅の玄関もある。鍵っ子の一人だ、忘れてはいけない。

「そうかあ……、お嬢ちゃんはお袋が死んじまつたのかあ……つく
いけねえ、涙が……」

ランディのバーでは、シャルロットの話を聞いた浮浪者達が涙を
流しながらシャルロットを慰めた。

「ランディ……！」の子たちに、「一ーラを……！…今日は奢って
やる……」
「おい」

こんなしぶみりした密は初めてだ。いつも荒れ狂つていて、困つ
ているのだが、静かで落ち着いた雰囲気は、なんだか違和感があつ
て逆に嫌だ。

「おじちゃん、どうか悪いの？」

「いや……。それよりも、創龍のセガレ、お前が、お嬢ちゃんを守
つて」
「ここにか」

乱暴にバーのドアを開ける。皆が一斉にそちらを向いた。

黒スーツの女性が何人かいた。胸元には、デュノア社の社員証か何かがあった。

悠季は嫌な予感がした。女達はシャルロットに向けて、気を放つているからだ。

「なんだ、お前ら」

「この子を引き取りに来た。この子は、社長の娘だ」

「ええっ！？でも、母親は、普通の……」

悠季はシャルロットの前に出て、手を広げて立りつくする。

「なんのつもりだ、ガキ」

「貴女たちの眼は、怪しい……」

「悠季が言つなら、そんなんだろうな。早く帰んな。鬼が来る前に

な

鬼とは、創龍の事だろ。

子鬼は一步も退かない。創龍の息子だ、とランディは関心した。

「邪魔だ、失せろ」

「いやだ。シャルロットは、僕が守つ

言いかけた途端、悠季が拳で殴られた。軽く吹つ飛び、浮浪者の腕に止められた。

「悠季つーつあつつーーー！」

「シャル！！」

「てんめえ、ガキになんてことをーーー！」

「見過」せんな……

店中の客達と、ランディが女を睨んだ。

「痛いっ！放してえっ！悠季いっ！」

髪を引っ張られながら連れていかれるシャルロットが眼に入る。

悠季がキレた。完全に。

切れた唇から流れる血を無視し、女に飛び掛かり、顔面を殴った。
「シャルロットをはなせつ……お前なんかに、シャルロットを奪わ
れて溜まるかっ……」「――」

「――のクソガキ……――」

外で待っていた仲間にシャルロットを投げ渡した。仲間がダッシュ
で逃げ、入口の近くにいた客がそれを追う。

「シャルロット……」

待機させていたヘリで颶夷と逃げる。中の女性は思いつ切り悠季
を蹴り飛ばした。口から吐き出る胃液。涙を流しながらも、悠季は
刃向かうことをやめない。

「シャルロットを返せえ……」

「死ね、クソガキ！――」

正気か。悠季に拳銃を向けた女。しかし、悠季は奥せず、女性に
掴み掛けた。

「あなたは！－シャルロットをつ！－！」

「親元に帰すのはおかしいか！？クソガキ、頭がおかしいな！－！」

「あなたの眼は汚いから、信用出来ない！－よくもつ！－よくもシリルロットに、あんな乱暴にして、おかしいとか言えるな！－？」

「親孝行をするのは当然だるうつ！－？アイツはいい『モルモット』に！」

「ふざけるなあ！－帰せつ！－幸せがないなら、シャルロットを帰せよ！－！」

女の言葉を遮り、顔面に頭突きを食らわせた。女がのけ反るが、悠季は追い撃ちをかけようとする。

「シャルロットおつ！－シャルロットおつ！－！」

「小賢し」

女が遂に引き金に指をかけたその瞬間、女の銃が叩き落とされ、女の頭が撃ち抜かれた。

「私の愛弟子を……。悠季、大丈夫ですか？」

「キリエさん！－シャルロットが！－！」

助けに来たのはキリエ。悠季の様子を見て、錯乱していると判ると、悠季を抱きしめ、落ち着かせた。

「大丈夫……。シャルロットが、どうしたのですか？」

「シャルロットが……さらわれた……」

涙は止まらない。キリエは女性の死体からテュノア社の社員証を取りると、創龍に連絡しようとした。

「シャルロットを、守れなかつた……」

「悠季……」

「僕はつ！－”だいじなもの”を、守れなかつたつ－！」

「坊主……」

客も、キリエも、悠季の気持ちが判れば判る程辛い。悠季の顔は涙でぐしゃぐしゃになつていて、蹴られた跡もあつた。それでも立ち向かう悠季。この子の芯は、凄く強い。

守る為の力を与えたい。”だいじなもの”を守る力が。

「悠季……」

「キリエさん……どうして僕は守れなかつたのつ！－父さんは守つてくれたつ！－僕はシャルロットを守りたかった！－」

「……悠季。貴方の心は、判りました」

シャルロットも大事だ。だが、それよりも、悠季の望みに応えてやりたい。

創龍と眼差しが似ていた。魂も、何もかも。守りたいといつ気持ちは、むしろ創龍以上かもしれない。

「力を入れるということは、力を自覚し、溺れないようにする」とです。判りましたか

「僕は、だいじなものを守る力以外、要らない……」

固い決意。気持ちが強い。

キリエは、悠季を鍛える事を決めた。この子の為に。意志を守る為に。

3 (前書き)

今更ですが、このまま書き続けていいのか判らなくなつてきました。

「その後、シャルロットはどうなったの？」

「うん、デュノア社のテストパイロットになつたんだ。適正ランクがAつてわかつた途端にね。デュノア社の経営が困難になつていて、時に、それが出たから、まさに助け舟だ、開発が出来る、つてあつちは思つただろううね」

悠季のベッドの前で続く立ち話。でも、と彼女は言葉を濁し、俯いた。悠季がシャルロットの顔を覗き込む。

形見のペンダントが、キラリと光つた。

「でも、あそこにボクの場所はなかつた。道具みたいに扱われ、繼母には暴力を振られ、父親は会つてさえくれない。愛人の子供だといつのにね」

悠季の話との繋がつてはいる。しかし、悠季が聞いている本題はまだだ。何故、偽名を使うのか。
そして、新たな疑問。何故そこから出でこれたのか。

「でも、ある日。ISを動かせる男性、一夏が現れたとき、父から指令が降りたんだ。所謂スパイ活動をしろ、とね。もちろん、ボクは嫌だつた。テストパイロットならともかく、なにか罪を犯した訳でも無い人達を、自分達の会社の利益となりそつだからスパイしろ、なんて、あまりにも酷いから」

「うん」

悠季が相槌を打つ。

「でも、その時に、一夏だけじゃなく、悠季も『コースに出てたよね。』『ランチア・ストラトス、世界で一人目の男の『ES適正者』つて。それも聞かされたボクは、二つ返事で了承したんだ。勿論、スパイ活動をする気はなくだよ。ボクは、悠季に会いたかったし、あんな所にはいたくなかった」

自分に会いたい、なんて嬉しいことだらう。悠季の気持ちが高まつた。

「それに幸運が重なつて、出発予定日の1日前、おじさんが僕を連れ出してくれたんだ」

「えっ？」

「空港まで移動する最中に気づいたんだ。運転手がおじさんだった。情報屋つて人が、ウチの情報をキャッチしたらしいんだ」

情報屋。悠季も聞いたことがある。名前を、エンツォ・フェリーニーとこづらしい。会つたことが無いので、顔も性格も知らない。

「どこの出させて貰えなかつた。外に出たのはこれが初めてだつた。その時に、おじさんが変装して、空港まで連れてつてくれたんだ。会社の方の通信手段も、全部情報屋とおじさんが潰したらしいんだ。だから、今は自由の身なんだ。けど、偽名を使うのは、あつちに感づかれないように、だつて」

「偽名はあつちも知つていないの？」

「うん。何も。追つて連絡する、とは言つていたけど、今は通信機器が無いから

「男装は？」

「一夏に接近しやすこうに、だつて。でも今は身を隠すためだね

裏手を取つたようだ。なるほど、と悠季は感心した。

「『こ』の事を知つてゐるのは、学園で、僕だけ?」

「うん、おじさんが話してなければ」

「親父は、そういう所は賢いから大丈夫だよ。いきなり初対面の奴を信用しないし、この学園もね。僕が親父と電話するときに、千冬さんのこと話をすけど、千冬さんの事は信用してるから」

「なんで?」

「親父と千冬さんは、電話で何回か話してるから。つい最近のことだけどね。後は、今日も仕事で話してるらしいし、一人とも『こいつは信じられる』ってさ」

「その仕事の話は、ボクの正体も?」

「親父は転校生のお守りとしか話していないから、必要以上に話さなかつたと思う。仮に話していたとしても、千冬さんは口が堅い」

一人とも、信頼出来る『仲間』であるからこそ、疑わない。

創龍に至つては、父親でもあるからだ。

「そつか

「うん。バレても、学園機密は漏れないだろうしね。学園が『こ』には、政府とかの役人でさえ、学園の中の事は知らないらしい」

生徒側の方は安全・安心。同時に、自由を少しだけ奪われるが、命と自由を引き換えにするなら、誰でも自由を渡すだろう。

それに、奪われた自由を忘れてしまつ程、楽しい仲間も出来る。苦は感じられない。

「でも、何かあつても、君は僕が守るよ。最初から最後まで、絶対

悠季の透き通ったスカイブルーの瞳の内を、シャルロットは覗き込んだ。その瞳の様にクリアで思いであると彼女が思つと、嬉しくなつてくる。

悠季は意識せず、シャルロットをオトしてしまつた様だ。いや、元々オチてゐるのだが、更に深く漫からせた。

「悠季、信じてるよ」

「ありがと」

優しい微笑み。シャルロットの『悠季にデレデレハート』に、ずぎゅうんという銃声と共に、弾が撃ち込まれてしまった。

シャルロットのべた惚れ度は右肩上がりになつていぐ。平面のX-Yグラフで表すと、綺麗に原点〇の角度を二等分する一次関数だ。

「悠季

「つまこつ、こきなりだとびっくりするから」

抱き着いてくるシャルロット。この子はスキンシップも激しくなつたな、と悠季は思つた。

シャルロットの胸元のペンドバンドがじらじらと当たつた。彼女自身もその感触を感じた。

その時、シャルロットは、創龍から、悠季に渡してくれ、と頼まれていたアミコレットの存在を思い出した。

シャルロットは、『めんね、と言つて、制服が入つていた袋の中から、琥珀のアミコレットを取り出し、悠季に差し出した。

「おじさん、が渡してくれつて」

「親父が？」

このアミコレットは、創龍がいつも着けていた物だ。アミコレットは魔除けの他、厄除けなどにも使われている。

「親父のね……」

アミコレットを受け取り、首にかける。琥珀から伝わる、暖かい“なにか”が、悠季の心を包み込む気がした。

「ありがとつ」

「うん、どういたしまして」

礼を言つ悠季に、シャルロットが笑顔で答えた。

今日で何回田だらうか。そして、何田ぶりの笑顔なのだろう。

「シャルロット」

「なあに？」

「おかえり」

自分の元へ戻ってきたといつのに、その言葉を言つのを忘れていた。家ではないが、家族の元だといつのは変わらない。

「ただいまっ」

あまりの嬉しさに、ほろりとしました。少しの嬉し涙に、悠季がまた優しく笑い、シャルロットの頭を撫でた。

「ありがとう。優しいのは変わらないね」

「やうかな？」

「うん。こつも優しかったよ」

満開の笑み。可愛く思つた悠季が、少しだけ顔を赤くする。

「なんか、安心して、お腹空こちやつた」

「あ、ああーー食堂行こつか」

無意識に手を差し出す悠季。シャルロットが「入门ながり、その手を握つた。

食堂で、レールガンの件を千冬に怒られたことと、また後の

食堂での食事が終わつた後、悠季は千冬の部屋に、シャルロットと一緒に出向いていた。

シャルロットはジャージだと、女だとすぐにバレてしまうため、悠季の服を借りたが、ダボダボで何度もコケてしまつていた。

「織斑先生、失礼します」

ノックし、断つてから千冬の部屋に入る。少し散らかっている。とても千冬の性格からして考えられない。

「どうした、ストラトス。デュノア。……ああ、今は神威でいいか」「はい。実は、シャルルについてなんですが」「デュノアが？なにがあるのか？」

シャルルの事を、シャルロット本人が全て説明し、千冬に話した。千冬がうんうん、と頷きながらも、別状困つたことではない、というような顔をしている。

「大丈夫だ、デュノア。この学園には、お前の同意がない限り、外部からの手出しは全く持つて許されん」

「え？」

千冬は学園手帳を開き、該当する校則の一つを読み上げた。

「特記事項第一十一。本学園における生徒は、その在学中において

ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は許可されない

「す、すげえよエジ学園……」

「教師は生徒を守るためにいるものだ。この学園は、それを一つの団体として、徹底的に強化したと思っていい。デュノアの安全や、お前の父からの介入、もつと幅を広げると、フランス政府の介入は、この学園へは出来ない」

妙な所で役に立つ校則。シャルロットの人権的安全は守られる。身の安全は、悠季も千冬もいるから大丈夫だろう。

「代表候補も降ろされん。この学園が指示しない以上はな」「つまり……。ここにいられるということですか？」

「ああ。それを、お前が望んでいるのならな」

拒否しない筈がない。悠季の傍にもいられる。隠れ蓑が無くなろうとも、この学園が、悠季が、守ってくれる。

「しかし、すぐに女、ということをバラすのは、生徒が混乱するだろうな……。1ヶ月後にでも、それをするか」

「はい」

「厄介事を持ち込んでばかりで、すいません」

悠季が謝った。今回だけでなく、創龍が壊したアリーナの壁、悠季が壊した机、ヴァンガードで全壊した管制塔など、学園側には多大な損害を与えていた。

「今回の件、悪魔の件は仕様が無い。だが、貴様等が抑えれば、あんなに損壊せずに済んだ物もあるだろう、愚か者め。破壊アリーナの壁は、貴様の報酬から引いておくからな」

「構いません。寧ろ、あの報酬は過すぎるんで、頼みます。一々アタッシュケースは止めてください」

「教育よりも多く貰っているのに、減らせと？嫌味か？」

それに、貴様は命を護つてこらるのだ。イレギュラーな存在からな。命の見返りとして、金というのは、あまり私も気に食わんが、受け取つておけ」

それが困るんだよ、と悠季が軽口を呴く。便利屋の普段の収入より、何倍も多い。

「仕送るかな……」

「『Black sheer』はお金持ちでしょ？あんな広い家も、家電も、家具も買えてるんだもん」

「わうなんだよねえ……」

でも、と悠季は言いつゝ、仕送る」とこした。1／5でも送れば喜ぶだろ。

「今度また、悠季の家に行きたいなー」

「こつでもおこで。スラムだから、来るときは声をかけてね

話が終わり、千冬が散らかつた部屋を見回している時、悠季はシャルロットと話す。

「神威。一つ依頼していいか？」

「はい？」

「この部屋の掃除をしてくれ

悠季とシャルロットは、暫くこの部屋から出れなかつた。

「よかつた。ここにいられるなんて」

自室に戻ったシャルロット達が、それぞれのベッドに腰掛け、話した。

「うん。君の近くにいられて、君を護れるのが、僕は嬉しい」「えへへっ、悠季は、ボクのナイト様だね」

あの日から、シャルロットを守りたいが為に己を鍛えた。その力は、今シャルロットだけでなく、一夏も、篠も、鈴も、セシリアも、大事な仲間を護れる程に大きくなつた。

自己満足であるかもしね。しかし、己を見失つほど、力に固執する意味も、気持ちも無い。

「でも、無理はしないでね？ボクにも出来ることがあつたら、きっと力になるから」「ありがとう」

その言葉に、自然と笑みが零れる一人。シャルロットは悠季の隣に移動し、肩に寄り掛かる。

「それと、いつでも甘えさせてね」

悠季は何も言わず、優しくシャルロットの頭を撫でた。今までのことを、「良く耐えたね。よく戻つて来てくれたね。」と讃え、喜ぶようだ。

「一緒に寝ようか?」

「いいの?」

「うん」

いつぱい甘えさせてあげたかった。今日から、それをしてあげよう、悠季はそう考えた。

時刻ももう、1時を回っている。そろそろ寝ないと、明日が大変だ。

横向きの悠季の顔の前に、シャルロットがいる。

「おやすみ、シャルロット」

「おやすみ」

大胆に悠季の右頬にキス。そのまま、悠季の胸元に顔を埋め、すやすやと彼女は眠りに落ちた。

「大胆なのが、なんなのか判らん……」

顔を赤くしながらも、シャルロットを優しく抱きしめながら、悠季も意識を闇に落としていった。

～その日の食堂～

「あれ。セシリ亞、悠季は？」

「あら、一夏わん。デュノアさんとさつき一緒に食べてましたわよ？」

「声をかけようと部屋に行つたが、既に居なかつた」

「アイツって、そんな趣味があつたのねー。ヤバいわね」

「……ゆ、ゆゆ、悠季に限つて、そんなことはない！！」

「なあに顔真っ赤にして叫んでんだ、篠。鈴、アイツら幼馴染みだぞ」

「だからこそ、疑惑があるんじやない。私達を更にヤバい感じにしたものよー。」

「俺達がどうした？」

「…………」

Mission だいじなもの

「ふみゅ……っ？あれ、悠季？」

翌朝。ベッドには悠季の体温が残っているが、本人はいない。

「今、何時……？」

シャルロットが眠たげな目を擦りながら、田舎まし時計を見る。今は6時半。少しばかり早起きだ。

「あ、起こしちゃった？」

シャワールームから聞こえる悠季の声。彼はタンクトップと制服のスラックスを着、シャワールームから出て来た。

「おはよう。いつも5時頃からトレーニングしてるんだ。今日はボーテヴィッシュさんがいたよ」

「へえ……」

「顔洗つておいで」

シャルロットを立たせ、背中を押しながら、流しヘ誘導する。タオルを渡すと、悠季は制服の上を着に戻った。もうコートは暑いので着ていない。制服を腕まくりし、動きやすくした。

「おはよう悠季」

冷たい水で目が覚めたシャルロットが、悠季に挨拶をした。

「制服に着替えたら、食堂行こつか」

「うん」

シャルロットの着替え待ち。彼女の男装服を渡すが、それだけでは済まない。女の子の着替えだ、予想は付くだろ。悠季はシャルロットに背中を向け、着替え終わるのを待つた。

そして、隣の簞と一夏を誘い、食堂へ。簞も、一夏を連れて、剣道場で毎朝鍛練しているらしい。女版富本武蔵でも田舎しているのだろうか。

「おはよう一夏、簞ノ乃さん」

「おはよしある」

「あ、ああ……」

悠季が、ホ ?

昨日の鈴の話を未だに忘れられないらしい。悠季は何か嫌な気を感じ、簞に言つ。

「ねえ、簞。もしかして、僕×シャルルとか考えてない?」

「な、なにを馬鹿な!..!」

「僕はノーマルだよ」

話の意味が判らないシャルルが、一夏に聞こいつとするが、お前は判らないほうが良い、と制されてしまった。

今日は土曜日であった。休みではないが、午前で授業が終わっていた。

いつも通り、アリーナの使用許可を取り、第、セシリ亞、鈴と一夏、ランチア、そして今日からはシャルルがそれに混ざることになった。

「ランチア。一夏は、どこまで出来るよになつたの？」

「セシリ亞のおかげで、グリッドターンと、イグニッショントースト瞬時加速は出来る様になつた。後は、僕のエスケープ・アーツを少し」

「回避技？」

試しに、一夏にシャルルの銃撃を避けでもらおうと、ランチアが思つて言つた。

シャルルの専用機・ラファール・リヴィアイブ カスタムエエのアサルトライフル ヴェントを連射してみた。このラファールは、プリセットを幾つか外し、拡張領域を倍にしてあるため、様々な武器が使える。

ランチアのエスケープ・アーツのみで銃弾を避けようとしたが、少し無理があつたようで、何発か当たつた。

「なかなかだね。後は、射撃武器の特性を理解できれば、相当強くなれるよ」

「エスケープ・アーツはまだ未熟なんだよなあ……。つか、なんでセシリ亞に勝てたんだろ」

「根性じゃない？」

代表決定戦の時だ。確かにあの時は勝つた。しかし、それからは、冷静な思考のセシリ亞に勝てず、負けが続いていた。

「スランプとかもありますから、長く考えていけばよろしいのでは？」

「まあ、な」

セシリアの言ひことを素直に受け止める一夏。焦る必要は無いのだ。

「実際に銃を使つた方がわかりやすいかな？ボクのヴェントを貸すから」

はい、と一夏に手渡した。他のエスの武器は、その武器の所有者とエリが認証することによつて使える。

久しぶりの射撃だ。一夏はハンドガードに左手を添え、腰の辺りで構える。よく見る軍団スタイルだ。しかし。

「一夏、M9と同じ位置でいいんだよ」「え？」

どちらの方が正しい、とは無いが、どちらの方が狙いやすいだろう。

「センサー・リンクは出来てる？」
「いつも探しても、無いんだよな、これ。エピオンかつつうの」「エピオン？」
「一夏、Wネタは止めようか」

射撃補助の為にセンサー・リンクがあるのだが、ガチガチの格闘機体の白式には無かつた。シャルルが言うには、普通は格闘機にも

あるひし。

「まあ、反動の逃がし方も知つて　」

虚空を狙いながら言つ一夏。その脇から、アリーナがざわつき始めた。

「ちょっと、あれーディツの第3世代型IISじやない?
「まだ本国でのトライアル段階だつて聞いたけど……」

話題の種は、すぐに判つた。

空中に浮かぶ、黒いIIS。それを駆るは、銀髪の独眼。

「ボーデヴィッヒさん?」

その通り、機体の操縦者はラウラだ。ラウラは一夏にプライベート・チャネルを開き、話し始めた。

>>貴様も専用機持ちか……。ちようどいい、私と戦えくく
>>嫌だね。戦う理由もメリットも俺には無い。そんな自分勝手な奴に付き合つて堪るかよくく

口数が多い一夏に、ラウラがイラついた。

>>減らす口を叩くな。貴様が教官の弟であるなど、私は認めん。

……そうだな。嫌でも戦わせてやるひつゝへ

そう通信すると、右肩のレールキャノンを、一夏田掛けて発射するワウフ。それを、雪片式型で上空に反らす一夏を見て、ラウラが眼を見張った。

「何やつてんだか……」

「何故ソイツと一緒にいるのだ、息子どのーー。」

「僕が誰といよつと勝手だらうっ。」

一夏の脇で、ランチアが呆れた様に言つた。それが耳に入つたラウラが、ランチアに言つたが、軽く返された。

アからは応答がない。回線も無いのである。

無論、E/Sを持つていないのでから、当然だ。

「ええい、まどろつこしい。息子どの、貴方は私と同じ存在だらう。何故、力無き者と群れたがる？」

「力が何か、自覚しているのか？」

「力は全てだ。力がなくては、何も出来やしない。自分を守ることすらな」

後半は正論だが、力が全てではないとランチアが思つた。力に溺れる者の典型的な例だ。

「力が全て？下らんね。確かに僕には力がある。だけど、その力を全てと思つたことはないね」

「力なきものは、力ある者の枷になるだけだ。そいつが強ければ、教官も、一連霸が……」

「モンド・クロッソか？」

当事者の千冬はいないが、一連霸の可能性を摘み取つたよつと言われた一夏に、ランチアが聞いた。

「なにがあつた？」

「ああ。その決勝戦で、誘拐されてな……。千冬姉が、決勝を棄権して助けてくれたんだよ」

「へえ。いい話じやないか。弟想いの姉で」

「そもそも、貴様がいなければ」

「その辺にしておけ。付け上がるな、クソガキ」

ランチアがラウラを睨みつけた。まだキレイとはいが、それでも癪に障つた。

「モンド・クロッソー連霸？ハツ、いくらそこので勝とうが、大事なモノを守れなきや、意味がない。千冬さんは、唯一の肉親の一夏を助けた。つまり、彼女の中には、人の命の方が、モンド・クロッソ連霸より価値がある」

「な、なにを？」

「力をただ追い求めた先には、何があると思つ？何の意味もなく、ただやたらと力を求めた者の末路は判るか？」

見てきたからこそ、言わなければならぬ。ランチアは冷ややかな眼で言った。

「孤独な死だ。血ら身を滅ぼしてのな」

「つ……」

「クソガキにはまだ早過ぎるんだよ、力を求めよう、なんざな」

「黙れ……つ！」

「凶星か？その怒りを、僕にぶつけるか？」

「いくら息子どのも、それ以上は……殺すつ……」

「やつてみな」

ラウラからの殺氣。しかし、ランチアはピクリともしない。ただ、ゆづくりと口を開いただけだ。

逆にラウラをキレさせてしまった。右腕のプラズマ手刀でランチアに斬り掛かるが、頭一つ分の大きさだけ避けられ、空を捉えた。

ランチアがその腕を左手で掴み、右腕をラウラの腋に入れると、地面を思い切り蹴りながら一本背負いを決めた。

「その程度で、力を云々言つてゐるのか？」

「ぐつ……！」

「甘いね」

左手を離し、ラウラをそのままにする。立ち上がるラウラが、ランチアを睨みつけた。

「貴様つ……」

「おい、そこつ！何をしているー！Sで生身の人間を襲うなど言語道断だ！クラスと名を言えつ！！」

反撃に出ようとした時に、タイミングよくアリーナを管理していた教師に止められた。

咎を喰らつたのはラウラのみであった。しかし、教師の説教の中に、ラウラは無視してどこかに行つてしまつた。

去り際に、ランチアを睨み付けたが、ハツ、と鼻で笑われた。

「君、大丈夫だつたかい？よく背負いなんかかけられたね」「まあ、あんな大きな振りなら、避けるのは容易いですしおしゃかりしてくるから、強く打ち込めますよ」「そうか。取り敢えず、怪我が無くて良かつた」「もういいですか？」

「ああ」

大したことなどしていない、と言わんばかりの態度で、アリーナの管理室から出た。外で待つていたシャルルと一夏が、悠季にハイタッチする。

「やるな、悠季！…」
「見ていて爽快だったよ」

楽勝だ、と悠季が言つて、度や顔をした。

「どうていよい、あれだけやれば」「ははは。でもあれくらいなら、一夏でも出来るでしょ？」「俺ならシャツフルを使つよ」

更衣室へと歩きながら話す三人。悠季は制服だが。

「でも、ガキって、ボクたちと同じ年でしょ？」

「うん。僕、16だから」

「あ……。忘れてた。悠季、ボクたちの一個上だよ」

「え？誕生日いつだよ？」

「父さんに拾われた日だよね？12月の7日。今年で17だ」

因みに一夏とシャルルはまだ15だ。つまり、悠季が1年早い。

「1歳差でガキか。随分マセてるよな」

「はは……」

更衣室に着き、悠季はそのドアの前で一人を待つ。シャルルはスーツの上から制服を着るため、そう時間はかかるないが、一夏はタスースを脱ぐため、相当遅い。

「一夏？先行つていい？」

「ああ」

シャルルが出て来た。悠季は一夏に聞いて、一人で先に寮に戻った。

部屋で手を洗つてから、食堂へ行く。既に篠、鈴、セシリ亞が居たため、そこに相席させて貰つた。

「ランチアつてさ」

「なに？」

「お昼も、すごい量を食べますわね……」

食券をこれでもかと三つくらい買おうと占めている。今日はバーガー系を20枚ほどだ。

「私達より動いてないのに、よくそんなに入りますわね。しかも、太らず……」

「基礎代謝って知ってる？運動してると自然に上がって、食べても太らなくなるんだよ」

セシリアに、代謝を話すランチア。そこに、ランチアを探していたらしく、真耶が声をかけてきた。

「ストラトス君、今いいですか？」

「はい」

「大浴場が使えるようになりました。時間は結構後なんですが、織斑君と、デュノア君と一緒に入って下さい」

「悠季と……お風呂……」

「デュノア君？」

「やつた！！風呂入れるのか！！やつたぜ！！」

「山田先生、この二人はもう流していいです」

「あ、はあ……」

篠が上手い具合に言つた。ランチアは拳を握り、風呂に入れる幸せを噛み締めた。

「山田先生、あざっす！お礼にこのフィッシュバーガーを！」

「あ、ありがとう……。私が決めた訳じやないんだけど……」

困り果てる真耶を、更に困らせるランチア。篠がすここんと手刀でランチアを止めた。

「気狂いか、お前は」

「すいません」

「…」となく、幕が千冬に似てきた感じがした。

「ランチア・ストラatos……」

ラウラが自室で、その名を呟く。激しい憎悪と怒りを持つて。

「『力が全て』ではないだと? 力の無い者こそ、死ぬだけだ」

真耶を負かした強さ。教師に力が無いだけだ。

「弱者はこの世界にはいらん、強者こそ、この世に必要だ。私と同じ存在なのを判つて……」

だからこそ腹が立つ。生きていて、これ程苛立ちを感じるのは初めてだ。

「そこまで堕ちていくのなら……、私が肅清　いや、殺す」

眼には殺意。力強く握り締められた拳。

しかし、彼女自身が死に近付くことなど、この時は誰も知らなかつた。

月曜日から、ラウラが悠季を睨みつけて見るよつになつた。隣の席なので、諸に視線が直撃する。

「随分嫌われてるね……」

「しようがない。でも、正しいことを言つたから」

その言葉が気に喰わない。掴み掛かろうかとも思ったが、止めた。

「ねえ、ランチア。放課後はどうする？」

「そろそろ一夏に、僕の剣技を教えたいんだけどなあ」

「あまり無理なのはヤメたほうがいいよ？あとで、鈴さんとオルコットさんが模擬戦やるから、今日は篠ノ乃さんと四人でやることになつたから」

ラウラがそれを聞いた途端、ちようどいと思つた。

このイライラを、二人の模擬戦に入りし、ぶつけて発散しよう。うまくいけば、ランチアを釣れるかもしれない。

それまでの辛抱だ。ラウラは一人笑つた。

しかし、ランチアは見逃さなかつた。彼女を警戒すべく、彼はアリーナに先に足を運んだ。

「なんでアンタがいんのよ」

甲龍を展開している鈴が、その横にいる悠季に言った。

鈴の前には、ブルー・ティアーズを展開したセシリ亞がいる。

「見物。模擬戦やるんでしょ？」

「いや。この前の模擬戦でズタボロにされちゃったから、どちらが上か、ハツキリさせたいのよ。俗にいう、ガチンコね」

「面白そうでもありますし」

微笑みながら言つセシリ亞。悠季も笑いながら一人に言った。

「怪我しない程度にね。あと、急な乱入者には気を付けるよつ」

乱入者といふ言葉に、鈴が引っ掛けた。

「悪魔とかかしら？ふん、じつちだつてエリに乗つてんのよ？返り討ちにしてやるわー！」

「ええ、では鈴さん、始めましょうか」

「そうね！行くわよー！」

元気で結構、と悠季は呟く。鈴がそれを身で表すかのように、青竜刀を連結、双天牙月の形態にして、セシリ亞に突っ込んだ。セシリ亞は臆することなく、スター・ライトmk?を撃ち始めた。

悠季が、これなら大丈夫だ、と思い、アーリーナのゲートをくぐり、外の自販機でお茶を買い、自販機に寄り掛かりながら、それを飲み始めた。

「あ、ストリヤんだ」

「どうも。布仏さんだよね？」

ダボダボの袖の制服を着た子が、他に一人の子と一緒に、悠季の近くに来た。

「ストラースくん、誰か待つてるの？」

「うん。一夏、篠、シャルルを」

「ストリヤんつてさー」

変な呼び名で呼ばれるが、気にしない。

「へんてこりんな技ばっかし使うよねー」

「ああ、回避とか？あれは自己流と、昔習った武術から作ったんだ」

「へえー」

「どんな武術やつてたの？」

「うーん、クラウス・アーツっていう、格闘技や剣術とかが混ざったモノなんだ。アーツには、大きく分けて四つの型があって、剣に特化、回避に特化、銃に特化、防御に特化っていう風になってる」

「なんだか、複雑だね」

お茶を飲みながら応答する悠季。長身が自販機の高さにマッチする。

「ストリヤんおつきー！」

「織斑くんは170くらいあるけど、ストラースくんは余裕で超えちゃうよね。織斑先生を見下ろすくらいに」

「184cmだよ。レッドブルで大きくなつたようなモンさね」

「レッドブル好きなの？そりいえばストリヤん、新聞部の先輩から貰つてたね～」

話し方がのほほんとしている布仏さん。よし、のほほんさんと呼ぼう、と悠季は決めた。

早速呼ぼうとした時、アリーナが急に騒がしくなる。悠季は布仏さん達に、用事があると告げ、中に入った。

予想通りだ。ラウラがセシリ亞と鈴の戦闘に割り込んでいる。

ちよつど鈴の衝撃砲「龍砲」がラウラに近付き、撃ち放つ瞬間。

龍砲はピクリとも動かなくなってしまった。

「なんだ、あれは……」

「釣られたか、ランチア・ストラトス！…」

ラウラに気付かれた。無理もない、EISにはハイパーセンサーが搭載されている。リミッターがかかっている状態でも、360度、微細物まで見られるのだ。

「ら、ランチアさん！」

「コイツらを壊してから、相手をしてやるわ。それまで待つていろ」

セシリ亞がBT兵器を開拓しているが、『展開中、BT操作に集中して動けない』弱点を的確に付いており、避けながらレールカノンを撃つている。

鈴に対しては、インファイトでプラズマ手刀を開拓、必要以上に斬り付け、ワイヤーブレードに絡ませ、セシリ亞に投げ付けた。

その次までの行動が速い。レールカノンを乱射しながら、瞬時加

速で勢いづけ、プラズマ手刀で一閃した。

絶対防御が発動され、IISが解除される一人。絶対防御は、操縦者の命は守るが、怪我や衝撃までは関与しない。

それを上手く使い、怪我まみれの状態にしたラウラは、悠季を見ながら言つた。

「見ろ！これが力無きものの末路だ！」

「……遺言は、それだけかい？」

静かな怒りが悠季に見える。拳を強く握り、ラウラを睨んだ。

「それは、強さじゃない。オーバーキルが、力を持つものが、本当にやることか？」

「弱者が強者の一撃に耐え切れないのが悪い……」

闇魔刀を無意識に取り出した。ドレッドラートを使用せず、IIS武器を取り出した悠季に、ラウラが一瞬たじろいた。

「馬鹿は、痛い目を見ないと解らん様だ……」

ダッシュでラウラに突っ込んでいく。ラウラはレールカノンを撃ちつつ、ワイヤーブレードで悠季を狙う。

レールカノンをしゃがんでよけ、ワイヤーを中心として、螺旋状に身を動かす。

3本、4本とワイヤーブレードが増えていく。首筋に3本目が掠るが、ブレード部を掴み取り、引き千切つた。

腹を狙う4本目に乗り、それに付いラウラに近付く。それでも冷静にレールカノンを連射する彼女だが、悠季は全てを飛んで避けた。

ラウラの真上に移動し、逆立ちの様な体勢になつて、鏡花水月で弾丸の雨を降り注がせる。

「フン、そんな豆鉄砲！！」

プラズマ手刀で弾丸を弾く。悠季はそれを振り切つた隙を突き、天上天下で兜割りを仕掛けた。

見事命中、ラウラのシールドを貫通する程の威力があつた。衝撃で額から血が流れるが、ラウラは流れた血をべろりと舐め取り、悠季を睨む。

「ほらな。やはり、力が全てだ」

「戦いだけしか考えないのか？力より大切なモノがあるだろう？」

ギロリと鋭い眼光がラウラを襲う。またもやラウラがたじろいた。

「絆か？仲間か？そんなものにこだわるか？」

「『だいじなもの』は誰にもあるはずだ。それがあるからこそ、力を持つ意味を理解出来る。力は絶対的なモノじゃない。アンタはそれを判つていない」

それに、と悠季が続けた。

「アンタは、『だいじなもの』自体、力だと思っているだろう。強さと力は一緒じゃない。強さはどれだけ『だいじなもの』を信じら

れるかだ

「フン……。戯れ事を！！」

ラウラが悠季を掴もうとするが、悠季は宙に舞い上がり、踵落としてシールドを破壊しようとした。

「そこまでだ」

寸前で、一瞬で間に入ってきた千冬に止められた。

悠季はエアハイクを使い、バク宙して、千冬の後ろに立つ。よく見れば、千冬は打鉄のブレードを生身で持っていた。

「教官！？」

「教師だと言つているだろう。熱くなるのは構わん。しかし、物事には限度というものがある」

「限度？それなら、あの一人のオーバーキルの時点で超えているでしょうか？」

「あいつらも、ボーデヴィッヒと好戦的だった。それで負けた。絶対防御はオーバーキルではない」

納得し難い。やり方があまりにも汚いからだ。

「だが、悪意が合つたのは確かだ。そして、ストラトス。お前は意図的に発砲、そして真剣を使つたな？」

「……」

力無く頷く。加減はしたつもりだが、威力はラウラの額を見れば判る。

「学園内で銃を使うのは構わん。しかし、お前は殺す氣で銃を撃つていただろう！！」

「……少し、ムキになりました」

怒りが殺意になつていて。感情で行動する。悠季の悪い癖だ。

「ボーデヴィッヒ！－兵器と判つて、ストラトスを一度も攻撃した罪は重い！！」

「しかし……」

「口答えは許さん！－いいか、相手がストラトスだったから良かつたものの、本来ならばお前は国際的に裁かれるのだぞ！－！」

化け物に法が通じはしないとは思うが、それでも、教師であるから、言わなければならない。

「それでも、決着を付けたいのなら、学年別トーナメントでやれ。それなら、文句は言わん」

悠季とラウラの目が合つ。火花が散るかの様な、熱い闘志と敵意。二人はそれを承諾し、ラウラはアリーナを去つて行つた。

「神威」

「力に溺れた、可哀相な奴だね、アイツ」

拳を握り、血を垂れ流す悠季。地面上に、ぽたぽたと血の跡が出来ていた。

「そういう奴だから！」と、僕が救わなきやいけないんだ……！」

「自らが望んだ事だ。そこからあいつを引っ張り出せるか？」

「出してみせるさ。それが、僕のやるべき事なんだから……！」

そう言つて、悠季はヤシロアと鈴を抱き、保健室へと連れていつた。

「ランチア！」

「ん？」

保健室。一夏が鈴とセシリアのことを聞き、ダッシュで保健室に入ってきたが、鈴とセシリアは、大きな怪我でも捻挫程度で済んでいた。湿布や絆創膏だらけだが、普通に一人は悠季と話している。

「一夏さん？」

「うわ、こんな恥ずかしいじゃない！…」

怪我だらけの一人が、自分の体を見て焦った。

「ああ、良かつた……。無事なんだな」

「うん。二人とも、捻挫程度で済んだんだよ」

「程度つて、捻挫も痛いんですよ？」

「ああ、ごめん」

セシリアがジト目で悠季を見、苦笑いをする悠季。一夏がそれを見て、ホッとした。

「取り敢えず、一週間は安静にしてなさい、だつて

「ランチア～、怪我を治す魔法とかないの～？」

「魔法は使えないんだよね、僕。魔石つてのもあるんだけど、今は持つてないし」

無い物ねだりをしてもしょうがない。渋々一人は休む事を決めた。

「おまたせ、お茶買つてきたよ」

「ありがとう！」やこます、シャルルさん

ドアから、シャルルが紅茶と烏龍茶のペットボトルを持ってきて、悠季に渡す。悠季がキャップを開けてやり、保健室のコップに出してやり、一人に渡した。

「これだと学年別トーナメント、出れなさそうだね」

「意地でも出たい気持ちはあります、仕方ありませんわね」

「私は出るわよ……」アイツに吠え面をかかせたいわ……」

一対一でも無理だらう。龍砲の動きが止まってしまったら、遠距離からの攻撃は出来ない。近接を挑もうとしても、止められてしまうだらう。

「ISを借りてでも……」

「織斑くんッ！！」

「デュノアくん！！」

「ストラトスくん！－」

鈴が言いかけたとき、タイミング良く、大勢の女子が保健室に突っ込んできた。扉が無残な姿になり、どこかへ吹っ飛ばされた。

「な、なんだなんだ！？」

「トーナメントのペア組んでよ……」

一夏がその数に驚き、鈴はカットされたため不機嫌になる。トーナメントのペア？と疑問に思った悠季が聞いた。

「え、知らないの？更なる実戦経験を積むためとして、2対2のトーナメントになつたんだよ。好きな相手とペアを組めるんだけど、組む相手がいなかつた場合は抽選なんだって」

「なるほど……」

「それでね？織斑くんたちがよければ、一緒にペアになつてほしくて」

なるほど、と納得した三人。それを聞いて更に不機嫌になる鈴、そして悔しそうな顔をしたセシリ亞が後ろにいた。

「ごめん、俺はシャルルと組むことにするよ」

「へ？」

いきなりの発言に、シャルルが間抜けた声を出す。悠季はふふっと笑つた。

「なんだ。なら、しようがないね」

「シャルル、ごめん」

「いや！別にいいんだけどさ…………」

パワーバランスを考えたら、シャルルと悠季では強すぎるだろ？。一夏とシャルルならちょうどいい。

「ストラトスくんは？」

「う～ん、シャルルが取られちゃつたから、鈴かセシリ亞と組みたいんだけど、この状態じゃ無理だから、筹と組むよ」

悠季が後方支援になるが、まあいい。ラウラと戦えればなんだつて構わない。

「う、埋まっちゃつた……」

「そういうこと。」めんね。じゃ、僕、それを言つに行くから、お先に失礼」

セシリア達に断つて、寮に戻る悠季。シャルロットが少しだけ篝を羨んだ。

「それで?ふつーわざわざここまで……はあつー来たのか!」

「うん、まあね」

剣道場で、剣を振るい合いながら、悠季と篝が話す。今は一人以外誰もおらず、思い切り竹刀を振るつていた。

悠季は制服のまま、そして篝は胴着を来たままだ。

「篝さえよければ、組んで欲しいんだけど」

「それは構わん……せいつ!だが、やるからには優勝を狙うぞ?」

「別に構わないよ。『優勝すれば、一夏かシャルルか僕と付き合える』、って噂を聞いたからね。それも田当てでしょ」

「へつ?」

「スキあり」

ぱこっと篝の頭に竹刀が落ちた。篝は口をポカンと開けたまま、悠季を見た。

「噂だと……」

「うん。あら?もしかして、篝が発信源?」

「そういうことになるのか……?」

あらま、と悠季が言った。竹刀を置いて、篝に聞く。

「なに？一夏に告つちゃつた、とか？」

「……一夏に、私が優勝したら、私と付き合えと言つた」

「そいで？」

「あいつは買い物と勘違いしてた。呆れて声が出なかつた」「一夏らしいさね」

軽く笑う悠季とは対照的に、顔が暗くなる篠。悠季は篠の肩を叩き、励ましながら言つた。

「優勝しちゃおつか。一夏とくつづけてあげるよ」

「……お前も、付き合えよ」

「え？ 何故に……？」

「お前も、欲しいからだ」

かああつ、と、篠の顔が赤くなる。面と向かつて言つるのは大胆過ぎるし、言い方も恥ずかしい。

「判つた」

「ぜ、絶対だからな！－！何と言おうと、絶対だぞ！－！」

これをシャルロットが聞いていたら、今頃悠季はシャルロットに「ボコボコ」にされているだろう。

「……でも、まずは勝たないとね。ボーデヴィッシュには、特に」「ああ……」

静かな闘志が燃え上がり、一人を更に熱くさせた。

篠と悠季が寮に戻つて来た時、666号室の中には、既にシャルルがいた。

666号室のドアを開ける悠季は、「おかえり」を囁つシャルル。そのまま、制服の姿である。

「一夏は？」

「あそ！」

マッサージ椅子で極楽を味わつてゐる彼を、もう何度見たことか。

「お、おかげり。あれ？ 篠も一緒に？」

「一夏……。お前、何度もその椅子に座れば気が済むんだ？」

「ずっと」

はあ、と呆れた。悠季は一夏にマッサージ椅子を止めるまつに告げ、やめさせた。

「一の椅子ブツ壊しちまおうかな……」

「ひら、それはやめなさい」

「えー！」

シャルルに止められながらも、悠季は渋い顔をする。

「これあると、一夏は話聞かないんだよね……」

「生返事しかしてくれなかつたし」

「気持ちいいもんは気持ちいいからな。無理だ」

「ジジくさこば」

悠季が一夏に突っ込む。だが、一夏はそれを気にしない。

「こりゃ、一夏はトーナメントでお仕置きだな」

「ボクがいるから、そうそう一夏はやらせないよ?」

「どうかな?僕がいるから、簡単に突破しちゃうよ?」

「マジでそう思えてきたぜ……」

一夏の身が危ない。鈴の時と同じような感じで言っているのだろう。しかし、悠季にとつて、シールドに強大な衝撃をかけて、操縦者を攻撃するなど、容易いことだ。弱気な一夏にシャルルが少し幻滅した。

「はあ……。とにかく、負けないからね!」

「それはこっちの台詞さ。な、篇」

「うむ。少なくとも、この軟弱者には負けん」

「俺の扱い酷くね?」

三人の戦意が高まる中、一夏がぼやいた。

「じゃ、トーナメントに備えて、こ飯に行こう」

「うん。いっぱい食べとこっと

「シャルルに箸も教えなきゃだしね」

Let's食堂。悠季のこの一言で、四人は動いた。

「一本ペンを持つよ」……そりそり。その下に、もう一本潜らせ
て……」「いじ?」「そりそり」「そりそり」

シャルルの為に和食セットを頼み、箸を教える悠季。人差し指と親指で上の箸を動かし、中指で下の箸を支える。簡単な使い方だ。「やっぱランチアつて、教え方上手いな」

「そう?」

「シンプルで分かりやすいからな。教師にでもなれるのではないか?」

「教師ねえ……。小学生くらいなら見てあげたいな。ちっちゃい子つて、元気があつて可愛いし」

「いい人過ぎだろ!」

「可愛いものは可愛いからねえ」

悠季の意外な一面。しかも、満面の笑みで答えている。
子供好きは別にいいが、もし一歩間違えば、ロリコン認定されるだ
るわ。

「ランチア、お魚つてどうほぐすの?」

「この色のラインに、頭の方からお箸を入れて、左右に開きながら尻尾まで動かすの」

「こう?」

「うん、上手上手」

シャルルも箸に慣れてきたようだ。悠季はそれを見て大丈夫だと判断し、自分の食事を取り始めた。

「蕎麦？」

「うん。なんか食べたくなった」

「本能の赴くままに行動しているな」

「いや、『こはんは別に関係ないんじゃ』

篠に悠季とシャルルがツツコんだ。ボケなのか、真面目なのかはわからない。

麺を啜りながら、皆と談笑する。この空気が、彼等は一番好きだ。皆の笑顔が大好きだ。この笑顔が、悠季にとって、大きな力になる。もちろん、ラウラの言う力とは違つ。

雑談中に、篠がランチアに言葉をかけた。

「ランチア、食事後でいいから、少し付き合ってくれないか?」

「いいよ。なにすんの?」

「なに、少し見て貰いたいものがあるだけだ」

「剣とか?」

「よく判つたな? 実家から、真剣をな。実戦での剣を、お前から教わりたくて」

「なるほど。おつけ。じゃ、剣持つて、外に来てよ。千冬さんから、外出許可取つておくからさ」

悠季だけにある特別権限だ。悠季は自由に外出可能だが、篠はそれが通用しない。だから、悠季が篠の外出許可を取るのだ。悠季も一緒なら、大丈夫だわ。

「じゃ、俺はマッサージ椅子にずっと座つてるかな」

「一夏、あれそろそろへたつてきてるから、壊れたら弁償してね」

「げ。わ、わかった。壊さないよつとあるよ」

普通は壊さないもんだ、と突っ込む悠季。そんな下らない事を話しながら、楽しく食事を済ませた。

場所は変わつて、アリーナ。特別に照明を着けてもらい、悠季は闇魔刀を地に刺し、それに寄り掛かっていた。

「待たせたな」

「ん？いや、全然」

篝が、美しい装飾をした刀を持ち、アリーナに入つてくる。闇魔刀を地面から抜くと、悠季は篝に近付いた。

「綺麗な鞘だねえ」

「ああ。緋宵あけよい」という刀だ。江戸時代から伝わる名刀でな

「へえ。抜いていい？」

「いいぞ」

闇魔刀を渡しつつ、緋宵を受け取る。鯉口を切り、素早く抜刀した。

剣の軌道が衝撃波となり、地を走る。そのままアリーナの壁にぶつかり、切り傷を付けた。

「いつ見ても、お前の抜きは速いな」

「3、4回しかここで抜いたこと無いけどね。それにしても、すご

いな、この剣。業物だよ

「まあな。私が抜いたことは無いが……」

「持つてみなつて」

抜き身で渡す。ずしりと伝わる重量は、筈の身体にじっくじくる。

「確かに。……悠季、お前のこの剣は？」

「闇魔刀^{やまと}っていう剣だよ。父さんの叔父のスパークアーダって人が使っていたんだ。それのコピー品を、父さんがどうからわからぬんないけど調達してきて、僕にくれた」

「複製品？」

「うん。詳しく述べ知らないけど。

闇魔刀は魔剣だよ。ていうか、僕と父さんが使ってる剣は全部魔剣。闇魔刀は、『闇を切り裂き食らいつくす』、『人と魔を分かつ』、『意志を持つ』剣って言われてる

刃がなぞった所だけ白くなり、光が筈を照らす。闇を切り裂く。その言葉を確かめたく、筈は闇魔刀を抜き、空に空振りした。

刃がなぞった所だけ白くなり、光が筈を照らす。

「これが魔剣……」

「まあ、そんなところさね」

横で見ていた悠季が言った。闇魔刀を振るために預かってた緋宵に、片手で逆手で持っている。

「持つたときから、不思議な力を感じていたが、これほどとは……」

「剣 자체はね。^{ファンタジー}お伽話みたいだけど、魔力を持っているから。使用者自体の魔力に応じて、更に強くなるのさ」

でも、と言葉を濁す悠季。箒がそれを聞き漏らさなかつた。

「魔力も、何も、全てつて訳じやないんだよ。いくら強い武器があつても、どんなに強い力を持つ奴がいても、強者でも偉くも何とも無い。確かに、力が無ければ守りたいものは守れない。だけど、僕は、力より大切なモノがあるつて信じてる」

「……ボーデヴィッヒか。もしや、惚れたか？」

「違うさ。ただ、僕は、力に溺れ、飲み込まれる奴をじこまんと見てきたから、アイツには、そうなつて欲しくないだけさ。アイツ限定じゃない、箒にも、皆にも」

「どこまでも、芯が強く、優しい男。箒はそう思つた。

「私もな、昔は、力が全てだと思つていた。一夏と離れて、姉さんがあんなことになつて……。物事の急な変化に苛立ちを感じ、それを振り払いしたいが故、剣を振り続けていた」

自分の周りがいきなり変わる。幼い彼女には、気持ちの整理が付かなかつた。ストレスで追い込まれそうになつても、それを剣で解消する箒は強いと悠季が感じた。

「同時に、自分の非力さを怨んだ。自分に力があれば、姉さんとも、一夏とも離れずに済んだ、つまりは力が全てだとな。しかし、改めてそれは違うとわかつた。一夏やお前に会つたことでも変わつたし、同時に、自分を見つめ直すことでもな」

「ボーデヴィッヒと自分を重ね合わせて、心配してゐるのか。優しいな、箒は」

いや、と箒は首を振つた。お前の方が優しい、と、悠季に言つた。

「悠季。私がボーデヴィイッヒに抱く気持ちは、同じだと思つ。だから、勝つぞ。その為に、私に剣を教えてくれ」

「今から?」

「ああ。今日は簡単な技でいい。西洋剣でも、刀でもいい。勝つて、ボーデヴィイッヒを救つてやるんだ」

真つ直ぐな眼差し。気持ちは同じ。なら、教えない訳が無い。

「解つた。教える。絶対、勝とう」

微笑みながら、手を差し出す。団結の誓い。手を握り合い、一人は勝つことを誓つた。

剣の稽古を終え、部屋に戻ると、一夏だけがいて、シャルロットはいなかつた。

「一夏、シャルルは？」

「お？ あいつなら風呂に行つたぞ。俺はもう入ったから、既に睡眠準備状態」

「あ……。そり」

ちょうど悠季も風呂に入らうとしていた。しかし、シャルロットが先に入っているとなると、何かしらマズい。

「いいか……。僕も風呂入つてくれる」「おう、ゆっくつしてこよ」

そして、大浴場。

脱衣所にシャルロットの服が無かつた。悠季が不思議に思いながらも、中にはいるかもしづないと細心の注意を払い、腰にタオルを巻いて浴場に入った。

完全に無人で合つた。悠季は腰布を取り、シャワーの方へ行き、身体を洗い始めた。

「迷つちやつたよ……。はあ、誰もいな」

その時、ちよつビシャルロットが戸を開けて入って来た。完全にタイミングの違いである。

ヤバい、と悠季は気付き、隠れようとしたが、隠れられる物など何も無い。すぐに悠季はシャルロットに見つかった。

「悠季……」

「先に入ったんじゃ無かつたのか、シャルロット！」

「い、いや、迷つちやつて……」

「しゃあないよな、それは……」

タオルで身体を隠し、何故か悠季に近付くシャルロット。冷静に腰にタオルを巻いて、隠した。

「ゆ、悠季？ こいつなつちやつたのも、何かの縁だし、といつか、日頃からお世話になつてるから、お礼に背中、流させて」

「え、いこよ別に」

「いや、流したいのー！」

「は、はあ……」

困惑する悠季。何かおかしい。シャルロットは、悠季愛用の牛乳石鹼を、スポンジと背中に着け、優しく洗い始めた。

「どう? き、気持ちいい?」

「うん。なんか、久しぶりだよね。子供の時以来だよね」

「それも、ちょうど別れた時だよね。私達、おじさんの腰へりいの身長しか無かつた頃だよ」

過去を懐かしむ一人。良い思い出もあれば、悲しい思い出もあつた。

「悠季の背中も、こんなにおつかくなつて……。たくましくなつた

よね」

「シャルロットも、綺麗になつたよ。おばあちゃん似でいる」「あ……。ありがと」

母親に似てゐる。彼女にとつて、これほど嬉しい褒め言葉は無かつた。

「悠季も、おじさんに似たよ」

「ああ……。シャルロット、僕は、御祖父様の「ペリーだから、親父が僕に似てるんだ」

「悠季……。それって、どういふ意味かな?」

気になつたシャルロットが、それを聞いた。

「僕は、バーミンガムの教会で、御祖父様の肉と、親父の血で創られた、御祖父様の「ペリーなんだ。だから、親父はある意味、僕の息子なの。」

ま、僕は僕だから、それに変わりはないし

「うん……。そうだよね。悠季は悠季だもの」

私の、大好きな。

その言葉は、聞こえはしたが、敢えて反応はしなかつた。

「悠季。私は」

「そういえば、シャルロット。一人称、変えなくていいと思うよ。あ、ボクから私に変えなくてもいい、ってことね」

話しあいだれつ、と思つて言つたことだつた。シャルロットは、「じゃあ、『ボク』で」と統一した。

「ボク、本当は悠季とペアになりたかった。一夏も構わないんだけ
ど、出来れば……」

「でもか、一夏とシャルロットって、あまり接点無いでしょ？友達
としての仲を深めるなら、一夏の方がいいよ」

「それでも……」

「シャルロットへ学園で、僕としか仲良く出来ないんじや、せつか
く鳥か」から出たのに、楽しみが楽しめてないんだよ？判つてくれ
るかな？」

優しく言つ悠季。本音を言つなり、悠季も彼女と組みたかった。
しかし、シャルロットを思つてこいだ。

「うん……。なら、悠季。今度、何かある時は、必ずボクと組んで

「いいよ」

心の中で、シャルロットを甘えん坊と思つた。

背中の泡を流し、身体を全部洗つてから、湯舟につかる一人。も
ちろん、身体を洗つときは、少し離れた。

しかし、湯舟では、背中合わせでくつこつこする。シャルロット
の希望でこのよつな体勢になつてこるのである。

「はあ～。やつぱり、お風呂つて落ち着くね
「うん。リフレッシュこな最適だよ」

後ろを向きながら、悠季が言った。シャルロットの顔が、すぐそこにあつた。

「悠季……」

「なんだい？」

「やつぱり、横並びで……」

「なんでもいいよ」

悠季は壁に寄り掛かり、シャルロットを手招きする。タオルを湯舟に沈めるのはマナー違反の為、隠すものはないが、悠季は別に見もしない。

足を組みながら、隠すところを隠す一人。シャルロットは手で胸も隠す。

「大胆な子にもなったよね」

「うつ……」

悠季がサラうつと言つた。シャルロットの頬が赤に染まつた。

「背中流してくれたり、ほっぺにキスしたり、もう凄い大胆だね」

「結構気にしてるんだ……。悠季のえっち」

「それ、そつくり君に返すよ。シャルロットのえっち」

「ボ

、ボクはえっちじゃないよつー！」

「冗談だよ」

ふふふ、と微笑む悠季。それを見たシャルロットも、落ち着きを戻し、笑いはじめた。

「悠季……」

悠季の肩に頭を乗せる。ん、と悠季は聞いた。

「呼んだだけだよつ」

気持ちが弾む。」のバストライムを、悠季とシャルロッテはゆっく
りと過ごした。

Mission 11 DRINK IT DOWN (前書き)

”グレー・スケール”を”グレイ・スケイル”と変えてみました。
こちらの方がカッコイイと思いましたので。

「首元がお留守だよ」

「ちひ……」

トーナメント一日前のアリーナ。悠季は、打鉄装備の簫と一緒に剣を交えていた。

「ちえすとおつーー！」

「甘いっ」

悠季から教わったハイタイムで斬り込むが、悠季はバックムーンで、剣の軌道と同じように避けた。

「攻撃の気配をなるべく消せなきや。それと、避けるときはもっとコンパクトに」

「お前のそれは大味だが……」

「僕はここからも動けるし」

「こうじと笑う悠季。ここまで易々と避けられるのも悔しい。

続いて簫は、ブレードで、悠季と同じ四連撃 左斬り払いから始まり、右斬り下ろしで終わる を繰り出した。キレイいいものの、悠季には見切られてしまっている。しかし、大抵の人間ならば、避けられることはまずないだろ？

「それに、意外と無駄が無いんだよ？速度も速いから、射撃はまず当たらない。槍とかも当てるのは難しいだろうね」

「なるほど」

入念に考えられた技だから、勘違いするのはしょうがない。篠はそう自得した。

「そういえば、明日からだね。トーナメント」

「ああ。しかし、この状態で勝てるのか？」

「僕は、篠とは戦合つてるとと思うし、篠も、僕の剣の飲み込みが速いから、イケるよ。やる前に自信無くしちゃダメだよ？」

「ああ。少し聞いてみただけだ」

自信満々という笑みをする篠。これなら、大丈夫だろう。

「明日、頑張りつ」

「ああ」

拳を突き合わせる一人。

どこからでも、かかるでこい。

トーナメント当日。周りはエスカレーターだけのアリーナに、一人だけ制服で浮いている悠季は、氣にもせずに、トーナメント表を見ていた。

「1回戦用……」

「あ、悠季」

自分と篠の名前を探しているところ、シャルロットが話し掛けってきた。

「やつたね。一回戦目、ボク達とだよ」
「初っ端からか……。いいウォームアップにならう」

むつ、と頬を膨らませるシャルロット。悠季はニヤリと笑いながらシャルロットを見た。

「負けないからねー！」

「一回戦目のボーテヴィッチを救う為に、勝たせてもいいつよ」

やる前からハイテンションである。対してローテンションの一夏は、溜め息を付きながら、適当に歩いていく。

「はあ……、籌とランチアと一回戦目……、つて本人登場？」

「一夏ーーー！」

「ヤバいやばい、筹なら互角かもしれないけれども、ランチアには勝てねえよ……」

「互角？甘いな。クラウス・アーツを学んだ私は、今のお前など虫けら同然。

ISの性能が、戦力の絶対的差ではない」と教えてやる

「……俺、死ぬんじやねえ？」

どこかで聞いたことがあるような名言を聞きながら、一夏は頭を抱えた。

一回戦。悠季達の前に戦つたラウラは、圧倒的勝利であった。学校の打鉄といふことも気にせず、ボコボコにしていた。

「 篠？ 行くよ」

「 ああ」

打鉄を展開する篠。悠季はドレッドノートを発動し、魔力の鎧を見付けた。

競技場へ出る。ちよづビシャルロット達も出て来た。

「 さて……。篠、開始直後のステインガーはやめよう」

「 ああ……。多分、一夏が打つてくるからな。カウンターに専念す

る」

「 うん。

一夏。悪いけど、ダシになつてもひりょく

「 ヤリと笑う悠季。策がありそつな言葉を発して。

「 一回戦、始めっー！」

ブザーが鳴り響くと同時に、予想通り一夏が、” 悠季に” スteinガーアで突進してきた。

なるほど、僕と一夏をやらせて、篠を外から撃つ訳か。

独自で推理。しかし、悠季はステインガーを空中に跳んで避けると、篠に一夏への攻撃を任せた。

そこを狙つ様に、シャルルが篠に銃撃するが、悠季は木刀を上から投げ付け、ヴェントにぶつけて、銃口を一夏に反らした。

追撃に、シャルルに急降下しながら蹴りを当てよつとするが、悠季に反応するシャルルは、ショットガン” レイン・オブ・サタディ

”に瞬時に持ち替え、容赦無くぶつ放す。

「それくらい読めたよ。インファイトなら勝てない。アウトなら、
勝機はある……」

「へえ……」

拡散する弾丸。しかし、至近距離で喰らひつもダメージを無視し、
シャルルを蹴り飛ばした。
のけ反つてもいいくらいの高威力。だが、ドレッドノートは全て
の攻撃から身を守る。衝撃も何もかもだ。

呆気なく懐に入られるシャルル。悠季はシャルルの手を掴み、一
夏の方へぶん投げた。

一夏は笄の相手をしているため、そちらへ氣をやる余裕すらない。
笄の剣が止み、チャンスとばかりに雪片式型で斬り付けると同時に、
右からシャルルが飛んできた。

サイドステップで一夏の横を取り、バットの様に振り切る。二人
はまたもや吹っ飛んだ。

必死にスラスターを吹かして制動を掛ける。今のでリヴィアイヴ＝
カスタムのシールドエネルギーは2／3が削られてしまった。

「臨機応変……。敵だけど、流石だ」

称賛を送るシャルル。そこに、一夏が案を出す。

「シャルル。俺が悠季に突っ込んで、零落白夜でキメる。その内に、
外から笄のシールドを削るのはどうだ？」

「悠李に近接で勝てる?」

「勝てる気はしねえ……。ナビ、やつてみなくちゃわからねえ。」「アーッ！」

不思議の國のアリス

瞬時加速で悠季に近付く一夏。その案に乗り、アサルトカノン『ガルム』で筈を狙うシャルル。

竇は銃口を見て、ジクザグに移動する。それに、ヴェントで追撃するシャルルは、これで勝てると思い”込んだ”。

「ランチア、俺が相手だー！」

瞬時加速で近付いた一夏に、マグナカルタで振り払う悠季。しかし、シャツフルで避けられ、一撃を当てられる。

振り切った隙を突かれた。零落白夜でやられれば、即負けと見なされるだろう。

「木刀と二刀流で一夏に挑む。」
「どうがいい、と思い、出したくなかった天上天下無双剣を出し、

「本気でこいつをやめ！」

前に木刀を振り払つ。一夏がテーブルホッパーで避けるが、悠季は移動した直後の硬直を見逃さなかつた。テーブルホッパーにまだ慣れていない、一夏のクセだ。その隙を突き、天上天下でステインガーを放つ。

一夏のとは比べものにならないスピード、そして威力。反応は出

来たが、あまりの速さに避けられず、吹き飛ぶ。

悠季は走つて一夏に追い付き、頭を掴んで、地面に叩き付けた。バウンドさせ、一夏が落ちて来ると同時に、マグナカルタで宙に斬り上げる。

体勢が持ち直せない。攻撃と攻撃の間が短く、反撃の芽を摘み取られてしまう。

空中に飛び上りながら、一夏に、剣を使わず、蹴りで追撃する。一夏が上にいる為、蹴り上げる形になる。

また一段階上昇。エアハイクを使い、今度は一夏と同じ高さに上がる。マグナカルタを出し、一夏に一撃。

それだけではまだ終わらない。一夏を踏み、その場に留まりながら一撃、また一夏を踏み、一撃。

エネミーステップと、ヒリアルスラッシュのコンビネーション。踏みながら攻撃し、また、一夏を落とさず、何発も何発も槍でシールドを削っていく。

下では、打鉄のブレードを上手く使い、ジクザグに動きながら、ウェポンマジックで攻撃を防ぐ筈がいた。弾切れを誘発させる戦法、と悠季は読んだ。

案の定、弾切れになり、リロード中のシャルル。それを狙い、瞬時加速で筈が自分の間合いに持つて行く。

しかし、一ヤリと笑うシャルル。筈がそれに気付かないまま、突

つ込んでいく。

笑みに気付き、シャルルと篝の前に一夏を投げ付ける。レイン・オブ・サタデイも脅威だし、まさかの隠し玉があるかもしれない。大胆の攻撃は前に打つため、シャルルの前に投げたのだ。

シャルルが出したのは隠し玉の方であつた。装備していた盾を突き刺し、内装されていたバイルバンカー “灰色の鱗殻”^{グレイ・スケイル} を一夏に放つ。

「あわわわっ！？い、い、一夏っ！？」
「いつでええええつ！！」

見事に一夏の腹部に突き刺さった。一夏のシールドがこれで〇になり、一夏が脱落するが、勢いで一発目を撃つてしまつた。

このバイルバンカーは、リボルバー機構。連射が効くから、余計に質が悪い同士討ちとなつてしまつた。

動搖しているシャルルに、悠季はレールガンを取り出し、魔力を込め、力をチャージし始めた。

約3秒でフルチャージ。照準の真ん中に、目標。

「Sweet dreams!!（おねんねしてなーー）」

汚い言葉を吐きながら、シャルルを仕留めた。

「ド派手でしたね……」

「ああ。篠ノ之とストラトスの作戦は見事だ。デュノアの方も中々
だつたが、相手が悪かつたな」

「織斑君、大丈夫ですかね？」

「あれだけ叫べているんだ、大丈夫だろ？！」

アリーナのモニタールームで、試合を見ていた真耶と千冬が言つ
た。簞の動き、悠季の頭のキレ、どれをとっても素晴らしいの一言
に及ぶ。

「あの戦い方は、奴にしか出来んだろうな。ましてや、一段飛びなど、誰が出来るものか」

「あれって、どういう原理なんでしょう？」

「魔力の足場を作り、それを蹴りつけ飛び上がる、らしい。」「ス
ラスターより小回りが利く移動方ですね。それより、お伽話のよう
な力を使うんですねえ」

「ああ。あれをISの操作と勘違いするのも、仕方ないな……」

勘違い入学であることを思い出した真耶がそれに頷いた。
しかし、辞退は出来た筈だが、何故入ったのだろう。

「あいつの父親が叩き入れたんだ。この前、麻宿先生が来ただろう
？」「はい」

「あれが、父親なんだ。神威 創龍」

「え、ええつ！？それはまた、凄い人を……」

「知っているのか、山田君」

「はい。織斑先生が赴任していたドイツでも、有名だつた筈ですよ？”成功しかしない便利屋”って言われてます、」「なるほど……」

成功……か。

悠季はそれを田の前で見て育つたのだらう。

「神威くんつて、名字で『あれつ？』つて思いましたが、やっぱりそうだったんですね」「

「あいつの機密は、なんなんだろ？な……」

知られているのは創龍だが、悠季もその内バレるのでは無いだろうか？千冬はそう考えた。

「裏稼業の悪魔狩りは、誰にも知られたくない筈だがな、この学園は」

ガードが甘いのやらなんなのやら。悠季の情報が流出したら、大パッキングされるだらう。

「一手二手考えているのか、ここは…？」

先読みしないと、お詫にならない、と考えて居る千冬であった。

「お疲れ。シャルル引っ張つてくれて、ありがとう」

「いや、大体はお前が戦つていたから、私は何もしていいに等しい」

アリーナの中の待合室で、篝と悠季は勝利を喜んでいた。

「いやいや、篠のホームランがなかつたら、もつと長引いてたよ。それに、弾切れさせてくれたしさ」

「そう、か？」

「うん」

「一回りと笑い、篠を称賛した。少し照れ臭くなり、篠の頬がほんのりと赤くなる。

通路を歩くと、救護班に担架で運ばれる一夏と、それを心配そうに見るシャルルが通つて行つた。悠季はシャルルに声をかけ、近付く。

「どうしたの？」

「グレイ・スケイルが効き過ぎちゃつたみたい……。ずっとお腹痛いって言って、顔も青くなっちゃって、倒れたんだ」

「大丈夫か、あいつ……」

「大丈夫だ。一夏はそんなヤワな奴では無いからな」

篠が自信満々に言ひ。一番心配しているのも彼女なのだが。

「でも、一発は酷いんじゃないかな？」

「あれは悠季の所為だよね？ あそこに投げ込まなかつたら……」

「私があなつていた訳か」

「いや、威力はあるけど、そこまではならないと思うんだ」

なにそれこわい、と悠季は呟いた。何か外部から弄られたか、もしくはシャルロットの勢いか。無論、後者であるだろつとは思つが。

担架が見えなくなると同時に、入れ替わりで、ラウラが一人で来た。嫌な顔をする悠季に、ラウラが近付いて来る。

「矛盾しかしていないな、貴様は。力が總てではない、そつまざいたのは、どこの誰だ？」

「つるせエな。いい加減にしねエと、」ヒで^ツ飛ばすぞ？ベッドの上でヒイヒイ喚いてな、クソガキ。

ま、どちらにせよ、後でママが恋しくなるように痛め付けてやるよ

「私に、親はない」

「ああ、そうかい。力を求め続ける余りに、縁でも切られたか？次第に周りに見離され、お前は一人で寂しく野垂れ死ぬ。その程度のクズが。何が軍人だクソッタレ」

「悠季、いくらなんでも言い過ぎだよ！――！」

「……私には、肉親など、最初からいない」

「あつそ。だから？力で家族を創ろうと？めでてエ話だね、そりや。自分で自分の首を締めているだけさね」

普段の悠季からは考えられないような罵言。シャルロットが流石に止めようとしたが、彼は止めなかつた。

「……家族がいなからうが、力だけに固執するのは間違つてンだよ。お前の大好きな、僕の親父なら、そう言つね」

「ランチア・ストラトス。貴様は、私が屍にしてくれるわ」

険悪なムード。どちらからともなく、離れていく。シャルロットと篝は悠季に着いていく。

「悠季。酷過ぎるよ」

「ランチアだよ、シャルル。口喧嘩ぐらいならいいだりつ。決着は試合でつける。そこで助け出す」

「ランチア」

幕が悠季を見ずに呼ぶ。ランチアもそれに答へ、見ずに言つた。

「なに?」

「呪き潰せ」

「あいよ」

恋のしこのか、粗暴なのか。

只一つ、この口ひべせ、誰でも判ることがあった。

異常に、相性が良すぎる。

トーナメント表を見た限りでは、一回戦目は、悠季が望んだラウラとの対戦であった。相方は一組の知らない子。元々は、クラス代表だつたらしい。鈴がその地を奪つたのだから、可愛そうな子だな、と感じた。

一回戦は5分後。最初から、ラウラと当たることになる組み合わせである。

ピットに、籌と共に向かう。闇魔刀、天上天下無双剣、マグナカルタ、そしてエレクトロヘヴィ。魔具だけで圧倒は出来るだろうが、圧倒するだけではつまらない。

しかし、筹から「叩き潰せ」との命だ。

それならば、手数で潰せば良い。

エレクトロヘヴィは案外、威力が然程高くない。勿論、人体に当たれば重傷か死傷だが。それでも、ISの上からなら大丈夫だろう。

「悠季、出るぞ」

「あいよ。少し待つて」

ちゃんとドレッドノートを開く。魔力の消費はそれなりに激しい。しかし、無感覚であるのと変わらない悠季には何の問題も無い。

筈が先に飛び、悠李が後から駆け、跳ぶ。一種のファンサービスだ。空中で縦に二回転、左に三回転、着地と同時に、闇魔刀を構えてキメポーズ。観客からは驚きの声が上がった。

「気が済んだか？」

「ああ。充分だ」

「それは良かった。墓標となるこの場所で、未練もなく死ねるな」

「G o b l o w y o u r s e l f . (× × × × してな。) お前の妄想にはウンザリだ。今すぐ眼を醒ませさせてやるよ」

「……下賤な」

教育上マズいスラングだ。審判の教師が慌てて競技を始めた。

案の定、悠李はラウラに突っ込んでいく。闇魔刀の鞘を握り、疾風居合という、変則的な技でラウラを斬つた。

進路上の次元と、目の前を斬り刻む技。誰もが、初見である。見切られることは、まず無いだろう。

「A I C が……効かないだと……」

アクティブ・イナーシャ・キャンセラー。ISの動作、実弾兵器を、ラウラの専用機・シュヴァルツェア・レーゲンの一定範囲内において、完全制止させる。制止させる物体に集中していないとダメだが、それでも、悠李は止められなかつた。

「貴様ッ！ やはりIS適合者ではないな！！」

「フツ、御名答！！」

天上天下でハイタイムを繰り出し、打ち上げる。エアハイクで追

い、闇魔刀で、無数の斬撃を浴びせる”黒蘭”を放つた。

「があつ……！」

苦しむ声。それを無視し、エレクトロヘヴィに持ち替え、“エアスラッシュ”を繰り出した。ギターが鎌に変型、ラウラを斬り付ける。一夏と同じ様に、落とわずに攻撃し続ける空中殺法。

エアスラッシュとエネミーステップの間に、瞬時にデスイービルの一射を入れてくるのだから、余計に酷い。シールドエネルギーなど、そろそろに〇になりそうだ。

篝は、軽く元クラス代表をいなし、その様を見ていた。開始1分半。完全な出来レースかと思われるかもしれない。しかし、これは真剣勝負なのである。

「貴様アアア！」

「そんなに地が恋しいか？なら――」

攻撃を止め、思い切り下に叩き付けた。

「地面と熱いキスを交わしな――！」

地面に出来るはクレーター。ベーゼビヒルカ、セックスになつている。

悠季はゆつくじと地に足を付け、ラウラを見下ろす。

「ぐ、ぐうつ……」

「こんなモンじゃないだろ？もつといこよ」

悠季を睨みつけるラウラ。恐怖がその視線に含まれていた。

怖い。憎い。それらの感情を押し殺そうとする、自分の弱さが腹立たしい。

片目の眼帯を外す。金色に輝く瞳。擬似ハイパーセンサーとしての働きを持つ。ISの適合率を上昇させるためにされたナノマシン移植手術。

それに失敗したがために、オッドアイになってしまった。

振り切り、立ち上がり、レールカノンで煙を上げ、それに隠れながら、手刀で斬りかかる。一か八かの戦法。倒すなら、これしかない。

「くたばれ、化け物！！」

手応えがあつた。はずであつたが。

ドンピシャで、魔力を張つてガードされた。ロイヤルガードが一つ、"ジャストブロック"。

「まだまだ……っ！！」

一発で諦めない。何発も、何発も、斬撃を浴びせる。しかし、悠季の反応速度に敵うことが出来ない。ジャストブロックが成功し続ける。

「恐怖を振り切り、立ち向かう……」

「なにを……！？」

「それが、力だ。それが強さ 則ち、心の一つ、"勇気"だ」

防ぎながら喋る悠季に、ラウラが気付いた。

「そして、恐怖に怯えた自分を許す”優しさ”、自分を叱る”厳しさ”。気付いてくれたなら、それでいい。僕は、君を救えた」「……息子どの……！」

ラウラの顔に、自然と笑みが浮かぶ。解放されたような笑みが。「息子どの。もう、綺麗事だとは思わんぞ。だから……。もう、決着を着けよう」

「OK……。全開で相手してやる……！」

一歩、間合いを取るラウラ。進む手刀のプラズマ。片手の魔力。

「ハアアアアアツ！！」

先に動くはラウラ。ガードされても構わない。この一撃に、総てを賭ける。

「Catch this, Laula!! (これでも喰らいな、ラウラーー)」

動きに合わせ、この前の創龍と同じ様に、カウンターを決める。溜めた力を放出する。ロイヤルガードが一つ、”ジャストリリース”。一つは対となり、合わざることによつて、本領を発揮する。

壁に吹き飛ぶラウラ。HSの損害が大だ。

負けた……。心地好く、負けた……。

過去の自責をするも、この戦いに悔いはない。ラウラはむづくりと闇に意識を落とした。

その程度か、貴様は……。

しかし、ラウラを休ませることを、エリが許さない。

貴様は、力を求めているのだろうーあの男の言ひなりになつて、どうするー！

「ふるさい……。力の意味が分かつた以上、今は……。

その程度の者だつたか。ならば見せてやるつ、より強き、
”力”をー！

…………そして、貴様を食らつてやるつ。

勝利を確信した悠李が、背中を向け、ピットへ戻ろうとした時、背後から悪寒を感じた。

振り向くと、ラウラが黒い何かに包み込まれ　いや、呑み込まれ、巨大な女性の像を作り出す。

「千冬さん……？」

それは酷似していた。左手にブレードが形成され、悠李に素速く振り被る。

閻魔刀を出し、一太刀を受け止めた。
重い一撃。耐えるのが少しだけ辛かった。

「ランチアーー！」

「第一、今すぐ千冬さんを呼べーー！観客は皆退避しろーー！」

外部からの客も来ている、このトーナメント。何か怪我でもあれば、この学園が叩かれる。

しかし、悠李はそれ以前に、彼らが邪魔だった。犠牲を出したくはないし、何かの邪魔を入れられたくない。

「貴様、後ろから止めたな……。何者だーー！」

掠れた声で黒のモノが言つ。それがラウラのものではないと言つことはすぐに分かつた。

「殺氣丸出しの攻撃なんざすぐ判るさ。それより、お前はなんだ?」「私は 力の具現化。ヤツの欲望を表し、そして敵えたモノだ。

そして、私がやる」とは、貴様を殺すことだ」

「……その割にや、掃き溜めの臭いがしやがる」

ギロリと悠季が睨んだ。間違いない、コイツは悪魔だ。

「太刀田が来た。ドレッドノートを解き、天上天下で打ち返す。クローンの千冬は大きく弾かれ、隙が出来た。

悠季が見逃すはずがない。ハイタイムジャンプをし、闇魔刀に持ち替え、空中連斬で吹き飛ばす。それをエアトリックで追い、すぱんと腹部辺りを一閃した。

「ラウラッ!! そんなモンに呑み込まれるな!! そんなちっぽけなモン、自分で飲み干せ!!」

斬られた田からラウラが出て来る。田が閉じられ、ぐつたりとしながら。

「And therefore to be unnecessary

「y!! (余計なことをしゃがつて!!)」

「それが、お前の本質か」

黒い物体が英語で話し掛ける。悠季は変わらず日本語で返した。

「This takes the puss, but we would have been even more powerful! (その小娘を取り込み、私は更に強大になるはずだったのに!!)」

「Ha, what you say? The howl of the loser only hear.（何か言つたか?負け犬がほざいてるのしか聞こえないが）」

「Fuck!! Kill you now!!（クソッタレ、殺してやる!!）」

「Come and get me. And if you can.（やつてみな?出来るもんならな）」

実体化した怨念、悪魔。虎のような姿をし、悠季に襲い掛かる。

鋭い牙を闇魔刀で反らし、天上天下無双剣を腹に突き刺し、前に、後ろにと地面に叩き付けはじめた。

黒い虎から出る血。制服でドレッドノートをしていたため、白が朱になつていく。

「Damn!!（くそおつ!!）」

「Go to hell!!（地獄に墮ちな!!）」

上空に放り、鏡花水月で蜂の巣にし、落ちて来たところを、マグナカルタで串刺しにした。

絶命する悪魔。悠季は槍の血を振り払い、地に倒れたラウラを担ぎ、ペリットへ向かつ。

千冬達が到着したころには、ことは既に終わっていた。

力とは何なのか。

暴力？精神？それとも。

あの男は、心だと言つた。しかし、私は……。

あれが、私なのか？

教官には憧れていた。しかし、あの野獸が、私の力か？

違う。そんな筈が無い。私の”心”は、あれを否定している。

私は、心を強さと認めたのだ。あの野獸の様な凶暴さ、傲慢さが強さな筈が無い……！

黙つている小娘！貴様は我が食らわれ、力の拡張となれ！！

ラウラツ！！そんなモンに呑み込まれるな！！そんなちっぽけなモン、自分で飲み干せ！！

貴様は、私の心が産んだ過ち……。

私の中で、消え去れ！！

ラウラが眼を開けると、保健室の天井が見えた。

周りにはカーテンが張られ、誰もいない空間が形成されていた。

身体を起こす。ISスーツのまま、眼帯も無い。

つまりは、あの戦いで倒れ、そのまま運ばれた。

「気が付いたか」

「教官！」

カーテンを開け、千冬が入ってきた。

「寝たままでいい。神威が言うには、ジャストリリークスを喰らつたら、普通はバラバラになってるらしい。手加減はしたそうだが、壁にまで吹き飛んだ威力を見れば、加減の意味がなさそうだ」

言われた途端、腹部に強い痛みが襲った。ISスーツをめぐり、腹部を見ると、悠季の掌大の跡が遺っていた。

「神威……？ 息子どのの姓ですか……」

「ああ。奴は、人種が違う。半人半魔、そしてある意味での人造人間だ」

「訳が判りません……」

「単純に言うなら、魔剣士クラウスというヤツののコピーらしい。」

クラウスは伝説の魔剣士で、2000年前、魔界と人間界とを断絶

した

あの力や、ドレッドノートは、この話を聞いて辻褄が合つ。頭の中で整理した。

「父親がその息子だとさ。相変わらず、並外れた家系だ」

「私は、そんな男と一緒に打ちを……」

考えてみれば、死なずにいるのが驚きだ。

「力を理解できず、むやみやたらに手に入れようとして、溺れていくお前を助けたかった。それがアイツの、今回戦った理由だ」

「……彼には、感謝しなくてはなりませんね」

「ああ。一いつ借りが出来ているしな」

確かに、そうだ。シュヴァルツェア・レーゲンの暴走。所有者のラウラさえ、知らない能力。

「ヴァルキリー・トレース・システムは知っているな？」

「はい。モンド・グロッソ歴代優勝者のデータをコピーした、アラスカ条約で禁止されたテクノロジーです」

「それを使っていた。更に、神威が言つには、それを悪魔が操作していたらしい」

「悪魔？」「ヤツの言つ、イレギュラーな存在だ。詳しい事はアイツか、もしくは”Black Cherry”に電話でもしろ」

下品そうな便利屋。あれが創龍、悠李の家か。とても進んでスマムに行こうなどとは思わなかつたが、それを聞き、興味が少し湧いた。

「今、動けるのなら、着替えて食堂に行くとい。馬鹿みたいな量の食事を取つていいだろ?」

「今、何時でしょ?」

「20・30だ」

もう夜だ。と、なると、半日近く寝ていたことになる。

「それでは、聞いてきます。失礼します」

弱くなってきた痛みを制し、起き上がって制服に着替える。そして、悠季の所へ向かった。

背中を見送り、千冬が呟く。

「私より、まだ若いんだ。悩んで、しつかり何かを掴めよ、小娘」

「お疲れ様ー」

「ああ。流石悠季だ、ボーデヴィッヒも軽い腹部損傷で済んだらしく」

「ジャストリリースであれか。手加減したけど、あれモロに喰らつたら粉々になっちゃうんだよね」

食堂でカルボナーラとパンを平らげる悠季と、その前に、鍋焼きうどんを食べている相方の篝。悠季の隣に一夏、篝の隣にシャルロットと、一回戦に当たったメンバーで食事をしていた。

「いやー、アイツも腹やられたなんて、痛みが判るぜ」

「あっちの方が数百倍痛いと思うよ、一夏」「あれ、この前父さんが僕にやつたのと同じ技だからね。その後、僕は少し吐血したよ」

「マジかよオイ、そんなモン使っちゃやべえだろ」「まあ、あははは……」

笑つて誤魔化す悠季を、シャルルと一夏がジト目で見た。簞だけが、薄く笑っている。

あの状況では、闇魔刀の次元斬か、あれしか安全策は無いだろう。手加減してあるなら、尚更あれしかない。次元斬はシールドごとラウラを斬ってしまう。ショヴァルツェア・レーゲンもジャストリリースでシールドが関係なくボコボコになっていたが。

「噂をすれば、なんとやら、だ。悠季、ボーデヴィッヒが来たぞ」

簞が静かに微笑みながら言ひ。悠季は後ろを向き、ラウラに声をかけた。

「やあ、ラウラ。お腹は大丈夫なのかい？」

「ああ。色々と迷惑を掛けてしまふなかつた。この通りだ」

制服姿で、ペコリと頭を下げるラウラ。腹部が少し痛むようだが、それを抑えた。

「へえ、ガツツあるじゃん。流石軍人だけあるね。それで、どうして謝つたり？」

「貴方には助けられだし、借りも出来てしまつたから」

「僕は、君を助けた覚えはないなあ」

ふふふ、と笑う悠季。どうこうとか、悠季以外にはさっぱり

わからない。

「自分の在り方を提示しただけだよ、僕は。自分がどう在りたいかを決めたのは君自身だ。そんで、あの黒いのに取り込まれずにしたのも君自身。僕は何もしてないよ?」

優しさなのかどうかはわからない。だが、それがラウラにとって優しさに感じ、同時に彼女に自信を付けさせる物になろうとしていた。

「それに、迷惑なんぢ思つちやいない。僕に謝るより、君自身と、セシリ亞と鈴に謝つた方がいいんでない?」

「そうだな。後で謝つておく。では……息子どのことは何と言えばいい?」

「別にいらないよ。後は、その『息子どの』つての、辞めて欲しいかな。確かに親父の子だけど、親父が強いから僕も強い訳じゃないし。僕は僕、親父は親父だよ」

「そうか。なるほど。」

自分は自分にしかなれない。ラウラが千冬になることなど、できっこない。

なら、『ラウラ・ボーデヴィッヒ』になればよい。それにしかならないし、それが最良の選択の一つであることに、間違いは無いのだから。

そして、悠季に言ひべき言葉が、一いつ分かつた。

「ありがとう、悠季」

見たことのない、非常に可愛らしい笑顔を見せながら、悠季に礼

を言つた。悠季は、笑つてそれに応えた。

「私も食事を取るかな。相席しても構わないか？」

「うん。いいよ。みんなで食べよう」

また一人、仲間が増えた。心強く、また自分を見つけた、新しい
仲間が。

Mission 12 真実の知田（前書き）

M12まで行きましたね。しかも知らない内に10万文字突破、お気に入り件数もいっぱい、評価もたくさん。これも皆様のおかげです、本当にありがとうございます。

50部田です。ギャグセンスはありませんが、ギャグミッションのつもりです。

食事を済ませ、ラウラに聞きたいことがあると言われ、悠季は彼女を自室に招いた。無論、悪魔の事である。

「さて……。何から話そつか?」

「悪魔のいる理由、出現する理由を」

「奴らは大抵人を狙うために出でくるんだよね。それは、現世を今だ侵攻せんとするからさ」

「本当に、幻想じみてるな……」

「それが現実で起こってるんだから、信じざるを得ないでしょ?」

ベッドの上に腰掛けっていた悠季の隣に座るシャルロットが横から言つ。ラウラは悠季のソファに座つていた。

「それを狩るのが僕と親父って訳だよ。親父は、伝説の魔剣士クラウスの実子、僕はクラウスの肉と親父の血で創られた、人造の半人半魔」

成る程、教官が言つていたのはこうことか。ラウラの中で、一つの疑問がなくなる。

「蛙の子は蛙、ってね。ある意味、それを継いでる訳だよ。まあ、親父は複雑な関係の親父なんだけどね」

「複雑ではあるな」

理解は追いついている。問題はない。

「二千年前、魔界とこの世界は繋がってね。魔帝ムンドウスの手下だつた御祖父様と、叔父様のスパークダが、ムンドウスを封じ込めたんだ。だけど、魔帝なしでも魔界は活動してる。彼らにセオリーアはない。あるとしたら、臭いだ」

「臭い？」

「掃き溜めの臭いがするんだ。奴らは」

鼻を指す悠季。スマートで嗅ぎ馴れたから判る。創龍も実際に掃き溜めと言っている。

「後は、魔界も階級があるんだよ。でも、君らには関係ない。君らは僕に教えてくれるだけでいい。ISでも、勝てないもんは勝てない」

「無理をするな、といふことか？」

「そりゃない。『一切戦うな』って言つてんだ」

人差し指を突き出し、ラウラを指した。

「軍人だろうと何だろうと関係無い。僕に全て任せてしまい。それが君達にしてほしい、一番の事なんだ」

「成る程。判つた」

「同じく。君の役に立つなら」

悠季に賛同する一人。勿論、シャルロットは最初からその気であった。

「んで、ラウラ。僕の事は、シャルルとか以外の人間がいる時は、ランチアと呼んでくれ」

「ああ……。それは、本名がバレれば、裏が騒ぎ出すからだろう?」

「うん、その通り

判つてることが多いなら、やつやすい。

「悪魔のお話はこれで大体終わり。君のエリの悪魔は、もつといないよ。」ラウラ自身が、呑み込んでしまったからね

見たことの無い悪魔ではあつたが、悠季はそれを言わなかつた。少なくとも上級悪魔であつたことに間違ひは無い。

「DRINK IT DOWN……か

「どうしたの、いきなり急に」

「いや、頭に浮かんだだけだ。

そちらの情報をただ聞いただけでは、そちらの割が合わないだろ？。私の生まれと、この眼について、教えよう

親がいない。彼女自身、そう言つていた。

孤児なのか、と悠季は思い込んでいた。

「私は、試験管から創られた」

しかし、彼女は予想の斜め上を行く産まれ方であった。

「遺伝子調整され、鉄の子宮で産まれた。産まれたときから、ドイツ軍に入ることが因子づけられていた」

「成る程」

悠季と同じ様な産まれ方。あちらは科学的、こちらは魔術で産まれた子。

「何度も身体も弄られた。お前との闘いで見せた、この左眼も、エジとの適合性を上昇させる為に、手術された。越界の瞳（ヴォーダン・オージュ）と言つてな、擬似的ハイパー・センサーだ。適合に失敗して、オッドアイになつてしまつたが」

言い方が悪いが、ドイツのモルモットの様に思えた。悠季とシャルロットは真剣にそれを聞く。

「見る世界が悪い意味で変わつた。部隊では落ちこぼれ、何度も苦惱した。その時に現れたのが織斑教官だ。あの人のおかげで、私はトップに返り咲き、同時に、自分の心の弱さが力に固執させた」「なるほどね、だから千冬さんを慕つている訳か」

「ぐぐり、と静かに彼女は頷いた。悠季は微笑みながら言つ。

「憧れを持つのは、自然な事だ。僕だって、一時期は親父に憧れた」「ああ。今はそう思つている。前までは、教官になりたい、と思つていた。しかし、お前と会つて、変わつた」

自信有りげな眼で、ラウラは言つた。

「私はラウラ・ボーデヴィッヒだ。私はラウラ・ボーデヴィッヒにしかなれないし、また、他の奴もラウラ・ボーデヴィッヒにはならない。心の強さを重んじる、な」

「わかつてんじゃんか。流石だね。つてことは、一夏も？」

「ああ。あいつはあいつだ。教官の弟がどんなであろうと、織斑一夏という存在は、認めなくてはならん。あいつはまた、教官とは違つた強さがあるし、心は私より遥かに強いと思う」「前とは人が違うな……」

悠季とシャルロットが、人間的成长に感心した。歳は殆ど同じだ

が。

「何か強さか……。もう見失わない。私は、自分の魂を信じるわ」「なんか、かつこいー……」

厨「病を再確認。悠季は苦笑いした。

「部隊長としても、恥ずかしくない自分を出せるな……」

「くつ？ 隊長なの！？」

「へえ……。部隊名は？」

「シユヴァルツェア・リーゼ。日本語訳で、黒ウサギだ」

その部隊名に、悠季は聞き覚えがあった。何かしら店に、『ドイツ軍のシユヴァルツェア・リーゼ、クラリッサ・ハルフォーフ』という人間が、やけに『日本の漫画の入手』をしていた。一週間に一度はその依頼が来る。その度に、悠季は漫画をスクーターに積み、ドイツ軍に運びに行くのだ。しかも、深夜に。

「クラリッサ・ハルフォーフさんって、その部隊だよね？」

「何故知っているのだ？ 確かに、クラリッサは副部隊長だが

「何か、漫画読みまくつてない？」

「ああ。アニメのDVDなどもな」

「やっぱし……。それでいいのかドイツ軍……」

「黒ウサギの名前を付けたのもアイツだ。行き着けの店から取つたらしい」

段々シャルロットも感づいてきた。しかし、「Black」しか名前を取っていない。

ウサギは何処から来たのか。

「その漫画を運んでるのは僕だよ……。」Black Cherry

y の……」

「創龍殿だけがやっていたのではないか！」

「便利屋は四人経営なんだよ。漫画は、僕だけでやっていたけど」
クラリッサとは親交がある。あちらでの数少ない親友の一人で、
彼女が休日の日は、呑みにまで付き合わされる。

「な、なんだ。取り敢えず、黒ウサギ隊もよろしく……」

「う、うん……」

知らぬ所で繋がっていたラウラと悠季。シャルロットが苦笑いしながら、その話を聞いていた。

Mission 12 真実の告白（後書き）

「なあ、籌。聞いていいか？」

「なんだ、一夏？」

「学年別トーナメントで優勝したら、悠季とか、俺とか、シャルルとかと付き合える権利があるって言つてたが、なんで俺らと買い物に行くの？」「そんなんが必要になるんだ？」
「……さあな」

この鈍感大悪魔め！！

翌朝。シャルロットが女子用の制服を着、ぐるぐると鏡の前を回っていた。

「可愛い制服」

「ただいま～。ん、シャルロット、似合つてもんじゃない」

トレーニングを終えた悠季が、部屋に入ってきた。シャルロットが悠季に近付き、スカートを手で広げ、見せびらかす。

「可愛いよね、この服」

「うん。あれ？ 今日からだつけ？」

「そうだよ！ これで女の子として通うの！ ボクじゃなくて私になるんだよ！」

別にどっちでもいいよ、と悠季が言った。いい加減な反応に、シャルロットがふう、と言った。

悠季はシャワールームに入り、朝の汗を流し始める。

「……まあ、でも、ボクって使えばいいか。悠季も使つてるし」

『シャルロットの”ボク”っての、僕は好きだよ』

「更に使おつと」

シャワールームのドア越しにされる会話。10分でシャワーを終

え、上半身裸で出でくる。

シャルロットは、それに見惚れてしまった。

おーい、とシャルロットの手の刃の前で手を振る。はつと我に戻り、シャルロットは刃を擦った。

その時、ドアからノックの音がした。

「シャルロット・デュノア、ランチア・ストラatos、いるな？」

千冬の声だ。はーい、と悠季がドアを開けると、千冬がいつもの黒スーツでした。

「おはよう、千冬さん」

「ああ、おはよう。

デュノア、今日から女子としての生活を始める前に少し知つておいて欲しいことがある」

「はい、何でしちゃう?」

シャルロットには予想が着いた。部屋割の変更だろ。

「その通りだ」

「読心術まで……。僕と同じ、半人半魔なんじや……」

「つまり、この部屋から離れることになつたんですね?」

「ああ。今日から、別の部屋に移動だ。ボーデヴィッシュと相部屋の、1156号室になる。ストラatosに荷物は運んでもらえ。そして、もう一点。お前の資金の援助についてだ」

「資金?」

学費などだらう。デュノア社の後ろ盾が無くなつた以上、払うことは出来ない。奨学金や特典ではどうにかならないのだろうか。

「デュノア社と縁を切つた以上、これからは資金が回つて来ない。

そこで、だ。神威のその金と、Black Cherryの資金援助という一括が取られた。勿論、創龍氏には承諾を取つてある。どうする?」

悠季も別にそれで構わなかつた。一人じゃ在学中に半分も使えまい。

「学費は、自分で貯います。母が遺したお金があります」

「……愚問だつたな」

「創龍が管理しており、またシャルロットの為に、金を増やし続けていた、母の遺産。ここから、学費を捻出する。」

「代表候補特権での、資金援助も参加しておいた。まあ、大丈夫だ。最後に一つ。デュノア社のお前のパーソナルデータは、こちらで破壊しておいた」

ハッキングか。本当に、シャルロットとデュノア社との関係を断ち切つた事になる。

「念には念を、とな。神威氏の忠告だ。少し知り合いでしらべつた」

「……ありがとうございまーす」

複雑な気持ちだらう。実父との関係が絶たれた今、喜んでいいのか、悲しんでいいのか。

千冬とシャルロットが話している最中に悠季はタンクトップと制服を着る。

「それと、神威。お前に聞きたいことがある」「なに?」

「今度の臨海学校、お前が行くかどうかをな。私達の万が一の為に、お前が来るか、学園の万が一の為に、ここに待機するかどうかを決めてくれ」

「無論、行くけど。」うちに誰か置いてきちゃこいんでしょ？「なら、キリエさんか親父に連絡して頼む」

「それなら、いい」

問題なし。父親と違つて、悠季はまちやんとしている。

「デュノアは食事後、職員室にて待機」

「わかりました」

笑顔のシャルロット。よし、今のところまひとまづ安心だ。

「じゃ、後々」

「ああ。つたぐ、面倒かけすぎだ……」

最後の方の愚痴を聞かなかつたことにし、悠季達は千冬の背中を見送つた。

そして、朝のHR。

真耶が入ってきて、困ったような声を出した。

「今日は……、転校生を紹介します」

悠季は机に突つ伏して寝ていた。これからクラスがぎゃーぎゃー騒ぎ出すのだ。何か聞かれるのが面倒だから、意識を落としておく。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてようじくお願ひします」

「えーっと……。『トコノアくんは、『トコノアさんと』いひじでした……。はあ、ややこしい……」

クラスが騒ぎ出す。予想的中。そして悠季に視線が集中。しかし悠季は睡眠中。

「えつ、じゃあ……」

「織斑くんとストラトスくんって……」

「混浴してたの？！？」

一夏が冷静に否定した。彼は、悠季が入った30分前、一人寂しく上がり去っていたからだ。

「一夏アアアアツ！」

地獄耳チャイニーーズ・鈴が、甲龍を展開しながら、壁をブチ破つてきた。

「なにやつてんだ！しかもそれは校則違反並びに器物損壊！」

「つるさいつ！死ねつ！」

聞く耳持たず、襲い掛かるうとする鈴。しかし、シャルロットがそれを止めた。

「ちょっと待つた！ボク、一夏と入つてないよ？」

「嘘よつ！」

「だつて……一夏に対して、そういう気持ちは持つてないし。それに、入つたのは悠季とだし」

「なんか酷いことと言つちやイケないこと言つたな……」

感づく一夏。シャルロットは一夏に大丈夫だとウインクで知らせ

た。その仕種に、数人の女子が心奪われたそくな。

「ちゅうと待つた。デュノアさん、今『悠季』って言つたよね？」

「……げつ！」

真耶の言葉。一気にまた、悠季に視線が集中した。

「へえ……。ランチャくんつて、悠季つて呼ばれてるんだ」「まつたく、関係ないあだ名だけどねえ？」

バラした。シャルロットがバラしてしまった。

「何があつたかと思えば……。おい、神威」

そして、後ろから入つた千冬。寝ていた悠季を手荒に起こす。

「んあ？ 千冬さん？」
「先生と呼べ馬鹿者。デュノアがお前の本名をバラしてしまった。腹を括つて自己紹介しろ」

「あ、なるほど」

悠季がその場で立ち上がつた。そして、改めて。

「ランチア・ストラトス改め、本名は神威 悠季です。入学と同時に、この学園に雇われた便利屋さんです。そして、皆さんより一個年上です」

「な、なんだつてえつ！？」

どうぞの漫画で見たことのあるよつな空氣。悠季は続けた。

「出来れば、今まで召乗つっていた『ストラトス』と呼んで欲しいのですが」

「神威。もう問題ない。職員会議で、お前の情報の秘匿はもう必要ないと決定した。これから手回しで、外部からのお前の情報は、お前の家族以外に知らせることはない」

「だそうですので、やつぱいいや」

やつば茶苦茶だ、この学園は。

やつ思いながらも、悠季は口に出せなかつた。

3 (前書き)

なんか色々とおかしいですが、勘弁してやつてください。

「結局、何もない一日だったなあ

「質問攻めにあつただろ？」「……」

授業が終わると、悠季は久しぶりに、篠と一緒に射撃場に来た。いつも同じS-Pを的にぶち込みながら、篠は悠季と話す。

「ところで……。あの

「なあに？」

「お、お前は、デュノアが好きなのか？」

直球。悠季は備え付けのベンチの上で寝転がりながら答えた。

「家族という関係としてなら好きだよ。異性としては、あまり意識してないかな」

「そ、そうか」

篠の心中に安堵感が産まれた。勢いに任せ、自分のことも聞いてみようとする。

「な、なら、私は」「

「僕は、異性として意識する人はあまりいないね。残念だけど、未だ篠もそれなんだ」

「うう……」

「ラウラも、鈴も、千冬さんも、セシリ亞も、山田ちゃんもね。別にホモでもないけど」

親しい関係の女性達だ。しかし、恋心は抱いていない。

「ま、努力次第だね」

「むひ……」

マグチエンジの最中に、幕が唸つた。カートリッジを装填し、スライドを引き、また発射体勢に戻る。

「まだ、恼まなくていい年頃だとは思つけどね、僕は」

「お前はな……」

恋は恼むものだ、と幕は付け加える。そうかい、と軽く返し、悠李は笑つた。

「でも、今この関係が、僕には一番合っているのかもね」「私は、はつきりさせたいが……」

「そのうち、誰が彼女なのか、どうなのかも決まるよ」

微笑む悠季。あどけない笑みに、少しだけ幕の口元が緩んだ。

そうしてまた撃ち始めると同時に、ラウラが中に入ってきた。

「うつす

「一人だけか?」

「まあね。ラウラも撃ちに?」

「ああ。実銃も扱つておかないと、腕が鈍つてしまつからな」

自前の拳銃を出し、的へと向かう。流石現役軍人、中心へと命中させていぐ。

籌も負けじと中心を狙い、撃ち込む。」ちらも中々のものだ。

「改めて思うが、弾丸とは美しいものなんだな」

「え？」

「弾丸は、先は丸いが、常に真っ直ぐだ。芯があるし、壁に当たつても、突き進むとする」

トリガーを引きながらラウラが話す。彼女の変貌ぶりはとてつもない。

「真っ直ぐとは、包み隠さぬことでもあるだろ? な……」

「なに、この詩人展開」

悠季が小声で突っ込んだ。ボーデヴィッヒ先生、とでも言つべきか。

「これも、お前のおかげだな、悠季」

「詩を教えた記憶はないんだけど」

「そうではない。やはり、行動で表さないとわからないか……」

射撃を一旦止め、悠季に近付く。筹もラウラが何をするかが気になり、銃を置いた。

「心は、真っ直ぐで、優しく、厳しい弾丸のことが強さだと思つ。矛盾点もあるが、使い分けるのも大事だ。私の弾丸は……」

ラウラが悠季の手を掴み、胸を触らせる。筹が顔を歪ませるが、ラウラはいたつて普通の表情だ。

「お前によつて、ここにリロードされた」

「なんか、凄い事してるよね」

「ああ……。今すぐその手を離せ。そして動くな。お前の頭を撃ち抜いてやる」

「これ、僕が悪いの？」

「悪いことなど、お前は何一つしていなこ。むしろ、感謝してる。だが、私は、お前に別の弾丸を装填してもらいたい」

「別の弾が……！」

「悠季、ここにい　え？」

ラウラが必死に背伸びをして、悠季にキスをした。同じタイミングで入ってきたシャルロット、一夏、セシリ亞、鈴が、そして筹が釘付けになる。

なんだこのフラグ！－いらねえよこなん！

心中でそう思つ悠季。唇が離されると、ラウラは背伸びを止め、周りの沈黙を止めた。

「私はお前の嫁になる。決定事項だ。もう取り返せまい」

「は、はあ？」

「私がお前を嫁にしたいが……。お前に支配されたくなつた」

シャルロットと筹が、悠季を睨みつけ。僕は何も悪くないよー、と必死に否定するが、聞く耳を持たない。

鈴は一夏を狙う敵が減ったのにほつとし、セシリ亞は頬を赤くして両手を当てながら、笑顔で悠季を見、一夏は腕を組み、目を閉じている。

次に口を開いたのは一夏。悠季に近付き、肩を叩く。

「悠季」

「なんだよ……」

「結婚おめでとう。だが、トマロは弁えりよ。式はいつがいい？披露宴は？」

「ふざけんな！ノーカンだノーカン！」

「照れるなつて」

「ああもう……ダメだこりゃ」

突っ込む気力さえ起きない。といふか、色々と吸い取られた。

シャルロットと篝に睨まれながら、エス学園の”神威 悠季”としての初日が幕を閉じた。

翌日。休日の朝。

「ふわあつ……」

いつも通り、トレーニングの為に、朝早く起きる悠季。眼を覚まし、起き上がろうとするが、右手に何かが引っ付いているのが解つた。

一人部屋になつたばかりだ。誰かが入ってきたというのか。いや、それなら千冬か真耶から連絡が来るだろう。

問題の腕を見る。裸の、銀髪の小さな少女がいた。そう、ラウラだ。

「つたぐ……。どうもつて入つてきた……。起きる、ラウラ」

身体を手で揺らし、起こうとする。やがて、ラウラが眼を覚ますと、軽く瞼を擦りながら悠季を見た。

「なんだ、もう朝か……？
「何時頃入ってきたんだよ」
「ん……。確か、2時頃」

それは眠い筈だ。今は午前5時。およそ3時間しか睡眠してない。

「身体壊すぞ」

「なに、馴れているや」

「馴れても、壊れるもんは壊れるし、まだ成長期なんだから、成長に支障を来す」

「お前がそういうなら……。仕方がない」

腕から離れないラウラ。悠季はラウラを引っ付けたまま立ち上がり、彼女の額に人差し指を指を弾いた。

「きやんっ！」

「離れる。それと、僕に何もしていいよな？」

「…………？ただ寝ただけだが…………。クラリッサから、夫婦とはこういう風にすると聞いた」

「なにやってんだ、あの人は……」

大人しく離れるラウラ。悠季はタンクトップとカーゴパンツに着替え、外へ出る。

「何処へ行く？」

「日課」

「ああ、トレーニングか。私も着いていく」

「服は？」

「今、ジャージがある」

鬼の速度でグラウンドを走り、重負荷を掛けた筋トレをする悠季に、ラウラが付いてこれる筈が無かつた。

「ひらが一周走る最中に、5度は抜かれる。ラウラが腕立て伏せを100回終えると、悠季は片手の人差し指で、逆立ちしながら200回もやっていた。腰には一つ10kgの円筒形の鉛が5つずつぶら下がっている。

外転筋だけでなく内転筋も鍛えるため、軽負荷のものも、回数を増やしてやっている。ちょうど今、スクワット1000回が終わって所だ。

「よし、終わりだな」

「先に帰つていいよ。」の後、籌と稽古があるから

「さあ、まだ続けよ」

悠季は、ふつ、と吹き出す。そして、ラウラと共に剣道場へと向かい、筹と真剣の稽古をするのだった。

その後、場所は食堂へと変わる。朝食をシャルロット、一夏、セシリア、鈴と共に取る。ラウラと筹はまだ剣道場で稽古をしている。

「今日どうする?」

「買い物に行きたいな」

シャルロットが悠季に言つた。別に構わないのだが、予算はどうするのか、何を買つのかが気になつた。

「なるほど。臨海学校が近いから、”M・I・N・U・G・I”を買いたい訳だな、シャルロット」

「なにか凄い動作が見えたけど……。その通りだよ」

一 夏に感想を述べるシャルロット。

「なんでもまた水着?」

「察しなさいよ」

好きな相手に可愛い水着を見せたい、そういう意図があるから欲しいのだろう。

「聞くのは野暮ですわよ、悠季さん」

「聞かないよ。じゃ、食事終えたら行こっか」

「うん」

買い物の代金は勿論悠季持ちだ。使つても無くならないのだから構わない。

「私も行きましょうか」

「つか、皆水着買いたいから行きたいんだろ」

「そうだけど? 勿論、私たちの水着代は悠季持ちだから」

悠季の苦労がまた増えそうだ。一夏は苦笑いしながら、悠季を見た。

「お前も大変だなあ」

「別に? お金なら沢山あるから。つか、使ってくれないと部屋が札束で埋まる」

先程の言葉を撤回する。一夏は羨ましく思った。

「俺にもなにか奢れよ」

「パフェでも食べるかい？」

「パフェオンリーじゃ甘い！！バイキングだ！！」

「おつけー」

「」「リと笑う悠季。アタッシュケースが一個無くなつそうだ。

「」「わざわざ。先に行つてよ。シャルロット、行こつか
「うん」

二人は横に並びながら、不思議な空間を作り出す。シャルロット
がさりげなく悠季の手を握り、更にその空間は立ち入り辛くなつた。

「ぐぬぬっ……！なんか腹立つわ……！」

「でも鈴さん、あの一人はカップルではないのですよ？」

「尚更ウザいわ！」

怒る鈴を無視し、昼の食事にしか頭にない一夏。セシリ亞は、こ
の間に挟まれて少し困惑してしまつていた。

Mission 13 ステキなお買い物（後書き）

剣道場

「左がお畠守だぞ、ボーテヴィッシュ！」

「足元ががら空きだ！ 真つ一つにしてやる……」

互いに木刀で打ち合ひの箒とラウラ。悠季の取り合ひのつもりが、いつの間にか別に真剣勝負になつていて。

ラウラが右肩からを一閃され、箒は下から一直線に驗り。真剣ならば、相打ちだろ。

「ふつ……。引き分けか」

「そうみたいだな……。ふふつ、中々楽しませてくれるじゃないか、篠ノ之」

「いっちはんの台詞だ、ボーテヴィッシュ」

何かが彼女達の間で田覗めた。手を出し合って、固く握る。

「悠季を狙うライバルとして、認めてやる」

「ひけりいや。織斑一夏はくれてやるがな」

「つ……。どちらか選んでみせるわ」

ショッピングモール「レジナンス」。IS学園から一駅の、巨大なそのモールは、駅をもモールの一部としていた。

女性用の水着売場にて、悠季はシャルロットの試着を見ては色々と感想を述べていた。

「これなんかどうかな？」

「もうちょっと淡い色の方がいいかな。これは？」

シャルロットに、悠季が選んだ水着を渡す。少しオレンジがかつた薄い黄色に、パレオの着いたビキニ。中々際どいとシャルロットは思う。同時に、自身でも可愛いと感じ、気に入った。

「よおし、着ちゃやお！」

試着はタダだ。買うのはその後でも良い。試着室のカーテンを閉め、今渡された水着に着替える。

「悠季～？終わったか～？」

「ちよつどいいや、一夏。シャルロットの水着も見てあげてよ」

試着室外で、悠季と一夏が話しあじめる。シャルロットの水着を見るために、彼女が着替え終わるのを待つた。

カーテンが開かれる。素直に、可愛い、と悠季と一夏から褒めら

れた。

「これ、お尻も際どいんだけど? ラインが……」

「パレオがあるから良いんでない?」

「俺もそう思う。つうかシャルロット、似合い過ぎだ、それ」

「そう? ありがと、一夏」

「僕の「一夏」は正しかったよつだ……、ふふつ」

「うん、それは真実。それじゃ、これを買うよ

「みう」

試着室のカーテンを閉め、制服に着替える。今日は一夏も悠季も皆制服だ。悠季の制服の着方は色々とおかしいが。

胸元のボタンを2つ開け、袖を捲り、スラックスはブーツの外に、皺くぢやになるようにしている。魅力の肉体に、赤いアミコレット。ファッショングセンスは良い方だろう。

「おまたせ~」

「よし、Go to the registerだ、悠季」

「はいよ

札束を取り出し、水着を持って会計を済ませた。

「悠季~!」これも買つて~!」

「はいはい、待ちなさいって」

続いて、鈴の買い物。水着は勿論、他の物も買わされていく。

「もづ、最づ高!」

「代金持ちは僕だけどね」

「だから良いんじゃない！！」

悠季の札束を、我が物顔をして使う鈴。片手に諭吉が何人いるのか、誰にも分からぬ。

「はつはつは、私こそ真の成金無双よーー！」

「誰に言つてんの？」

どや顔で鈴が言つ。それを突つ込む悠季に、鈴は「ニニニ」といふ誰か」と言つた。

「そうそう。悠季？ 篠が、誕生日が近いって知つてた？」

「いや？ 初耳だけど……」

「悠季、今すぐ誕プレ買えっーー！」

一夏を狙う敵を減らすため、そして何より篠の為に、鈴は言つた。

「何買つたらいいのかわからんや……」「リボンとか、アクセサリーとか……。身に付けられる物がいいと思つ」

ネックレスが目立つかも、と悠季は考えた。シルバーアクセサリーの店に行き、ネックレスを見る。

「これなんてどう？ クロスのやつ」

「僕、十字架はあまり好きじゃないんだよね……。この、指輪が付いたやつが良さそう」

指指した物は、10万もある、ペアリングの付いたネックレス。思い立つた悠季は、即座にそれを購入した。

「後は……。オーキスも買ってつけよう

「さ、金銭感覚が狂つてる……」

別のジュエリーショップに行き、大きなオニキスと台座、金具を
買い、ペアリングの間にオニキスを付けた。

「はい、魔除けの完成」

「へえ……。魔除けねえ。いいセンスしてるじゃない」

「そう?」

大切に、アクセサリーが入っていたケースに仕舞い、懐に入れた。
果して、筈は喜んでくれるのだろうか?

「気持ちが大事だけどね……」

「10万円使つといで、それはないわ……」

「えーっと、今日の鈴の出費はじゅう

「大丈夫!! きっと喜んでくれるわよ~」

「変わりすぎだって」

くくっ、と笑う悠季。しかし、それだけ買つても金は余る。

「よし、次は

「鈴さん? 少し悠季さんをお借りしますわね!」

「あたしの財布が無くなつた……」

僕の扱い……、と悩みながら、悠季はセシリ亞に拉致されていつ
た。

「……」は少し淡い青の方が良いと思つのですが、悠季さんはどうで

すか？」

「濃いほうがいいんじゃない？」

セシリアも水着のチェックを悠季に頼んだ。今回はセシリア自身が代金を払う。

「このヘアレスも変えたいのですが……」

「そのままいいと思うけど？それをライトブルーにしてみてもいいとも感じるね」

「成程……。では、こいつのはいかが？」

フリルの付いた、スカイブルーのヘアレスを手に取り、悠季を見せた。彼はそれもいい、と行ったので、セシリアはそれを買うことにした。

「あとは日焼け止めと、パラソルと……」

「日焼け止めなら、化粧品売り場に相当強いのがあったよ？化粧水と一緒に買っちゃえば？」

「そうですね、そういたしましょう。パラソルは……、このカラフルなので良いですわね」

ファッションセンス再発動。悠季のセンスはセシリアをも凌駕する。

「本当、悠里さんがいらっしゃると、助かりますわあ……」

「そういうのなら、大歓迎なんだけど、僕に女装させよつとするのやめてくれないかな？こんなごつい体で女装は地獄絵図だからね？」

何かと苦労が絶えない悠季であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331w/>

IS × DMC ~ Infinity Devil ~

2011年11月29日19時47分発行